

君の強味さ。つまり執へ轉んでも、損はない譯さ。」大塚はさう言つて愉快さうに笑つた。

(11)

「しかし資本を引出すための結婚は、僕も厭ですな。」安住はうつかり其の口には乗らないといった風で首を捻つてゐると、大塚もにやりと笑つて、

「さう言へば然うだが、君も何うせ何かやらなければならんからね。」

「そらさうですけれど、僕は葉子を差措いて、他に妥協的結婚などする意志は少しもないですよ。」

「智恵子は嫌ひかね。」

「困りますね、そんな事をきかれちゃ。」安住は冷笑気味で、「勿論葉子と結婚するしないは別問題です。永久に出来ない相談かも知れません。それでもいゝと思ひますが、唯最近葉子と接近する機会がないので困ります。今迄僕は葉子のために、随分金を費つてゐます。それを惜しいとは思ひませんが、清瀬なんて女が傍にゐて、葉子を撃肘してゐるのが不愉快なんです。」

「葉子に逢つて一度よく話してみたらいゝぢやないか。そして葉子の本心を聞いてみるんだ。君は臆病で、それが出来ないぢやないか。何か漣子に頭の上らないことでもあるんぢやないか。」大塚は抑捺半分で詰つた。

「僕がですか。笑談ぢやない。其こそ恐いですよ。」

「最近は何んな様子だつたんだね。」

今迄金作は漣子や葉子の素振について、一々大塚に報告しては其の判断を仰いでゐた。葉子の一撃一笑が、金作の心の上に、明い光りを見せるにつけ暗い蔭を投げるにつけ、彼は大塚のところへ来て、それとなし悩みを訴へずにはゐられなかつたが、最近は何く葉子に逢ふ機会もなくて過ぎた。

「さうですね。月の半頃に、熱海から繪葉書を寄越したさうです。僕にも遊びに来ないかと言ふんで漣子と二人らしかつたんです。それも漣子が葉子に書かしたものと睨んだので、僕はいつもの手だと思つて行かなかつたんです。それから一度逢ひましたが、何でも漣子と別れてしまひたいやうな話でした。僕もそれは大變いゝから、さうしなさいと言つて賛成したんです。其の時、もつと詳しい相談をしようと思つたんだけど、他に人もゐたし、葉子はその話を避けたいやうな風でした。それから何の事もないんですが、今日行つてみると、漣子は病院へ入つてゐる始末なんです。」

「いや、あの手術は大分前からの問題でね。しかし漣子の入院中にロケーションに出かけるといふのも可笑しいぢやないか。」

「荒井つて随分冷淡ですな。」

「そんな事平氣な男だからね。あんな風ぢや今にひどい目に逢ふよ。その代りきびくした奴でね、まあ男性的といへば男性的だ。」

「しかし變なんですね。熱海から歸つてから、急に葉子が漣子を忌避するなんて。あの旅行で、何か喧嘩でもしたんぢやないでせうか。事によると葉子はもう荒井のものになつてゐるんぢやないでせうかね。」金作は暗い表情をした。

「さうね。さういへば須永も何だかそんな事を氣にしてゐた。何かそんな形跡があるのかね。」大塚も思ひ惑ふらしく、「まさかそんな事もあるまいが、女は弱いからね。それに葉子はその時々、氣分で行く女だからね。スクリーンの上に現れた彼女を見給へ、實によく表情が變るからね。」

「荒井とをかしいでせうか。」

「さあね。」靖夫も首を傾げながら、

「まあ漣子に反抗をもてば、一つ鼻をあかしてやれといった調子で、何んな氣紛なことをしないと限らないが……荒井を愛すると愛しないと別として……あゝいふ中へ入つてゐると、どんな女でもさういふことに興味をもつやうになるからね。自然荒んで行く譯さ。」

さう言つて彼は歎息した。

金作はしよげてしまつた。何だかそれが事實であるやうに思へてならなかつた。

「それで可いんですか。」金作は大塚の落着いてゐるのが腹立しかつた。

「いゝも悪いもないぢやないか。さうすれば傍觀してゐるより外はない。」

金作は呆れた顔をした。

(四)

大塚の積りでは、金作がいつまでも葉子などを、追つ駈けまはしてゐるよりか、智恵子と握手した方が、郷里の氣受もいゝだらうし、蜂子からもくれぐれ頼まれてゐることなので、さうでもして東キネの財政を整理する一方、ともすると跳出さうとする智恵子の始末をつけたらと思ふのであつた。それは智恵子がこのごろ餘り自分に接近して來たのが、氣にかゝるといつたやうな、大塚自身の内面的な動機もあつて、少し細工がすぎはしないかと思ひながら、金作に逢ふたびにそれとなく持かけてゐた。金作はそれが不満であつた。今日のやうに露骨に言はれると一層反感が起つた。葉子が、旅から歸つてくるのが、待切れないやうな氣持になつた、そのまゝ其處を飛び出さうかと思つてゐると、遽に戸を叩いて和服姿の智恵子が姿を現した、そして安住のゐるのに氣がつくと、ちよつと赤面したやうに躊躇した。

「御用談ぢやなかつたんでせうか。」

「いや、介意ひません、どころか却つて好い折です。智恵子さん、まだしみるゝ安住君と話した事はありませんでしたね。」

「何うしてそんな事をおきゝになるの。」智恵子は熱した目をして反問した。

「何故つてこともないが、人間はお互によく話し合つてみないと、兎角妙味が出ないからね。」大塚は

「悦げた目をして、「どんな人間でも親くなつてみると皆な好いところがあるもんですよ。」

「さう。」智恵子は揶揄つたい表情をして、「何だか變ですわね。厭にお説教みたいなことをいつて。」

「いやね、安住君は知つてのとほり、絶えず葉子で悩んでゐる男なんだ。この愛の悩みほど苦しいものはないんだから、智恵子さんなんか、傍観してゐないで同情してあげたら何うかといふんだ。」

智恵子は「又か。」といった風で悪戯な目をして、

「でも駄目ですわ、私なんか第三者の同情が何の役に立つものですか。それに安住さんの場合は、何も失戀といふ譯でもないんですもの。今は映畫で夢中ですけれど、あの人の心持が少し靜つて來たら安住さんの好意に感ずる時がくるでせうと思ひます。」

「成程ね。」と大塚は抑捺半分で、

「女てものは何故直ぐさういふ氣休めを言つて澄してゐられるんだらうね。」

「どうせ私など淺薄ですもの。」

「それ處ぢやないんだよ。葉子について、今大問題が起つてゐるんだ。今度のロケーションで、あの女の運命もすつかり變るだらうと云ふ話なんだ。」

「何かさう云ふ事があるんですか。葉子さんに戀人でも出來たんですか。」

「何うだか判らんがね、——尤もおそかれ早かれ、誰かの犠牲にはなるよ。それは仕方のないことだと

思つてゐる。」

「え、でも葉子さんの事ですからね。私信じてゐますわ。きつと安住さんの愛に動かされる時が來ます。今だつてあの人は随分その事で苦んでゐるんですもの。」

「へえ。それはお座なみぢやなしにかね。女同志で智恵子さんにわかるかね。」

「あの方だつて、別にさう皆さんが思つてゐらつしやるやうな變りものでも意地張ぢやないんですもの。今迄の行掛り上あんな態度を取つてゐるんでせうけれど御自分ではきつと濟まないと思つてゐますわ。」

「成程ね。すると貴女は安住君の味方だね。」

「味方だか何だか知りませんが、私はさう思つてゐますわ——でも何うですか、私の見方が淺薄なのかも知れませんわ。」

安住はそれだからと言つて、すぐ調子に乗る様な風も見せないで、格別注意を拂ひもしないやうな態度で黙つて耳を敏くしてゐるが、智恵子を通して葉子の氣持が仄かながら通つてくる様な感じであつた。

智恵子はそれだけ言ふと、もう格別興味もなささうに、話を大塚の翻譯の仕事の方へ移して、「旅行はいつですか。まだ行つしやれないの。」と言つてゐた。

(五)

今まで安住は親しく智恵子に觸れたこともなかつたので、唯新しがつた生意氣な女とばかり思つてゐる

だが、割合におとなしやかな處もあるやうで、つい振向かうともしなかつた自分の態度を取ちたが、しかし其も葉子に好意をもつてゐる見方が、この場合何となく氣に入つたので、思ひがけない處に自分の味方を發見したやうな感じはしたが、智恵子を葉子と取換へるやうな氣持には逆もなれなかつた。

する中大塚は來客があつて、一寸下の應接室へおりて行つた。

「あとで晩飯を食べに行かう。」大塚はさう言つて二人をおいて行きがけに、歸りさうにしてゐる金作に向つて、「まあ話してゐたまへ。葉子ばかりが女ぢやないのだからね、少しは教養のある人とも友達になつておくさ。」と笑ひながら言ふので、智恵子は顔を紅くして、

「ひどいわ大塚さん。」と苦笑してゐた。

残された二人はしばらく向き合つたまゝ、沈黙を續けてゐた。

「今度の作品は、大分大がぶりだと云ふ風評のやうですが、何んなものですかね。」金作は暫くしてから訊いた。

「さうですか。でも大分お甘いものゝやうでした。鑛山の労働問題か何かだとかですから。」智恵子はてきばきした調子で、「何しろ鑛山の實寫が大變なんださうですが、撮影はきつと面白いでせうと思ひます。おいでになつては如何ですか。」

「さうも思ふんですがね、しかし餘りあんな所へ顔を出すも莫迦にされますからね。葉子も僕の行くの

は厭がるんです。自然鶴見のスタヂオへも、この頃さつぱり顔出しゝないんです。」

「それあさうね。それかと言つて葉子さんが清瀬澁子の保護の下にあるやうでは、家へ行つたつて矢張駄目でせう。旅行するたつて、やつぱり澁子がつきつきりですからね。」

「貴女は葉子と一緒にになる機會があるんですか。」金作はきいた。

「私でしたら、女のことですし、澁子と云ふ人が割合厚意をもつてゐてくれるものですから、まあ音楽會やお芝居なんか、偶には御一緒に رفتたこともございますの。會社はお互に競争者の地位に立つてゐるんですけれど、私にはそんな偏見もございませんからね。」

「それぢや葉子を尤も好く知つてゐるのは貴女かも知れないですね。」

「まあ親しい點ではね。それに女優たちはとかく低級な人が多いんですから、仕事のうへの交渉以上には、餘り付き合つちやゐらつしやらないでせうからね。」

「男優は何うですか。」

「え。何しろあの方はまだ幼ですもの『アトリエの花』のときだつて、相手の男優が少し熱烈すぎて、接吻なんか氣がは入りすぎて困つたなんて、そんな事もいつてゐらした位でしたからね。だから戀愛ものは困るなんて……でも仕方がないでせうね。舞臺のうへの事ですもの。旦那さまが俳優で、舞臺のうへで、相手の女優が腕にもたれるところを、奥さまが見物してゐて、大變に焼餅をやいて、作者に抗議を

申し込んだといふ話しも、西洋にはございますけれど。」

安住はそんな話しは耳にもかけず、

「今度一つ貴女に葉子を呼び出していただいて、何處かへ一日遊びに行きませうかね。」

「え、何か機会がございましたら……。」智恵子はやゝ迷惑さうに、

「でも私葉子さん以上に無粋ですから、却つて興を殺ぐかも知れませんわ。大塚さんも一緒でしたら、都合がいゝでせうと思ひます。」

「大塚君は駄目ですよ、葉子をおだてゝ活動界へ投りこんだり何かして、僕には案外同情がないんですよ。」

「え、あの方は自分の意志や細工を加へることが嫌ひなんですから。」智恵子は自分流に説明した。

(六)

大塚は大分たつてから上がつて来たが、ちよつと気色ばんだ風だったので、二人は何事かと思つてゐると、大塚は「困つたな。」と額に手をあてながら

「僕ひよつとすると、是から田舎へ行かなくちやならんかも知れない。」と、溜息をついてゐた。

「何うなすつて？」智恵子がきいた。

「いやね、今来たのは日東會社の男だがね、葉子の身のうへについて、あちらで何か問題が起こつた

やうだ。」

安住も遽に緊張した表情になつた。

「問題つて何ですかね。」安住はいつもの大様な態度できいた。

「何か撮影上のことなんですか。」智恵子が又訊いた。

「いや、その點でも少しごたくしてゐるらしいが、それよりも田舎の叔父と葉子との間に少し問題が起つたらしいんだ。これあ起りさうな事でもあるんだ。大體叔父さんの承認を得ないで、飛出して来たので、しかも活動女優などにならうとは、叔父さんも意外だつたらうからね。それがその地方へ實寫に出かけたんだからね。」

「へえ、それ意外ですね。何もあの叔父が文句を言ふ資格はない筈ですがね。」

「さうも行かんだらう、何しろ君のところへ葉子を片着けてうんと持參金を占めようとしたらあの叔父だから。ところで恚うなんだ。葉子もさすがに叔父さんに悦んでもらふつもりで、訪ねて行つたものらしいんだ。叔父さんも悪い氣持はしなかつたんだが、元來餘り質のいゝ人間ぢやないんだから、活動へ出すのは、己が不承知だといひ出したものらしいんだね。今度の撮影にも加はらせまいといふので、籍のあるのを盾に取つて、さすがの荒井を手古摺らせてゐるさうだ。結局落ち行く所は金の問題だといふことは、わかり切つてゐるんだが、吹かけ方が大きくて出来ない相談を持ちかけてゐるところを見るとや

つばり葉子を取戻して、安住家へをさめようといふのかも知れないね。そんなものは突ばねてしまったら可かりさうなものだが、そこが人氣商賣なんだね。新聞なんかにも書き立てられてゐるんで、何うか葉子にも會社にも傷をつけないで、丸くをさめたいと言ふんだ。」

「貴方に來て下さいといふんですか。」安住は騒ぎもしなかつた。

「まあさうなんだが、僕が行つたところで、仕様のない話して、それよりか寧ろ君が行つた方がよくはないかと思つたもんだから、今その男を下に待たしてあるんだがね。君から言へば、叔父さんの尻押をした方が、むしろ得策かも知れないが……。」

「いや、それ駄目です。あの叔父が間に介在してゐるのでは、葉子は益々意地を張るばかりなんです。」安住はさう言つて暫く考へてゐたが、それでなくても今度のロケーションが氣にかゝつてならなかつた。今夜にでも東京を立たうかと實は先刻から腹で思案した位なので——たゞ葉子の後を追かけまはすやうに、あの連中から妙な冷笑を浴せられるのが不快なので決しかねてゐたのであつた。

「會社の方ぢや、僕の保證もあつて引受けたことなので、今更身寄の人から、そんな難題を持たまれる筋はないと言つてゐるんで、勿論金の相談に應ずる理由もないんだ。君が行つて何とかその叔父をなだめてくれたら……いづれ其も金だらうが、何うかならんかね。」
「なに金さへやればいゝんでせう。いくらだと言ふんです。」

「一萬圓とか……。」

「はあ……。」安住もちよつと目を丸くして、「そいつは何うも……しかし僕ちよいと行つて見ようかな」「行つてくれるかね。」

「行くのは譯ないんですが、一人ぢや少し……。」

「けどあつちへ行けば、荒井君もゐる事だから。僕が行つても仕様がなからね。」
そこで下に待たしてある男を呼び入れた。

道草

(11)

安住が荒井などの滞在してゐるといふ温泉場へ着いたのは、その翌日の午後であつた。その日は雨降りで、荒井たちは一日酒に浸りながら、旅の徒然を葎や花に紛らせてゐたが、「安住さんの若旦那がお出になりました。」と、この界限切つての資産家のことだから、女中たちも善く知つてゐて丁寧に取り次いだくらので、一行のためには却て都合がよかつた。

さすがの荒井もそんな處ではだらしない襦袢姿で、挨拶も態度もいきなりであつた。

「いや、わざ／＼貴方の御足勞を煩はすほどの事でもなかつたんですよ。大塚君に若し都合がついたら一晩泊りで来てもらへないかと、實は大塚君の責任ですから、さういつてやつたのです。」荒井はちやうど男女三四人で花をあそんでゐたが、さすがに恐縮したやうに言ふのであつた。

「さうですか。いや、僕もさう言つたんですが、才賀の方は鬼門だから僕に行つてくれと言ひますので。」
「成程。」荒井は脚へた葉巻の煙に、ばつちりーといふよりか、ぐり／＼した大きい目と目の間に皺を寄せながら、花札を見てゐたが、何かぶつ／＼と言ひながら、手から札を棄て、場をめくつた。
「どうも酷いことになるものだ。今朝から一度もぎんみを取らない。なぞは運がわるいね。」荒井はさ

う言つて、また安住の方を向いて、

「こつちは初めてですが、何うも恐ろしく陰氣ですな。」

「さうですか。尤も是から冬はいけません。」安住は辯解するやうに言つて、「こんな處においでになるなら、少し遠いですがけれど、僕のところへ御案内するんです。」

「いや、この連中で押かけた日には、兵隊さんのお宿どころの騒ぎぢやありませんよ。」

「しかし何ならお歸りに……。」

「有難う。事によつたら二三人でお屋敷を拜見に行くかも知れませんよ。」

すると同じ仲間にゐた撮影監督が、遽に思ひついたやうに、

「どうです社長さん、そのお屋敷が使へると、大變結構なんですがな。」

「さう／＼。」と荒井も氣づいたやうに、「安住さんのお屋敷なら打つてつけどらう。」

「いや、そんな大したものぢやありませんが、何う云ふ舞臺なんですか。」

「鑛山の持主の邸宅ですが、室内はとにかく、門のかゝりや庭園なんかセツトでは面白く行かないだらうと思ひまして、來たついでですから、事によつたら寫さしてもらふかも知れません。尤も暴徒ですけど、破壊するやうなことはありません。」監督は笑つた。
荒井は花に夢中になつてゐたが暫くすると下りることになつた處で、

「葉子の叔父——才賀ですか、あの爺さんなか、因業ですな。貴方の會社の使用人ださうですが、色妨害をするんで、困りました。何か東キネの須永が手を廻してゐるんぢやないかと、そんな風にも考へられるくらゐで、ちよつと手古摺つてゐるんですよ。」

「そんなに因業ですか。そんな奴でもないんですがね。何か感違ひでもしてゐるんぢやないでせうか。安住は首を傾げた。

「こつちは別に感違ひをされる筈もないんだがね。尤もこのシナリオは鑛山のストライキですからね初めは快く承諾してくれましたが、一兩日してその筋が少しわかつて来たもんだから、鑛山の方で苦情を言ひだしたんです。己達の山をつかつて、そんな實寫をやられちや堪らないといふんだから驚いたね。それには才賀はじめ二三村民の煽動もあるやうだが、どうも事情がよく判らない。何に可ければ使はない分の事ですがね。」荒井は憤懣の語氣を洩した。

「それで葉子は何うなつたんです。」

「これでもす、そんなストライキの活動に出るやうな奴なら、警察の力を藉りても、壓迫してくれると言ふんでね、本籍のあるのを盾に取つて、悪酔い痰呵を切りやがるんで、安住さんの前ですが、實に何うもこの土地の人氣の悪いには驚いてゐるんです。」

「さうですか。」と、安住も呆れたやうな顔をしてゐた。

(11)

彼等連中は、廣い部屋を二間ばかり占領してゐたが、花を引いてゐるのは、別に取つてある荒井の部屋で、大きな瀉の汀にある建物の一末端の方であつた。ひた／＼と水の浸してゐる其の邊一體に枯葎が生えてゐて、鶯が餌をあさりに降りてゐた。雨中の景色がまるで水墨のやうに、模糊としてゐるのであつた。葉子はどこにゐるのかと、廣間の方を見遣つたけれど、その姿はどこにも見えなかつた。

「それで葉子は今どこにゐるんですか。」安住は氣にかゝるので訊いてみた。

「葉子さんは齒が痛むんで、昨日午後町の齒醫者へ行つたきりで、まだ歸つて来ませんが、昨夜は多分叔父さんのところで泊つたでせう。事によると抑留してゐるのかも知れないが、あの叔父に負けてゐるやうな女でもないから、今に歸つて来るでせうが、或ひは少しごたつてゐるのかも知れない。」監督の山岡はさう言つて顔を曇らせながら、

「何しろこつちの代物に文句をつけられちや遣切れないから、事によつたら、いつそのこと役を振替へしまつた方がいゝかと思ふんだが、荒井さん何うですかね。」

「それでも可いだらう。」荒井は氣のない返事をしてゐた。

初めから葉子にこの主役を振ることが、山岡監督の氣に入つてゐなかつた。彼から言へば駈け出しの葉子に、かう云ふ長巻もの、主役をふるのは荷が勝ち過ぎるばかりでなく、外の俳優との振合上、映

畫氣分の均衡を無視する事だといふのであつた。

「作品の價値からいへば、自家でやつたものゝなかでは、寧ろ二流どころの映畫ですけれど、何しろ場數が多いんですから、山野さんではちよつと不安な點もあるんですよ。それも山野さんの役がないのなら、氣の毒ですけれど、立派な役があるんですよから。」山野は主張するのであつた。

「けどさう決めてあるんだからね。」荒井は容易に賛成しなかつた。

彼等は花はそつち退けにして、その話しの方へ興味を惹かれてしまつた。

「一體どういふ筋なんですか。」安住も好奇心を起した。山野が素から葉子を重要視してゐないことは、彼も知つてゐた。それも其の筈で、彼の戀愛關係にある小林むら子が、葉子が日東へは入つてから、今までツルミ・スタヂオのスタアとして輝いてゐる光りを、ともすると奪はれさうに見えたからであつた。

現にそこに其のむら子があそびの仲間に加はつて、先刻から黙つて花を引いてゐるのであつた。彼女はもう二十七八の年増であつた。日常の女としては、むしろ葉子以上に美人筋のとほつた素直な顔の持主で、様子にもいはれぬ意氣味があつた。たゞ、スクリーン面へあらはれたところでは、線が弱々しくて、それほど引立たないのであつた。動作もどつちかといふと纖細くて、力に乏しかつた。

「筋はむしろ有觸れたもんですよ。」山岡監督は答へて、

「しかし前受はたしかです。つまり鑛山のストライキ・ロマンスと言つた様なもので、ストライキの指

揮者である青年坑夫が、鑛山主の令嬢と思想や境遇のうへから熱烈な戀におちる。それはその青年が、最初その鑛山を苦心して發見した或坑夫の子であると云ふ地位におかれてゐるんで……ところで長いあひだ其の老坑夫も資本家の下に働いて、到頭ハツバにふれて坑内で慘死してしまふ。しかし別にこれと云つて酬はれるところもないといつた具合で、青年がつく／＼考へるのです。自分の生涯もあゝいふ風にして終るのだと思ふと、堪らない不安におそはれる。しかし資本主の命令で、學校も好い加減に止めさせられて、もう十年近くもこつ／＼タガネを揮つてゐたのです。すると爆發の動機がくるんですね。詰り鑛山の債權者が若い華族で、それに令嬢を娶はせて山の經營をつゞけようといふ、持主の腹でその若い華族がつまり令嬢ぐるみ鑛山を奪つてしまはうとしてゐる、そこに衝突がおこる譯なんです。葉子はその青年坑夫の妹で、鑛山主の小間使といふ、うつつつけの儲かり役があるんですよからな。」山岡は一氣に辯じ立てた。

(三)

すると荒井は「成程。それあ受けさうだね。」と連りに頷きながら、

「その妹の方に何か面白い見せ場があるのかね。」と訊くと、山岡監督は一層調子に乗つて来て、

「それありますとも。令嬢と大の仲好しで、二人の戀の仲立に役立つてゐるので、同じくその青年に戀をしてゐる主人の妾に憎まれて、散々迫害を受けながら、却て妾の祕密を發いたり、令嬢と力を合せ

て、債権者の華族排斥に骨を折る一方、坑夫達と警官隊とのなかに立つて、女ながらも危険を冒して双方を調停すると言つたやうな働きをするんですから、監督次第では主役の令嬢よりも、この方がむしろ人氣の中心になるかも知れないんですがな。」

むら子もその時、傍から口を出して、

「實際儲かる役ね。でも葉子さんは、さう云ふ役はやつぱり厭なんぞせう。花形役者の矜を傷つけるやうに思ふんでせう。」

「そこがさすがに幼稚なんだ。藝術と自己とをまるで混同してゐるなんか、實際頭腦のない役者の通弊なんだ。」山岡は慨はしさうに言ふのであつた。

「大規模のもんぢやありませんか。」金作が言つた。

「何しろ十三巻ですから。それに今度はカットを十分贅澤にやらしてもらはうと思ふんで、結局は少し平凡ですが、その筋で睨まれると困りますから、勞資協調で解決をつけておくんです。尤も華族と坑夫と、青年同志、階級を超越した感激が互の若い胸に脈をうつて共鳴しあふのがヤマで、華族と妹との間にも戀愛が成立つことになるのですから、詰り二つの戀愛が實を結んで、芽出度し〜になる譯です。」

「しかし切取を贅澤にといふけれど、さう不斷にやられても困るね。須永のやうに、あれは遣りつけると辭になつて可けないもんだよ。」荒井は苦笑しながら、

「その役のことは、かゝる前に葉子とも能く打合せをしておいてくれ給へ。今聞いたところでは、その妹の方が、なか〜腕がいるやうだから、むら子さんにうんと馬力をかけてもらはないと畫面がだれやしないかと思ふがね。」

「は、さうも思ふんです。」山岡は頷いた。

「私どつちでも可いわ。」むら子は嫣然しながら、

「妹の方が出場が多くて、しかも山を駈けまはらなくちやならないんでせう。私、心臓がこんなでせう。」と胸をそつと抑へるやうにした。

山岡は「うむ、うむ」と頷づいてゐた。

「それよりも才賀の奴には弱つたね。」荒井は安住に話しかけて、「山だつて、今月なんかまるで休業同様だつていふぢやないか。坑夫に渡す給料が三月も滞つてゐるといふぢやないか。實際行つてみたところ、どこにも煙一つ擧がつてゐないぢやないか。」

「實際ひどい不景氣のやうですな、各仕事場の現業勞作の實寫ができないと、興味が無いんですがな。」山岡もいつた。

「それよりも山を撮らせるのか何うか、早く決めてくれんと困るな。」荒井が悟かしさうに、山岡は速に外に目をやり乍ら、

「明日は天気らしいですがね。」

(四)

こたくしてゐるうちに時間がたつた。こんな事でいつ話が纏まることかと、安住は他事ながら氣がもめる位であつたが、しかし間もなく汽車の疲れを休めに一と風呂入つてくると、山へ交渉に出してあつたとみえて、使者の男が歸つて来て、結果を荒井に報告してゐるところであつた。それによると作品の内容が少しも過激性を帯てゐるものではなくて、却て労働者達の教訓になるものだといふ、こつちの説明にひどく感心してしまつて、警察の方も山の方も、安々通過したらしいのであつた。

「どうもそんな物を作つてみたところで、警視廳で許可する氣遣がないんだから、何も田舎の警察や資本家が心配する必要はなさうなのに、妙なことを言ふもんだと思つて、色々探つて見ました。果して才賀が警察の人に悪い智慧をつけたものらしいんです。山野葉子誘拐と云ふのも、勿論才賀の口から出たことで、これは警察の方でも、何ういふ風に取扱つていゝか處置に困る——といふよりか、面倒だから、うまく妥協してやつてくれゝば可いと云つたやうな口吻でした。これには大塚といふ主義者も關係があるので、會社の方ではそれと今一人、東京にゐる實父の大住某なるものゝ保證で採用したんだといふことを説明しましたところ、それなら尙のこと會社に責任はないが、法律上のあらそひとなると、多少面倒だ。しかし才賀もそこまであらそふ意志はないらしいから、いくらか金を掴ませたら可いぢやな

いかと、至極穩かな話してして。」

使者に行つた事務員らしい男がさう言つて話してから、

「今日は才賀は出ませんか。」と訊いた。

荒井は意を得たやうに頷いてゐたが、

「今日は降るから来ないだらう。ぢや仕事はいつ初めても可いね。」

「それあ明日にでも。」

「實際撮影を初めたら、山では少し驚くかも知れんね、ピストルやダイナマイトで戦闘を遣りはじめたら……。」

「それあかまはんでせう。」

「ぢや今度才賀が来たら、突放ねてくれよう。裁判にでも何にでもしろつてんで、それに安住さんもちやうど遣つて来てくれたからね。」

「僕が来る必要はなかつたやうです。」安住は張合のない調子で言つた。

「いや、警察は面倒だから、さういふ事を言つてゐますけれど戸籍は才賀の方にあるんだし、實際養育もして来たんだから、出様によつてはちよつと面倒ですよ、そこは一つ安住さんに宜しくお骨折を願つておきます。その代り何か又御用に立つこともありません。」荒井は如才なく依頼した。

安住は社長の荒井にさう言はれると、金で済むことなら是非何うにか心配してみようと云ふ氣にならずには居られなかつた。

「あの男のことですから、金さへやれば何うにかなると思ひます。」安住は正直に引受けた様に言つた。荒井もきつとさう出るだらうと思つてゐたので、ちよつと擦つたいやうな微笑を浮べて、

「さうね。しかし貴方は鐵道會社の社長の資格で、嚴命したら可い譯だね。」

「何とかしませう。」

「どうぞ。」荒井は心持頭を下げるやうにして、「何にせい、安住さんに御足勞かけたのは恐縮でした。私も澁子が大手術をやつてゐますので、一通り仕事の瀬踏が出来次第、引揚げんければならんで、あとは御覽のとほり、わい／＼連中ですから、貴方に附いてゐていくと、實に大助かりです。」

安住は少し厭になつたが、しかし荒井が齒切れが好いのに感服もした。大塚の言ふやうに、この男が葉子の貞操を玩弄になぞしようとは思へなかつた。同時に荒井の娘であるところの智恵子の存在をも、今までよりは的確に掴むことができるやうに思へた。

それから東キネの債務の話などしてゐるうちに、荒井は町にもつてゐる常設館に用事があるとかで、自動車で行つた。

(五)

安住は雨あがりの水邊の夜の色が好かつたので、食後ぶら／＼外へ出て見たが、その時分には葉子も歸つて来て、その前から紛擾してゐた役割のことで、山岡に何か言はれてゐた。安住はその渦中に入るのが厭だつたので、わざと逃げ出したのであつたが、山岡監督は一時荒井のものであつた村子を愛人もつて、荒井や澁子の弱點も掴んでゐる處から、スタヂオの内外に巾を利かせてゐた。彼はとかく葉子が使ひにくいと言つてゐたが、人氣があるので、厭々ながら今度も主役を振つたのであつた。安住も葉子のために彼の監督振を不安に感じてゐた。

水際の砂道を彼は逍遙してゐた。日の暮方から雨が霽れて、高く澄んだ秋の空に星影が水々してゐた。彼は部屋を出る時、ちよつと葉子に目配せして來たので、多分出て來るだらうと心待に待つてゐた。

暫くすると、葉子らしい姿が旅館の建物のはづれに見える枯柳の下から出て來て、水邊の道へおりて來た。そして安住の影を探してゐるやうに見えた。

「何うしました。」安住は近よつて行つた。

「何うもしやしないんですけれどまた齒が痛みだしたもんですから。」葉子はさう言ひながら、演出上の工夫でもしてゐるらしい風で、黙つて歩いてゐた。

「役はどうなりました。」

「何うなるんですか、よく判らないんですけれど、最初から私が邦代をやることになつてゐるんですか

ら、今更仕様がないでせう。」

邦代とは山主の令嬢の名であつた。

「それなら可いけれど、しかしあの監督ぢや、貴女も餘程しつかりしてかゝらなけあ駄目です。役はどつちにしても、どうせ村子本位で撮らせるだらうから。」

「え、でも私平氣ですわ。主役の青年に扮する秋葉さんと意氣が合ひさへすれば、その外のことはさう苦にもなりませんわ。」

「秋葉つて、いつかの『アトリエの花』以来の相棒ぢやないですか。」

「え、あれと今度と二度ですけど、何と言つてもあの連中では素養があるから。シナリオライターとして入つた人だけにね。でも係累が多いから、脚本家では報酬が十分でないでせう。」

「そんな男ですか。」安住は淡い不安を感じながら、

「まだ若いやうですね。」

「え、私よりか三つ上ですからいつか貴方に紹介してくれと言つてゐるんですけど、あの人どこへも出ないで勉強してゐますから、人氣はさう出ませんけれど、作家として屹度えらくなると思ひます。」

「ラブ關係でもできてやしないか。」金作は笑談のやうに探りをいれた。

「わたし？ いゝえ、あの人奥さんがあるんですもの。」

「さう。」金作は吻としたやうに言つたが、少し間をおいてから、

「それで才賀の方は何うなつたんです。」

「何だか、ごたすたしてゐるやうです。あの叔父のことでですから、いづれ懲にかゝつてゐるんですけど、一つは荒井さんの態度が癪にさはつたんだと思ひます。そんな事は大塚に掛合へといつた風で高飛車に出たもんで、叔父もつい意地になつて、警察や新聞社に懇意な人がゐたのを幸ひ、撮影の妨害をしようとしたんです。それに、叔父だつて樂ぢやないんですから、私荒井さんにお願ひして、月給の前借でもして、お金の五六百圓もやつておかうと思ふんです。今日その話をして來ましたけれど、叔父の吹掛方が大きいもんですから、荒井さんも怒つてゐるんです。」

「千圓もやつたら好いんぢやないか。」

「五千圓纏つたものを、今こゝで耳をそろへて出すなら、目をつぶつてやらうと言ふんですけど、五千圓なんて……。」

「いや、僕が逢つて話をしたら、五千圓でなくても可いだらう。」

「貴方にそんな事して頂いては濟まないんです。」

「なぜ？」

「でも、もう随分……。」

「知つてゐますか、それを……。」金作は少し冷笑氣味で言つたので、葉子は遽に壁にでも突當つたやうに、内心怖れを感じた。

(六)

「お金のことでせう。」と葉子は問返して、「ですからお金のことで、今迄度々御心配かけて濟まないと思つてをりますの。別に私から戴きたいと思つたことはなかつたんですけれど、ついさう云ふ事になりますのね。其は何ういふことか私にもわかりませんが、漣子さんの家へなんか出入りして、ああ云ふ人達とお交際なされば、何彼につけてお金のかゝるのは當然ですもの。」

「いや、かゝると言つたところで、知れたものだし、惜しいとも思はないが、たゞ貴女の氣持がね……。」金作は躊躇しながら、「金その物は何でもないんだが、私が何う云ふ考へで、漣子なんかの機嫌を取つてゐるか、それは無論貴女の恥にならないやうに、出来るだけ物質上だけでも便宜を計らうと思ふからで、その氣持が貴女に徹底してゐるかゝるか、そんなことは何うでもいゝとしても、それが中途で……つまり漣子なんかの餌食になるだけのやうな氣がしてならないので。」

「え、ですから餘り近よつて戴きたくないと思ひます。御後援は有難いんですけれど、何うせ私もある社會へ入つた以上は、うんと苦まなければならぬんです。初めの人氣なぞ逆も當にならないんですから、何時は落着く時があるだらうと思ひます。落ちる場合には、何んな後援者があつても駄目です。私

は今の人氣を却て苦しく思ひます。自分の實力から來てゐる人氣ぢやないやうな氣がしてならないんです。そんな表面のものに酔つてゐてはならない。珍しもの好きの人氣に乗つて好い氣になつてゐては危い。それよりかもつと本質的なしつかりしたものを掴んでゐなければならぬ。私は此頃連りにさう云ふ不満を感じてをりますの。」葉子は熱心に言つた。

「それは大變に好いことです。葉子さんがさう云ふ風に自覺してゐるのは非常に心強い。しかしあの多勢ゐる男女俳優のなかに、口では立派なことを言つてゐても、その實さう云ふ充實した心持で、カメラの前に立つてゐる人が、唯の一人でもありますか。」

「え、ございます。」

「秋葉ですか。」

「え、秋葉さんなんかもさうです。」

「成程、秋葉なんかは、先づ眞面目な方でせう。貴女はあの男に大分感化されてゐるやうだ。」

「あの人の抱負は大きくございます。あの連中から超越してゐるやうです。人間としても狡いところや厭味なところが少しもなくて、實に無邪氣で純眞なんです。本當に珍しい人だと思ひます。」葉子は興奮した口調で讚美した。

「あの男がね。いや、僕もそれは認めてもいい。葉子さんがさう云ふ新しい刺戟を得たのは大變好いこ

とだと思ふ。その気分はきつと、今度の映畫に現れるだらう。僕はそれを樂みにしてゐる。けれど其だからと言つて、外面からの後援が全然無用だと考へられない。超越もいゝが、さう秋葉や葉子さんの思つてゐるやうに、單純にも行かない。あすこは人と人との交際が尤も煩いところだからね。」

「でも後援なんかございませと、却て嫉視的となりやすいんですの。」

「今までに何かさういふことがあつたかね。」

「格別形に現れてはをりませんけれど……それは映畫藝術の理解者として、あの社會へ出入りするくらゐのことでしたら、別に差しつかへはないんです。」葉子は思ひ揚つたやうな口吻でいつた。

「金作は絶望といふよりも、寧ろ憤懣をいだかすにはゐられなかつた。」

「それぢや葉子さんは、今まで僕が盡くして來たことに對して、まるで反感を持つてゐると思つてもいいんですね。何か餘計なおせつかいでも、僕がしてゐたやうに……。」

「だからお氣の毒だと思つてゐるんです。漣子さんなんかに釣られてゐらつしやると思ふと、心苦くてなりませんの。」

「そんなことは一切止めろと言ふことかね。」

「貴方に濟まないと思ひますから。」

(七)

下手に出て

「自分を生かす。映畫劇が貴女の總てだといふことは、僕にも解つてゐる。それだからこそ僕もわざ／＼東京まで出て、蔭になり日向になり、貴女を援けて來てゐる。貴女のために盡くすのは、僕のこの上もない満足で、それによつて僕は竊かに自ら慰めてゐるんだ。貴女が少しでもその心持ちを汲んでくれたら、そんな勝手なことが言へた義理ぢやないと思ふがね。」

「私勝手にせうか。」葉子は獨言のやうに呟いてゐた。

「いや、僕にも勝手があるかも知れない。葉子さんに要求をもつのが大體可けないんだ。だから出来るだけ、傍觀的態度で、葉子さんの心が何ういふ風に動いてくるかを見てゐようと思つてゐたんだが、そこが愛に惱むものゝ悲さで、しかも誘惑の多いあの人達のなかにおいて置くのが、不安心でならないんだ。葉子さんには恐らくその心配はないと思ふけれど、今の話の様子だと、貴女はいつの頃からか知らないが、確に秋葉を愛してゐるんだ。」

「それは藝術上のことですもの。」

「それだから尙危険なんだ。仕事のうへでも接觸の機會が多いし、藝術的に共鳴があるとすれば尙更のことぢやないか。」

「でも私達は今そんな事なんか考へてゐる餘裕はないんですわ。カメラの前では、それあ何うしたつて

灼熱的な氣持になるんですけど、なればなるほどお互に尊敬し合ふやうな、崇高な感じに打れるんですわ。さういふのが矢張實感なんでせうかね。」葉子は自問自答的に言つた。

「その氣持は僕にも想像できる。」

「でも、そこに不純な實感がおれば、それはもう藝術ぢやないと思ひますわ。」

「さうは思つても、それは葉子さんの錯覺で、いつかは實際の愛に導かれるに違ひないんだ。」

「さうでせうか。私もあのスタヂオにあの人がゐなくなつちや、今ほど熱心になれないやうな氣がしますの。あの人だけを對象にして……外の人なんか、本當は何うでも可いと思つてゐますわ。それが愛なんでせうか。」

「カメラの前だけのことゝは思へないね。それは秋葉もさうだとすれば尙更のこと、今にそれだけでは満足できない時が、きつと來るに違ひないんだ。金だつて十分だ。皆なはもうそれに氣着いてゐるに極つてゐる。葉子さんが自分でさうでないと思つてゐるに過ぎないんだ。とすると——さうなつた時の僕を考へてごらんさい。僕といふものが、あの連中の目に、何んな間拔に見えるかといふことをだね。屈辱は忍ぶとしても……。」

ゐるんです。私だつて、その外の意味は考へられませんでした。それは愛してゐて下さることは、解つてゐましたけれど……だから、私はお氣の毒でならなかつたんですけれど、でも私は映畫女優として、出來るだけのことをすれば、貴方にも悦んでいただける積りでした。その外のことを考へることは出來ませんでしたから。」葉子は心苦しうに辯解するのであつた。

金作にはその言葉ははつきり判らなかつた。しどろもどろのやうに、寧ろ氣の毒のやうに感じた。今度こそはうんと言つて、彼女の本心を突き止めようと心に決してゐたのであつたが、話してみると矢張態度が崩れて、つい彼女の氣持を劬らすにはゐられないのであつた。

「秋葉さんに一度逢つて下さると私ほんとに有難いんですの。あの方は私以上に、貴方に感謝してゐます。」

「それは逢つてもいいが。」

二人は水邊を離れて、海邊の松原へ來てゐるのに氣づいた。一面の水煙で、ぼうとした海が、仄白い波を木の間にちらつかせてゐた。

(八)

二人が引返さうとしてゐる途中で、ちやうど其の秋葉が葉子を捜しに出て來たのに出逢つた。

秋葉は鳶色のジャケツなどを着込んで、鳥打を阿彌陀に冠つて、まるで労働者の様な風をしてゐたが、

色の白い、線の軟かい、輪郭の調つたきりゝとした顔で、軀もさう大きくはなかつた。

先刻安住は、部屋で二三の人と、シナリオの寫しをもつて、連りに研究してゐる彼を見たのであつた。ツルミのスタヂオでも顔を合せてゐるのであつたが、どつちも内氣で、親しく口を利くのは今が初めてであつた。

「貴方のことは始終山野さんから伺つてゐます。どうぞ何分よろしく。」秋葉は帽子の廂へ手をかけながらお辭儀をした。

「僕も貴方のことはよく知つてゐるんですが、つい失禮ばかりしてゐました。」

「いや、僕いつも山野さんにさう言つてゐるんです。貴女はほんとに好いベトロンがあつて幸福ですつてね。藝術家だとか何とかいつても、實際我々は弱い稼業ですからな。何う考へたつて労働者以上ぢやないんですから。」秋葉は少し燥いだ調子で言つた、更に葉子に、

「役割は何うしたんです。山岡さんが先刻から貴女がゐないつて、頻に怒つてゐましたよ。」

「さうですか、齒が痛かつたものですから、少し風に當らうと思つて、この邊をぶら／＼してゐましたの。でも、今更何うにもならないことですよ。」

「僕もさう思ふんです。折角稽古をしたんですからね。尤も孰も好い役ですが、村子さんの役が、少し好すぎるんです。山岡さんは初めから村子さんを引立てるやうに工夫してゐるんですが、稽古の結果割

合に村子さんが榮えないものですから、すつかり氣を腐らしてしまつたんです、それで役を振替へるなんて言ひ出したんだけれど、素と／＼役の問題でなくて俳優の問題ですからね。」

「私どつちでも介意ませんわ。」

葉子は投出したやうに言つた。

「どつちも貴女の柄にあるものだが、令嬢の方がどつちかと言ふと少し寂しいんだ。しかし貴女ならきつと好い。山岡さんに今更ぐらつかれては實際遣切れませぬね。」

「でも、あの監督さんも私嫌ひぢやありませんわ。少し氣が短いけれど、その代りにてきばきしてゐて、氣持がいゝんですもの。」

「それあさうさ。それに山岡さんだつて、十分貴女を認めてゐるんですからね。今度使つてみて、それが判つたんだ。しかし村子さんといふものがあるからね。山岡さんは村子さんに心竊かに幻滅を感じてゐるに違ひないんだ。それで一層いら／＼してゐるといふことは、僕には見えすいてゐるんだ。」

「やらうね、しつかり。僕は或程度以上は監督を無視してやるつもりだ。」

そして彼は愉快さうに無邪氣に笑つた。勿論彼は少し酒氣を帯びてゐた。

「え、やりませうね。」

「それから貴女が弾丸に中つて倒れるところで、僕が駆けつけて、森のなかで介抱する、あすこをもろ少し固めておかう。」秋葉はさう言つて、「さあ、ちよつと遣つて見るんだから、貴女はそこにゐて、煙のなかで、仰向きに倒れるんだ。」

「大丈夫よ。あすこならもう悉皆手に入つてしまつてゐるんだから。それよりか私老坑夫のお通夜のところで、お弔みに行つて、初めて貴方に逢ふところが心配なのよ。労働者たちが皆なで立ちあがつて、私に亂暴を働かけようとするでせう。」

「貴女は自若として立つてゐれば。さうすると僕が立つて皆なを制止するから。」

二人は安住の存在を忘れて、夢中になつて途々仕事の稽古をしはじめた。そして秋葉が葉子の肩につかまつたり、手に接吻する眞似をしたりしてゐた。

(九)

すると旅館の近くまで来たところで、秋葉は遽に思ひ出したやうに、

「さうく、それを先刻から言はうと思つて忘れてゐたんですが、叔父さんが来て坐りこんでゐますよ。」と微聲で言つたので、葉子は、

「さう！」と忽ち立竦んでしまつた。

「一體何うなるんです、あの問題は。山岡さんもぶり／＼してゐましたよ。己の知つたことぢやないとか言つて。」

「困りましたわね、今日だつて話のつくまで何うしても歸さないといふのを、私留守の間に逃出してしまつたんです。」

「荒井さんも多分逃げたんだらうと、山岡さんが言つてゐました。荒井さんから貴方にお委せしてあるんぢやないんですか。」秋葉は安住の意中を探るやうに訊いた。

「何だかそんな事を言つてゐました。僕に責任がある譯でもないんですけれど、才賀は僕の會社で使つてゐる男ですから、何とか話がつくだらうと思ふんですが、それも金の顔を見せなければ承知しないでせうからね。」安住は熱のない返辭をした。

彼は金なら二千か三千で、才賀を納得させるつもりで、今の今までその腹をすゑてゐたのであつたが、それには葉子の心持ちを突き止めた上でなければ詰らないと云ふ氣がしてゐた。是迄盡くして來た自分の好意に對して、葉子が何んな氣持ちでゐるかと思ふと、この上の好意は無駄であつた。その上秋葉との愛をさへ、自分に承認させようとしてゐるなどは、明らかに自分の好意を蹂躪つてゐるのだと思はれた。彼は葉子の今夜の態度にすつかり絶望してゐた。

「ちや、貴方がお金を出してやつて下さるんですか。」

「さあ。」金作は氣のない返辭をしてゐた。

「山岡さんは、これから幾日かの撮影のあひだ、あの叔父さんに邪魔をされちやたまらないから、いつを今度は脱けてもらはうかといつてゐるんです。まさかそんな事もできないでせうがね。それでなくたって、お妾役の漣子さんはゐないし、随分手不足ですからね。」秋葉はさう言ひながら、安住がどうかしてくれるものだと思つてゐるらしかつた。

「私何もおの叔父に、お金なんか取られる理由ないと思ひますわ。それも少許りのことでしたら、社長さんにお願ひして、給料の前借でもしても可いんですけれど、五千だの一萬だのと出方が無法なんですもの。」

「千圓やそこいらなら、僕も月給の前借してもいゝと思つてゐますよ。」秋葉は感激的に言つた。

「貴方に御迷惑かけちや済みませんわ。奥さんが御病氣なんですもの。」

「あの病氣にも飽き／＼してしまひましたよ、實際。でも可哀さうだと思ひましてね。今迄にするぶん大きな犠牲を拂つてゐるんです。しかし其はそれとして、また何うにかかりますよ。」

「皆なが取合つて下さらなけあ可いんです。」

「しかし才賀だつて、萬更理窟のない要求もしてゐないんです。一萬なんて何うせ掛け引でせうけれど、少くも三千圓ぐらゐの金はやるのが至當だと思ふね。」安住はいふのであつた。

「それあさうですけれど。」

「會社としてはその位の金は何でもないんだがな。況してそれが葉子さんの身の代とすれば、安いもんぢやないですか。掛け合つた結果、三千圓ぐらゐに負けたら、荒井さんもいけないとはいはないでせう。安住さんに交渉していただく譯に行かないんですか。」秋葉は哀願するやうにいつた。

「さうですね。交渉くらゐなら、して見てもいゝんです。金さへ出来れば。」

「葉子さん、一つ安住さんにお願ひしたら何うです。」秋葉は何うして葉子が金作に縋らないかともどかしさうに言ふのであつた。

「え、でも……。」葉子はこの場合自分から矜りを傷つけることはできないと思つた。するうち旅館の入口まで来てしまつた。

愛し得ぬ悩み

(一)

葉子はその撮影も漸く終りを告げようとしてゐる頃、或る日木の根のうへに投出されて胸を打つて氣絶するといふ様な災難があつて直ぐ自動車で旅館へ連込まれたが大したこともなくて、中一日おいて痛みを忪へて再び山へ登つて働いた。そして最後まで遣りつゞけたのが因で、皆なが引揚げてからも醫者の注意に従つて、暫く病院へ入つて、手當をしてゐた。

それはその撮影の終りに近いところに、一場のラブシーンがあつて、秋葉の扮する戀人の青年労働者と、山の峽間にかゝつた古い木橋のうへに、折しも月の好い晩、争闘も一と先づ済んだところで、構曳するところがあつて、しかもその青年が赤化してゐるところから、到頭納得づくでその山に永久の別れを告げようとしてゐる前日のこと、葉子の扮する令嬢の邦代も、一緒に父の家を脱け出さうと、その手筈を語り合つてゐると、そこへ邦代と結婚する筈になつてゐる若い華族が、邦代の後を追つて、橋の袂まで来ると、橋のうへに甘い戀を私語きあつてゐる二人の姿を見つけて、間へ割つて入ると同時に劇しい争闘が初まつて、幾度か朽ちかゝつた手摺を越えて、深い淵の中へ墜ちようとするのを、格闘をつゞけながら到頭岸まで来て上になり下になり崖を轉がつてゐるので、傍に見てゐる葉子の邦代は氣が氣でなかつた。そし二人の力が少し怯みかけに汐を見計らつて、間へ入つて引分けようとするとき、組んづ釋れつ死力を盡して争つてゐる二人のために跳ね飛されて、はずみで岩のうへに倒れる拍子に、思はず木の根で胸を突いて、氣を失つてしまつたのであつた。

結局二人は水へはまつて、下流へ押流されてから銘々岸へ這ひあがることになつてゐるのであつたが、葉子が本當に氣絶してしまつたので、格闘してゐた二人の俳優は、驚いて抱き起して介抱したが、葉子が蘇生するまでには、可也な時間がかゝつた。カメラマンには氣づかなかつたので、氣絶したところまでカメラに入れた譯であつたが、しかし氣絶してからの騒ぎも入れておかうといふので、技師はまた機械を廻しはじめたが、葉子は近くから醫者がくるまで、一切夢中であつた。

しかし、ロケーションはそれで終りを告げた譯ではないので、葉子は中一日おいて、後二日ばかり氣分の悪いのを我慢して、山で活動した。そしてそれが發熱の誘因となつて、悪くすると肋膜炎になる虞があつたので、暫く町の病院に残ることにした。

病院へ入つてから、もう五日ばかりになつた。熱は少し退いて、肋膜炎を惹起す心配もなささうであつたが、少し痛みはまだ骨のなかに残つてゐた。

皆なが引揚げてから、秋葉だけが一日おくられて歸るつもりで、一と晩病床についてゐてくれた。

秋葉の話によると、安住はあれ以來家へ歸つてしまつて、旅館へも撮影現場へも、一度だつて姿を

見せないと言ふのであつた。

「あの人はすつかり怒つてしまつたやうだね。」秋葉もそれを氣にしてゐた。

葉子は今日の日まで、蔭になり日向になり附纏つてゐた金作が、まるで憑いてゐた狐が離れたやうに、姿を消してしまつたので、寧ろせい／＼した氣持ちであつたが、しかし矢張り氣持ちはしなかつた。今まで金作が自分のために費つた金と、苦みとは、容易なものではなかつた。それも慾の深い漣子の懐ちへ入つた方が多くて、葉子は身についたものといつては、時々御馳走くらゐのものであつたが、しかし金作の氣持ちからいへば、たゞ一つ葉子の愛を得たさの心盡くしであつた。それも葉子も感謝してゐるのであつたが、しかし金作から何か要求がましいことをいはれると、濟まないとは思ひながら、つい反感が起こつて、心にもなくびし／＼愛想盡しをいつてしまつたものであつた。

葉子は自分の無情を寧ろ淺猿しく思つたが、しかし何うすることも出来なかつた。

(11)

「到頭安住さんを怒らしてしまつて、悪かつたですね。」秋葉は病床の傍で其を繰返してゐた。

「介意やしませんわ。」葉子は苦笑してゐたが、何となくさびしかつた。

「あの時貴女の態度が、もう少し妥協的であつたら、安住さんも才賀さんの要求を容れて、貴女のためにお金を出すつもりだつたらだらうが、われ／＼が少し露骨すぎたのが悪かつたんだね。」

「ただ私こまるのよ。どうせあの人と結婚なぞする意志もないのに、何時までも釣つておいて、終ひに何んなことになるか解りやしないんですもの。あの晩あの人を私を外へ連出して、私の本心を突止めようとしたんです。私は取繕ひなしに、思ふとほりを言つてしまつたんです。私としてはあれ以上、あの人に附纏はれるのは厭なんです。私の告白を聞いて、それでもといふのなら、それは格別ですけれど、安住さんの後援は、私の藝術に對してはなかつたんですから。その癖さういふことも口にしておたんですよ。漣子さんなんかの前では、明かにそれを宣言してゐたんですもの。でもさうでない事は、私には判つてゐました。だからあの人の氣持が、私何だか氣になつてならなかつたんです。本當に私の藝術を認めて、それを愛護する意志から出たことなら、私達の態度が何んなであらうと、それを認める理由なんか少しもない筈ぢやありませんか。」葉子は冷笑的に言つたが、「でも、それは少し無理な注文かも知れませんか。私の藝なんかそれに値ひするかどうか問題ですわ。」

「さう行けば理想的だがね。」秋葉も寂しく笑つて、「藝術家の後援には、偶にはさういふものもあるけれど、大抵はブルジョアの虚榮か、或ひは何かの不純な動機から來てゐるんですからね。藝人は男だつて女の玩弄になるんですから男が金を金で玩弄にしようといふのは、無理はないでせう。」

「え、さう。けれど安住さんのはそれ程不純でもないの。」

「さうですとも、安住さんは確に貴女を愛してゐるんです。」

「たとひ何んなことがあつても、金で盡せることなら、何んなことでもする。あの人は漣子さんに立派に言つてゐたんです。」

「でも、さうは行かないでせう。」

「けど、本當に怒つたのか何うだか、それも未だよく判らないのよ。」

「いや、それは確に怒つてゐたんです。葉子はあるな女ぢやないと思つてゐたと、才賀さんや荒井さんの前で言つてゐたさうですから、葉子からあゝまで自分の好意を蹂躪されようとは思はなかつたつて、ひどく悲觀してゐたさうです。荒井さんが宥めてくれたさうですが、今後葉子とは一切關係を絶つと明言して行つたと言ふんだから。」

「荒井さんが何だかそんな事を言つてゐましたけれど、私の態度がそんなに安住さんを失望させたとする、私も餘り氣持の好いことはないんです。」

「さうね。僕も安住さんに二人の關係を認めてもらへるつもりで、寧ろ正直に打明けた方が可くはないかといふくらの考へで、思ひ切つて無邪氣にふるまつてゐた積りなんです。かうなつて見ると、それが悪かつたんだ。安住さんの目には、それが何んな傍若無人に見えたかと思つて、實はしよげてゐるんです。」

「私も後ではいつもさう思ふんですけれど、あの人と面と向かつてゐると、何うしても好い顔がしてゐられなくなるの。」

「どこがそんなに氣が入らないんです。」秋葉は笑ひながら訊いた。

「私にも判りませんわ。でももう好い加減こじれてしまつてゐるんですもの。今更何うにもならないんです。」

「さう云ふことはあるね。僕にも経験がありますよ。」秋葉は愛嬌のある目をして、何か思ひだしてゐるやうに、にや／＼笑つてゐた。

秋葉はその晩の汽車で歸ることになつてゐた。そしてそんな話に耽つてゐるうちに、時刻が迫つて來て、彼は病床に愛人と接吻をしながら、別れを告げた。

(III)

秋葉と別れてからの葉子は、遽に掌のうちの珠を失つたやうな寂しさに襲はれた。それにはロケーションのあひだ、ごちや／＼一緒に暮してゐた、男女俳優や監督や技師が洪水のひいたやうに引揚げて行つた後の寂しさもあつて、始終ごた／＼しながら、無節制な楽しい日を送つてゐたことが、今更のやうに懐しく思ひ出された。撮影中は何かと神經を苛立たせがちであつたが、秋葉と戀の關係が結ばれたのは勿論、不斷は接觸する機會のなかつた人達にも、思ひがけない親みが生じて、厭なところや醜いところも目についたが、畢竟誰も彼れも皆ないゝ人達ばかりだと云ふ感じがした。

今まで葉子は何うかすると、撮影所の裏面に幻滅を感じることもあつた。人と人との交渉に、厭氣の差すやうなことも多かつた。長くゐるところでない様に、自分の飛び込んで来た特異なこの世界に失望した事も度々であつた。その度に葉子はそれを心配してくれた須永を想ひ出すにはゐられなかつた。「須永さんの言つたことが、矢張眞實だつた」葉子はさう思つて、今のうち足を洗つて了はうかとも考へるのであつた。そんな時彼女は自分の前途が何うなる事かと、反省しないではゐられないのであつたが、併しロケーションの楽しさなどは、この職業にのみ恵れた幸福だといふ氣もするのであつた。

葉子は秋葉が出て行つたあと、何か知ら充足りた幸福を持ち切れないやうな、それでゐて未だ何か氣にかゝることが残つてゐるやうな、妙に遺瀾ない不安に囚はれて、しばらく手巾を顔に當て、泣いてゐた。それは秋葉の愛が、弱い彼女の心を一杯に浸して、會て感じたことのない幸福感が、一時に彼女の胸に溢れて来たと同時に、あれほど自分を愛してゐた安住に背いたことが、暗い微かな影を投げてゐたからであつた。

葉子は安住に詫びの手紙でも書きたいやうな氣がして、その晩附添ひの看護婦が寝てから、そつと枕頭の書簡箋を引出して、萬年筆を執つてみたりしたが、いざ書かうとなると、出てくる言葉は醜い自己辯護に過ぎないやうに思はれて、やつぱり氣が引けた。

夜中からまた熱が出たりして、肋骨がきやく／＼痛んだ。

するとその翌日の午後、叔父の才賀が見舞ひに來た。叔父は多分荒井から五千圓の手形を受取つてゐる筈であつた。その五千圓の出途が、何ういふ風になるのかは、葉子にもわからなかつたけれど、多分月給で差引かれるのだらうと思はれた。それだけでなくさへ借金は殖えてゐるのに、五千圓といふ金を返すのは、容易なことではなかつた。あの晩安住に本心を突止められたとき、愛想の好い返事さへしておけば、その金は多分安住の懐ろから出たに違ひないのであつた。しかし其の額は、叔父との交渉でもつと少額で済んだかも知れないのであつた。それを思ふと、あの一晚の自分の態度には、可なり運命的な大切な意味があつた。けれど今更それを考へたところで何の效もなかつた。運命は決せられてしまつた。葉子は才賀の顔を見るのも厭であつた。

「怪我をしたさうだが、何うだね段々好い方かね。」才賀は優しく訊いた。彼は何となくほく／＼してゐた。「え。」葉子は面を背向けてゐた。

「安住さんを悉皆怒らしてしまつたさうだが、そんな事をして可いのかい。」葉子は黙つてゐた。

「しかしあの荒井といふ男は存外話せるよ。さすがに大會社の締括りをしてゐるだけに、いざとなると解りが早い。金の出しつぶりも、思つたほど汚くはない。だから叔父さんもその氣前に免じて、大負けに負けてやつたよ。まあ安心してくれ。お前にもお禮を言ふよ。」

葉子はいつそ可笑しかった。

「早く快くなつてくれんと困るが安住さんを怒らせたのは好くないね。」

(四)

葉子が無愛想なので、才賀は照れてしまった。

「ちや己はまた来る。何か用事はないか。」才賀は機嫌を取るやうに言つたが、葉子は「いゝえ。」と言つた限りであつた。

「明日あの金作さんに逢ふかも知れんが。何か言傳はないか。」

葉子は「どうぞ宜しく。」と答へた。

「しかし己が思つてゐたよりか、活動ちうものは金の儲かるものらしいな。」才賀は一旦立ちかけたのを、又椅子に腰をおろして、「お前がそれ程有名になつてをらうとは己も知らなかつたが、聞いてみるとお前の名は、町で知らんものは一人もないくらゐだぞ、大したことになつたものだ、尤も叔父さんは、稚い時からお前が一風かはつた女ちうことは判つてゐた。矢張御母さんの遺傳で、普通の娘と異つたところがあつた。しかし藝事は出来たが、御母さんの生涯は餘り幸福ではなかつたのだから、お前もその點は用心せんといかん。どうせ浮氣な商賣だから、堅氣の娘のやうにもいくまいが、年を取らないうちに早く足を洗ふくらゐの心掛がなくては駄目だと思ふが、結婚すると人氣に關するちうことだが、そこ

は何ういふ風にするつもりかな。」

「そんな事なんか考へてゐません。」葉子は苛々しながらわざと冷淡にいつた。

「今はお前も賣出しだから、何にも考へてはゐないだらうが、一體活動女優の生命は、凡そ幾年ぐらゐつゞくものかな。」

「先のことはわかりやしません。今年は騒がれても來年はどつかと落ちてしまふかも知れせんわ。それでも可いぢやありませんか。」葉子は微かな冷笑の影を浮べて、「そんなことを考へるのは、まだ早すぎます。私なんか漸と初めたばかりですもの。」

「だが人氣がなくなつたら何うする。」

「その時はその時ですわ。」

才賀は二の句がつけなかつたが、少し經つてから、

「それぢや金作さんの方は、叔父さんが又うまく言つておいて遣る。金作さんも二千圓ぐらゐなら、出して可いやうなことは言つてゐたが、氣前の好いことは荒井さんが一枚上だ。」

「それあ其の筈ぢやありませんか。その五千圓だつて會社から出てゐるんですもの。私はこの先何年か、そのために苦しまなければならぬです。」葉子は笑ひながら言つた。

「まさかさうぢやあるまい。」才賀も苦笑しながら、「それならそれで、早くその借金をぬける算段をし

「たらい、ぢやないか。お前も今が賣出した、活動がそんなにぼろい商賣なら、外の會社でもお前を買ひたがつてをらうがな。」

「何うだか判りませんわ。」

「金作さんにしたところで、お前がたしかに言ふことを聞いて一緒になるうことが判りさへすれば、會社の借金ぐらゐは綺麗に返してくれるに決つてゐる。たとひ五千あらうと一萬あらうと。」才賀は少し熱心になつて來た。

葉子はまた顔を背向けてしまつた。

「叔父さんもそのうち一度東京へ行かうぜ。折角人氣役者になりながら、お前のやうにさうさつぱりした事ばかり言つてゐたのでは、人に莫迦にされて、會社の好い喰物にされるばかりだ。叔父さんがついでゐたら、その處がきつと具合よく行くのだから。」

葉子は呆れてしまつた。腹立しくもあつた。

「今度歸るとき、何うだ叔父さんがついて行てやらうか。會社に取つて、お前が大事な弗圖だちうことは、あの金の出しつぶりでも判るぢやないか。」

「さうは行きませんでせうね。そんな事を言ひだして辱をかきます。私達はこの邊の田舎藝者たちがひます。人身賣買なんか大の禁物なんです。」葉子はびしやりと言つた。

「そのくらの事は、叔父さんにだつて判つてをる。だが、さう氣位の高いばかりが能でもあるまい。それで世間が渡つて行けるものと思ふと、大變な間違ひが起るぞ。」

(五)

「でも可いんです。私の事は私がします。會社にだつて徳義はあります。」葉子は言ひ切つた。

才賀は元來縣の土木課にゐた男で、何か悪い事を働いて罷められたのであつたが、それも安住の父の經營にかゝる鐵道敷設に關したことであつたので、爾來その鐵道に雇はれてゐるのであつた。葉子はそんな事はしらなかつたけれど、叔父でありながら、町では餘り評判がよくなかつたので、始終肩身の狭い思ひをして來た。で、たとひ踏つて死んでも、永久この叔父の家の鬮を跨がないつもりで、家出をしたのに、人氣が出たのが却て仇となつて、悪くすると何時までも叔父に祟られることになりさうなので、實際うんざりしてしまつた。かうして附纏はれるのが、煩くてならなかつた。呪つても咀ひきれなひやうな、厭な因縁だと思ふと、いつそ悲しくなつた。

幸ひそこへ舊の學校友達が一人尋ねてくれた。葉子は女學校の三年くらゐまでは、叔父の厭なところにも氣がつかないで、さういふものだと思つてゐたが、叔父の性格が少しづつ判つてくると、柔順にしてゐた今までの反動で、何かにつけて反抗心が強くなつて、その羈絆から脱れようと悶えた。その感清が金作との結婚をも否定したので、素と金作その人に格別の愛憎のある譯はなかつたけれど、いつとは

なし反感をもつやうになつてしまつた。金作が自分を愛してゐることが判つたので、彼に縋らうとする氣持ちが、葉子にも其の頃は多少動いたのであつたが、金作の家へ行けば、いつそ叔父との宿縁が深くなるばかりなので、意地にも行くまいと決心してしまつた。金の威光の厭はしさにも、漸く反感が頭を擡げはじめた。金作を愛しえない惱みは、今でも彼女の心に或る苦味を残してゐた。

訪ねて来た學友といふのは、町でもちよつと上流の家庭に育つた女で、東京へ片着いたと聞いてゐたが、それがゆくりなく病室を見舞つてくれたことは、全く思ひがけない悦びであつた。葉子は看護婦から竹田千代子と聞いたゞけで、胸を抱き締められるやうな、迫つた氣持になつた。そして足音を忍んで、ベットの傍へ寄つてくる彼女の顔を見ると、もう目が曇つてしまつた。

それよりも一層葉子に劇しい衝動を與へたのは、千代子が暫くすると、戸の外に女中に抱かれてゐた、まだ漸く掴まり立ができるくらゐの男の子を、抱きこんで来たことで、自分の身のうへも變つてゐたけれど、友達の運命の變つてゐるのには、實際驚いてしまつた。

「貴女の人氣はすゝぶんだ變ね。私も拜見いたしましたよ。『アトリエの花』といふのをね。私宅と一緒に見ました。宅は活動が大好きなんです。しかも大變に貴女を讚美してゐました。貴女はあの頃、色々なものを讀んでゐたのね、でも貴女が、あの世界へお入りにならうとは思ひませんでした。」

「私だつて別にさう深い考へがあつた譯でもなかつたんですわ。ほんの氣紛れなの。」

「でもよく思ひきつて、お遣りになつたことね。あれを拜見してから、急に貴女にお目にかゝりたくなつて、何處にいらつしやるかと思つて、心當りを捜してゐたんですけれど、何しろ貴女は一躍して映畫界の第一人者になつておしまひなすつたんですもの、何といつてお悦びを申しあげていゝか判らないでせう。それにあの頃ちやうど此の子が産れて間もないことでしたから、何かと手を取られて今日はといふ日もなかつたんですの。」

「いゝえ、私も貴女が東京で家庭をおもちになつたことは伺つてゐたんですの。でももうそんなお子さんまでお出来になつて……私吃驚してしまひましたわ。」

「お怪我をなすつたつて、何うなの。」

「もう良いんですの。貴女がこちらへ来ていらつしやるのなら、私の方からお訪ねするんでしたけれど。」

「墓參を兼ねて、皆さんにお目にかゝらうと思つて、十日程前に來てゐるんですけれど。いづれ歸れば、今度はお訪ねしますわ。」

「え、どうぞ。」葉子は答へたが、氣分が大分違つてゐるのに氣がついてゐた。葉子は羨やましくも思つたが、人の妻となり母となつてゐる彼女の生活もほど想像ができるやうで、何となく飽足りなく思つた。

(六)

その間、今にも歸るかと思つた才賀は、秋葉が隅の方の柵のうへにおいてあつた水菓子の籠から紫

色につる／＼した葡萄の房を引張り出して、子供にもやつたり、自分でもちゆう／＼甘い汁を食ひ吸つてゐた。千代子は何だか見たことのある親爺だと思つたか、入つた時ちよつと挨拶したきりで、葉子が「かまはないのよ。」と微聲で言ふので、時々その顔を見ながら、話しかけようとしたが、才賀も千代子が臆面なしに、よくお饒舌をするので、にや／＼しながら少し煙にまかれた形ちであつたが、隙を見て、

「貴女は好いすな。さうやつて堅氣のところへ縁着きになつて、そんな可愛いお子さんまであるんだから。その方が安心ですよ。私も一日葉の寫眞を撮るところを見ましたが、大抵ちやありませんや。金にもなるが、樂ちやないね。」

「さうですか。でも一つ寫せば、二月も三月も遊んでゐられるでせう。苦しいこともあるでせうけれど、自己満足があるから好うございますわ。」

「その代り、あんな仕事をしてゐると、何うしたつて頭腦が荒びるね。體だつて堪りませんや。若いうちには可いが、年を取つちや慘だ。だから今も言つてきかしてゐる所ですよ、人氣のあるうち取れるだけ取つておきなさいと。」

「でも十年や廿年は大丈夫でせう。葉子さんなぞ素養があるから、きつと長持すると思ひますよ。舞臺の女優こそ、それ程にも榮えないけれど、活動は益々有望ですわ。それに何んな生活にだつて、不安は

附物ですもの。結婚生活なんて、決して思つたほど幸福なものぢやございせんよ。私家庭をもつてから、熟々さう思ひましたわ。あの時分考へてゐた事と、實際生活とはかうも違ふものと、近いお話しが、結婚前に聞いたことと、結婚してしまつてからと、生活状態や何か、まるで異つてゐるんですもの。」

「でも貴女はお仕合せよ。」葉子は微笑してゐた。

「それはまあ、思つたより恐いものでもなかつたんですの。成程かういふものかと思ふやうなこともございますけれど、でも女は結婚しちや駄目ね。先天的に男は優越權をもつてゐるものか何ぞのやうに、何うしたつて、女を下目に見るんですもの。第一貞操觀念なんか、男と女とちやまるで違ふんですもの。それよりも私つく／＼さう思つたことは、日本の結婚ほど掛値のあるものは多度はないでせうね。」

「旦那さまの月給に掛値でもあつたと言ふのかね。」才賀は笑つた。

千代子は顔を赧めて遽に黙つてしまつた。

「學校や何かで、餘りえらい事を言つて聽すもんだから、若いものは結婚さへすれば、飯は食はなくともいゝものゝやうに思ふんだが、片附いてみると大違ひで、その月から家賃の心配もしなくちやならんといふ寸法だからね。しかし其の不満も當座のことで、何うにかかうにか押つゝいて行くものさ。重寶なもので世のなかは妥協でもつたものさね。」才賀はまた笑つた。

「それあさうね。」千代子は目で葉子に笑ひかけた。

葉子は何だか気分が苛々して来た。ちよつと見たときは、千代子も家庭生活に入つて、ひどく晴れやかに美しくなつたやうにも思へたが、子持ちのせるか話してゐるうちにどこか生活の窶れが見えるやうにすら思へた。それに子供の洋服なんか見ても、餘り餘裕や落着のある生活だとは思へなかつた。葉子は千代子が可愛さうになつて来たが、しかし段々話をきいてみると千代子の心は諦めから子供の愛の方へ落着いて行くと思へなかつた。良人の前途も無論未知數であつた。

「それで貴女はいつ東京へお歸りになるの。」千代子は思ひ出したやうに訊いた。

「もう後五日もゐたら可いでせうと思ひますけれど。」

「さう、では私の方が先になるかも知りませんわね。その時分に、きつとお尋ね致しますわ。」

「え、私も是非伺ひます。」

そして二人はお互に居所を知らせ合つてから、別れた。

「ではお大事に。」

後で才賀はやれ／＼と言つた顔で、笑ひ出した。

「べら／＼善くしやべる女だね。」

「でもあの人ほんたうに好人よ。」

「人はいゝか知らんが、ちつとお芽出度くできてるね。」

葉子もそれには微笑まれた。

恐しき一夜

(一)

荒井が来たのは、それから五日程たつた或る寒い日の午後であつた。朝から片時雨がしたりなどして、病室の窓ガラスに冬の薄日が差したかと思ふと、直ぐ暗い影に消されて、厭に陰鬱な感じを與へたが、それが又葉子には何となく懐しいものに思はれた。

まさか荒井が自身で迎へに来てくれようとは思はなかつたので、葉子は内心ちよつと狼狽へた。撮影はこちらで大體片がついたけれど、スタジオへ歸つてからセットで撮る場面も少しは残つてゐたので、葉子も寝てゐる氣がしなかつたが、つい長引いてしまつた。葉子は皆なに濟まないやうな氣がしてゐたが、荒井が遣つて来たことが、一層心苦しかつた。

「獨りおいてき投で、寂しかつたらう。」荒井は神経性の口元の神経をびく／＼させながら、葉子を脅しはしなかつたかと、自分でも氣が差したやうに、顔を赤めてゐた。

葉子はベットのうへに坐りこんで、髪の手入れをしてゐるところであつた。

「どうも濟みません。私翌日にでも獨りで歸らうと思つてをりましたけれど、でも誰方か来て下さるか知らと思つて……。」

「いや、どうせ拂ひもあるし、今院長にきいたら、もう大丈夫だから、四五日温泉へでも行つて、ゆつくり休養させた方が可いだらうと言つてるからね、漣子もちやうど豫後が大事なので、昨日湯ヶ原へ立たしたから、何なら一緒にゐたら、寂しくなくて可いかとも思ふんだが、此の方はまあスタジオのものが二人ばかり行つてるからね。」

「もう悉皆およろしいんでせうか。」

「何だかね、まあさつぱりはしたらしいけれど、これでもう三度目だからね。今度は徹底的にやつてくれたやうだが、肥立が抄々しくくないんだ。何といつても年が年だからね。」荒井は笑つた。

「でもまだ若いんですもの。」

「いやお婆さん若返らう／＼と焦心つてゐるのが惨でね、俳優としても、あれなんぞはもう廢艦の口さ。今度だつてお妾さんを買つて出て、濃艶なところを見せようとしてゐただけれど、あの通り毎日寝てばかりゐる始末ではね。」

「本當にお苦しさうでしたわ。是からは屹度好いでせうと思ひます。」

「その積りで悦んでゐるんだがね、まあ何うなるか。」

さうして荒井は室内を見廻しながら、

「どうだね、手荷物はトランクとバスケツトだけかね。私のは停車場へ預けて来たから、それぢや是か

ら立たうか。」

「今からお立ちになるんですか。」

看護婦は名残惜さうに言った。

「長々お世話になりましたわね。」

「いゝえ。」

「今勘定書をさう言つておきましたから、出来てゐるなら。」

「畏まりました。」

葉子はベットをおりて、あわたしい思ひで支度に取かゝつた。荒井はまめくしく、そこいらに散かつた手廻りのものを纏めて、トランクに仕舞つたりした。

「さう急ぐことはない。私もこゝの温泉氣分を少し味はひたいと思つてゐるから、一兩日葉さんに附合つてもらひたいと思つてね。」荒井は氣輕に言った。

「え。」葉子は何氣なく言つてしまつて、我ながらはつとした。

「胸の痛みは去つた。」

「え、もう悉皆。何うかすると少し。」

「温泉に行けば癒るだらう。」荒井はさう言つて、トランクに鍵をかけながら、「東京もめつきり寒くな

つたよ。此方はさすがに古い町だけに、落着いてゐるね。何しろ須永や大塚の故郷だからね。あの連中はみんな善人だが、仕事は感服しないね。どうも偏狭で拘泥が多いやうだ。大塚は放浪性をもつてゐるから、得體の知れないところがあつて面白いけれど、須永のすることは、どうもこすんでゐてばつしない。」

「私なんかもさうですわ。」

「ちよつとそんな所もあるね。もうちよつと自由に大膽になつてもらふと素敵だ。これから己はみつちり教育するつもりだからね、本當だよ、しつかりしなくちや、可いかい。」荒井はさう言つて軽く肩を叩いて嫣然した。

(二)

荒井の目ざしてゐる温泉といふのは、この間一座の連中が泊つてゐた海濱のそれとは違つて、山がゝりの古い落ちつきのない場所であつた。葉子は幼少のをり母の組子につれられて遊山に行つた記憶があるので、それとときと何となく懐しさを唆られて、日頃自分を子供のやうに扱つてゐる荒井ではあつたが、二人きりだといふのが不安であつたけれど、日東のスタヂオといふ狭い一つの世界に生息してゐるものに取つては、誰でもさうであるとほりに、いくら彼の好意に甘えたいやうな氣分もあつて、會社の寵兒だといふ矜が意識しないではゐられなかつた。蔭で不満を訴へてゐるものでも、仲間同志の人と

人との對立上、そこに君臨してゐる荒井の顔色を覗はすにはゐられないのも當然で、葉子にしたところで、怖いやうな懐しいやうな感じがしながら、荒井に愛されることは厭ではなかつた。

それにこの前箱根へ三人で行つた時など、嫉妬の強い漣子が眞剣になつて怒つたこともあつて、不斷から漣子に縋り好感をもつことのできなかつた葉子は、どうかすると謀叛心が燃え立つた。安住と葉子との間にゐて、慾の深い漣子が、色々の仕事をしたことも、葉子は腹に据ゑかねてゐた。しかし葉子は、温泉行きの切符を買つたときには、何となく氣が痛んで、荒井に盲従したのを悔いてもゐた。

「まさか荒井ともいはれる人が……。」葉子はさうも思ひかへした。そしてそんな先入見にこだはつてゐるが、無駄な心配だといふ氣がした。

「この前箱根へ行つた時は、漣子が機嫌を悪くして、折角の清遊氣分が、滅茶々々になつてしまつたね。」汽車が動き出してから、荒井は浮かない顔をして葉子の顔色を見るやうに話しかけた。

「え、私あの時は何うしようかと思ひました。」葉子は寂しく苦笑した。

「あの時はひどく困つてゐるやうだつたね。漣子がまた年效もなく、ヒステリイを起こして、實に醜態さ。あゝいふ氣持ちはわかるかね。」荒井は足を組合せながら、窓枠へかけた肘に軽く頭をもたせて微笑みかけた。

葉子はうつむいて微笑してゐた。

「これから女優として立つには、あゝいふ氣持もわからなくては困ると思ふが、解らないうちが花だ。」

「さうでせうか。私には何だか解りませんけれど。」

「安住にしたところでさうだらう、大變怒つて歸つたといふぢやないか。無理もないことで、滿更厭でもなささうな葉さんの態度だつたから、あの男も可愛さうさ。私は同情するよ。」荒井は葉子を横から見つめてゐた。

「さうですか。」

「どうして安住がさう厭なのかね。風采はよし、金はあるし、人間は純粹だし、あの男なんざ三拍子も四拍子もそろつた方ぢやないか。」

「いゝえ、あの人は特別にいやだといふ理由はないんです。またさういふことは考へたことがございませんから……。」

「まあ人氣の點からいへば、結婚したとしないでは、大分ちがふやうだから、當然さういふ考へはもたない方がいゝんだが、悪くすると碌でもない監督や男優に誘惑されるからね。秋葉とは大分意氣が合つてゐるやうぢやないか。皆なさういつてゐる。」

「それは撮影の場合のことですもの。その外に意味はないんです。」

「あつても介意はんがね。それにあの男なら、俳優として前途を囑望されてゐるし、何かに都合がいゝ。」

少し學問を鼻にかけるところがあつて、何となし使ひにくいんだが、葉さんの相棒には持つてこいだらう。しかし演出で意氣の合ふ程度はいゝが、戀愛關係が深入りすると、却つてカメラの前で働かなくゝなる處があるので、それだけは警戒した方がいいゝかも知れんね。あの男も今までにさういふことは善くあつたやうだ。今の女だつて、確かカフェか何か何かにゐた女だらう。」

葉子は餘り好い感じがしなかつた。荒井にも嫉妬があるのかと思ふと、輕蔑したくなつた。

(III)

「秋葉さんて、そんな方でせうか。」葉子が少し反抗氣味で反問すると荒井はやゝ狼狽氣味で、

「いや、さう氣にされると困る。自家のスタジオに働いてゐる者は皆な好い奴ばかりだからね。それあの連中だつて人間だもの、酒も飲めば戀もする。睨み合ふこともあれば喧嘩もする。その中では秋葉なんか比較的役者くさいところがなくて、可愛い奴さ。傍の顔色を見ないで、すん／＼自分のする事をして行くといふ風だ。金の方だつて至極淡泊だ。世間では自家のスタジオのことを、ひどく風儀のわるいものゝやうに言つてゐるけれど、人氣ものが多いから、とかく目に立つのさ。」

「外の方は何だかよく解りませんが、秋葉さんの演技だけは、本當に純真だと思ひます。巧いんだか拙いんだかわかりませんが、私にはびつたり来るやうな氣がしてならないんです。」

「悪く芝居をするところのないだけがね。」荒井は頷きながら、「何と、つても未だ若いから、舞臺技巧

は成つてゐないが、しかし水のしたゝるやうな若さをもつてゐるよ。その點は葉子さんの方が一枚上かも知れないがね。あれが段々經驗をつんでくると、巧きはなるが、水氣がなくなつて来て、終には漣子のやうに壓潰されてしまふ。それで本當に嚙締めて味の出る奴はいゝが、そのまゝ干枯びたり、ばさけたりしてしまふ奴は始末がわるい。そこで各自の修業なんだが、修業と言つたところで、カメラの前に立つた時ばかりが問題ぢやないんです、矢張不斷の心掛にあるんだ。」

「私なんか一切夢中ですけれど、考へると手も足も出ないやうな氣がしますわ。」

「一度はさう云ふ時が来ないとも限らないね。行詰つてしまふ時がね。一座の花形には殊にその危機が大きく来るんで、フアンの人氣に乗つてゐるうちは好いが、一つ踏外すとひどい事になる。一つは運もあるね。」

「私眞逆さまに墜ちるやうなことがあつても介意ひませんわ。その時はさつさと映畫界から惨めな姿を消してしまひますわ。何うせ人氣なんて慘酷なものですもの。」

「大丈夫、私がついてゐるうちは、そんなことにはさせないよ。」

「でもそれは運命でせう。」

「運命だ。しかし私にはその運命を支配するだけの自信があるんだから。漣子だつて、今まで兎に角生命をもつてゐるのは、私の力だ。」

「何ういふ意味だか、私には解りませんけれど。」葉子は可笑しうに言った。

「それには色々の方法がある。宣傳やシナリオもその一つだが、何よりも不慮の生活だね。私は今迄あの女の爲には、随分盡くして來てゐる。物質的にも精神的にもだ。私は有ゆるものを犠牲として、生活上あの女に厭な思ひをさせないやうに、氣を配つて來てゐるつもりだ。世間では、私を悪魔か何かのやうに言ふものもあるが、大變な誤解だね、あの病人同様な女を、腫物にさはるやうな微妙な注意を拂つて、愛護して來たことはあの女自身が知つてゐる筈だ、事業のうへでは、私も何うかすると、少し遣過ぎやしないかと思つて、恐くなることもある。自分ぢやさうも思へないが、成程須永さんから見れば、或ひは辣腕かも知れない。しかしそれも會社の基礎が固まらない時分のことで、是からは比較的樂に仕事をして行けるだけの確信はついてゐるんでね、その點は皆なに信賴してゐてもらつても可いと思ふ。従つて出来るだけ皆なにも好くしようと思つてゐる。これあ此處だけの話しだけれど老朽者の手當なんかについては、殊に注意を拂ふつもりだ。だから私が會社をやつてゐるうちは……無論私の生涯の事業だから、罷める氣遣ひは萬々ない譯だが……葉子さんの一身は言ふまでもなく、俳優としての生活にも連子以上の保護を與へることができようと思ふ。差當り秋葉との戀愛があるなら、時機を見て結婚させてあげても可い。」

「そんな事まで考へちやをりませんの。」葉子は顔を赧くして否定したが、荒井といふ男が、思つたより優しい弱いところのあるのが、ちよつと意外であつた。何よりも葉子なぞにそんな打明話しをする彼の氣持ちが、何となし彼女の心を惹き着けた。

(四)

汽車から降りて少許りのところを、自動車で其の温泉場の古い町へ入つて行つた時、葉子は臆げに思ひ出される古い記憶を辿つて、まだ其の頃は若かつたらしい母の組子の膝に抱かれて、俥で行つたことなどが、胸を締つけるやうに悲しみを咬つた。深い谷間を流れる水、美しい水際の岩や木立、そこに架つてゐる橋、その橋を渡つて少し行くと、温かさうな人氣のする冬の温泉場の氣分が、仄かに鼻にしみる硫黄の匂いと共に、妙に彼女を忙しい情緒に浸らせた。

旅館は静かであつた。葉子はそれが何の旅館であつたかすらも覺えなかつたが、たしか紅葉の季節で、母の外に二人ばかり同伴があつて、時雨のふる日まで、徒然に三味線を弾いてゐたことや、花を遊んでゐたことなどが、かすかに記憶に残つてゐた。多分その女達は抱へであつたのであらう、臆病質でとかく氣むづかしく生れついてゐた葉子は、温泉土産の玩具など買つてもらつて、代るく機嫌を取つてもらつてゐたが、温泉宿の鬱陶しい氣分に昵むことができなくて、日暮方になると家へ歸りたがるのを、皆なで骨折つて賺してゐたのであつた。葉子は燻しのかゝつたやうな薄暗い部屋におちつくつと、ふとそんな事が思ひだされて、誰かに負さつて、二階の長い縁側を往つたり來たりしてゐた姿までが目に浮ん

で来るのであつた。若しかすると、今立つてゐる廊縁がその時の廊縁ではなかつたかと思はれた。杉の木立の多い山が墨繪のやうにすぐその目先にあつた。雨が少し降つてゐた。

「好い気分だね。疲れたかね。」荒井もそこへ出て来て、勅はるやうに言つた。

「いゝえ。今御母さんのことを思ひだしてゐたんです。」

「御母さんのこと！」荒井は目元に微笑を浮べたが融けるやうに、微笑するときの彼の目は女のやうに優しかつた。その目から受ける印象では、彼が悪人であるとは何うしても思へなかつた。鬪志の強い彼を向うへ廻した場合は知らず、差向ひでゐるときの彼は、思ひのほか親しみの深い感じを與へるのであつた。さうでもなかつたら、あの多勢の人を逆も統御して行くことはできないだらうと思はれた。

やがて二人は女中に案内されて、少し低いところにある浴場へおりて行つたが、町の人らしいお婆さんと、外に二三人の商人風の男が入つてゐて、浴槽のなかで何か高話しをしてゐたが、荒井と葉子が入つて行くと遽に沈黙になつて、間もなく男達は上つて行つた。葉子は何だかその人達の顔を知つてゐるやうに思へたが、彼等もぢろ／＼彼女を見た。多分叔父を知つてゐる米屋町の人達だらうと想像された。

「夏場の入湯には、誂へむきだ。來年の夏來ようぢやないか。」

「え、でも矢張秋が好うございますわ。」葉子はひと風呂つかると、上がり場へあがつて、慵い疲勞を感じながら、櫻色に光澤をもつた體を休めてゐた。湯氣が濛々と立昇つて、そこに膝を重ねるやうにして

蹲座んでゐる彼女の裸體が、軟かい曲線をもつて、コランか誰かの畫のやうな甘美な影像を浮かしてゐるのであつた。荒井は浴槽の反對の側の縁に胡座をくんで、これも男性的な肉體美の極致とでもいひさうな、均齊の取れた好い體をして、うつとりとして湯氣に茹つてゐた。

「それちや餘り逆上せないうちにお上りなさい。」荒井はさつさと石鹼で體をあらふと、やがてまたさぶりと入つてから、上り場へ出て行つた。

葉子もさう長くもゐなかつた。そして脱衣場へ上ると、鏡の前で髪や顔をきつと作つて、程なく襦袢姿で部屋へ歸つて行つた。

時雨がまた一しきり廂を音づれて来て、四邊が薄くなくなつたと思ふと、やがて電燈が來た。

「くらい電燈だね。」

するうち夕飯が運ばれて來た。

(五)

荒井が女中のお酌で酒を飲みはじめ頃から、雨が吹降になつて、物凄く板戸に吹つける音が、何うかすると葉子の心を怯えさせたが、木枯とでも言ひさうな風の吹方が、何となし此の土地の冬らしい感じを與へた。木の葉などが吹つけるらしかつた。

「少し飲んでも可いだらう。しかし障るかも知れんねえ。」

「え、葡萄酒なら病院でも少し戴きましたけれども、止しますわ。」

「ちや、遠慮なし御飯にしないさい。」荒井はさう言つて女中に給仕を命じたが、葉子は遽に箸をつけようとしないうで、雨の音に耳を欬てゝゐた。

「この人は、姐さんの目に何とみえる？」荒井は少し廻つて来たところで、其となし宣傳を遣りはじめたが、女にはそれ程の感じも與へないので、葉子と目を見合して苦笑してゐた。

「もう可いよ、お酌はこちらですするから。」荒井はさう言つて女を追拂つた。食べられもしないやうな御馳走が、二人の前にこて／＼と並べられてあつた。

「葉さんも此頃に、一軒世帯をもつちや何うだ。何時迄も漣子の厄介になつてゐるのも、感服しないぢやないか。」

「え。でも面倒くさいでせう。」

「面倒くさいことが嫌ひぢや仕方がないが、しかし氣の利いた女中を備へば何でもない。」

「なか／＼大變ですわ、經濟が。」

「經濟か。さうだな。しかし介意はないよ。會社はとにかく、私としては金の問題なんか考へてゐないんだ。」

「でも又借金が増えて……。」

「返さうなぞと思ふから、氣にかゝるんだがね。」

「さうは行きませんでせう。」

「私が呑込んでるから可いんだ。才賀にやつた金だつて、私の懐ろから出てゐるんだ。だから返す必要はなう。」

「だつて、何うしてとせう。」

「何うしてとも可いよ。」荒井は酒でほてつた顔に嬌然笑つて、「そんな事は問題ぢやないんだ。私は葉さんのためなら、何んなことでもしようと思つてゐる。會社をぶつ潰しても介意はない。十萬二十萬の借金を背負つても平氣だ。」

葉子は少し顔色が變つた。

「才賀に五千圓投つけてやつた時には、私もちよつと溜飲が下つたね、あんなだにのやうな奴は、金で面を張るに限る。と言つたところで、私は葉さんに恩に被せるやうな吝たれた了簡なんさはつばかりももたないんだ。可いかね。私をそんな吝な男と思つては困る。外の誰がさう思つたつて介意はないが、葉さんにだけは、さう思つてもらひたくない。可いかい。」荒井は少し廻り冗くなつて来た。

あんなにてきばきした男が、酔へば矢張他哩がなくなるかと思ふと、葉子は可笑しくもあつた。

「可けない。人にばかり饒舌らして。一杯くらの何ともないよ。いゝから少し飲んでごらん。今夜のや

うな晩は、少し酒でも飲んでしんみり話すに限る。」荒井はさう言つて猪口を差した。

「私飲めないんですもの。お酌しませう。でも随分お酔ひになつて……。」葉子は困惑したやうに彼を見て笑つた。

「だが酔つても眞面目なんだ、酒の酔を藉りて芝居をしてゐるんぢやない。」荒井はさう言つて少し眞面目になつたが、遽に顔を崩して、

「だが少し酔つたやうだね。」

「え。でもこんな寂しい晩は。」

「葉子さんも寂しい？」荒井はまた機会を得たやうに、「秋葉のことでも思ひ出してゐると見えるね。」

「いゝえ。」葉子は赧くなつた。

「いや、それも今夜聞かうと思つてゐるんだ。一體どこまで進んでゐるのか、次第によつては私にも少し考へがある。悪い意味でなしに。」

葉子は黙つて顔を俛せてゐた。

「笑談は笑談として、その點を一つ分明させておかうぢやないか。さうでないと私も氣持ちが悪い。ほんたうに秋葉を愛してゐる？」

「え。」葉子は微かに答へた。

「秋葉に許したとでも言ふのか。」

葉子はそんな事まで訊かれる理由はないと思つて、少し意地を張る氣で沈黙を守つてゐた。

(六)

暴風雨は一ときり小歇んだが、山の木の揺れる音は時々聞えた。流れの音もしてゐた。

荒井はばつと發した酔が内攻したやうに、顔が蒼くなつてゐたが、體を凍めて俛いてゐる葉子を見ると、遽に彼女を怯えさせたことに氣がついた。

「もうこんな話は止さうよ、ねえ。そんな積りぢやなかつたんだけれど、つい脱線してしまつたんだ。社長の威光か何かで、苦めると思はれちや私も詰らない。ねえ、可いかい。私は決してそんな積りぢやない。私だつて、媚びてくる女は澤山ある。しかし此頃、一切の女にすつかり幻滅を感じてゐる。第一に家内や漣子に懲々してゐるんだ。漣子さへさうなんだから……あれなんぞはまあ愛があつたと言ふんだらうが、しかし矢張宿命に過ぎないんだ。私はさう思つて諦めてゐる。私も今迄幾人かの女に接しては來たけれど、どれも是も無駄花で、本當に心から満足したといふ女は一人もなかつた。飢ゑたときに飯を食ひ、渴いたときに水を呑むよりも常套的な遊戯で、後から來るものは、恐ろしい幻滅だ。漣子などいつまで祟られてゐることかと思ふと、實際生きてゐる空もないくらゐのものさ。それは葉子さんも見るとほりだ。私を氣の毒だとは思はない？ さう云ふ氣持が解らないことはないだらう。」荒井は儼

しく訊いた。

葉子は同情の押賣をされてゐるやうに感じながらも、さう言はれると、其が此の男の本音であるやうに思つて、知らず識らず頷づけた。

「だから男といふものは、葉さんなんかと思つてゐるほど、汚いものでも、浅薄なものとは限らないだよ。私などは、俗な仕事をして、多くの人間を扱つてゐるだけに、一層その感が深いんだ。手が泥まみれになればなつてゐる程、氣持ちの上では純潔を求めてゐるんだ。しかしさう云ふ事は、誰も知つてもくれない。知つてもらはうとも思はない。たゞ葉さんだけに、私の本當の心を知つてもらひたい。それが私の願ひだ。」

葉子はそつと顔をあげた。

「それは解りますけれど、第三第四の戀もさういふ風に醒めて行くんでせうから、刹那々々で満足して行くより外ないやうですが……。」

「さう云ふ結論にも到達するが、強ちさうとも限らない。世の中には死よりも強い愛もあれば、生涯歡喜に耀くやうな戀もある。」

「え、でも今の場合は……。」

「やつぱり葉さんにも、漣子のやうな場合が來ると言ふのかね。」

「まあさうです。」

「若しさうでなかつたら？」

「そんな事は解りません。」

「けど私は生命を賭しても、惜しいとは思はない。酔つて言ふ譯ぢやないが、今夜此處で死んでも恨みはない。私が秋葉よりも、もつともつと深い愛を自信してゐる。若し葉さんの返辭が否だつたら、私は何うなるか判らない。私も男だ、言出すからには其れだけの覺悟はもつてゐる積りさ。」

と看ると、荒井の顔は蒼白色を帯んでゐた。葉子はむしろ恐怖を感じた。

風が轟々と山の森に唸つてゐた。

荒井は暫くすると、にやりと微笑んだ。

「しかし葉さん、心配しなくともいゝ。今夜は私も社長でも何でもないんだ。唯の荒井鋼一なんだ。私に辱をかゝせようとかゝせまいと、それは葉さんの自由なんだ。」荒井は少し調子を和けて、「私はたゞ葉さんが、大塚に紹介されて、自家の會社へ來てくれたことを怨むのだ。と言つて、今更首を切る譯にはいかない。すればツルミのスタヂオから影を隠すより外はない。私はそれほど眞剣なんだ。過去における幾箇かの戀なんか、こゝへ到達するための、退屈な山坂であつたやうにすら、私には思へるんだ。」

「でも漣子さんといふ方も△いますから。私こそ何の顔を提て、漣子さんにお目に懸れるんでせう。」

「あゝ、漣子ね。」荒井は暗い目をしたが、にやりと笑つて、「けどこの位の秘密が守れなくて何うするものかね。」

(七)

翌朝はけろりと風雨が收つて、吹ちぎられた黄色い木の葉や小枝などの散敷いた庭が、洗つた様に冬の薄日に照されてゐた。山も空もしつとりした静かさであつた。

八時頃に目をさました葉子は、何となし頹廢的な惱しさで、堪へがたい寂しさと悔を感じながら、縁側へ出て椅子にかけてゐたが、いきなり軀をそこへ投出して、心の限り慟哭したいやうな氣持であつた。昨夜の荒井の態度や言葉が悪夢のやうにまさしくと頭腦にしみつゐてゐたが、よく均齊の取れた貴族的な彼の顔が、何うかすると親しみ易い人間性を見せたり、悪魔のやうな不愉快な閃きを見せたりしたのも、不思議であつた。そして熱心に懇へてくる彼の言葉の何處までが眞實で、どこまでが嘘か判りかねたけれど、感激に似た或る張詰めた氣分を咬られたのは事實で、奇しい恐怖に戦きながらも、いつか運命の前に引摺られてゐる自分を見出したのであつた。

荒井も間もなく目をさました。そして葉子がどこにゐるか四邊を見廻したが、寂しげな彼女の姿が目に入ると、にやりと笑つて、そのまゝ又枕についた。スタジオなんかへ遣つて来て、社長らしい威光を示してゐる荒井とは、まるで違つた荒井が、眞中地肌の透けてみえる頭の毛を、氣味わるくむじやむ

じやに振亂して、やんちやんのやうな顔をして寝てゐるのであつた。葉子は腹立しくもあつたが、可笑しくもあつた。言つたことが嘘であるにしても、眞實であるにしても、燃えたやうな彼の獸性には偽りはなかつた。風采が立派であるだけに、一層皮肉な感じであつた。

葉子は遽に立ちあがつて、機械的に浴場へおりて行つたが、脱衣場へ入つて行くと、ふと自分の姿が冷たい鏡に映つた。昨日病院を立つとき結つて来た髪が亂れて、白粉のはげた顔の皮膚や脣が乾いた感じをもつてゐる。潤みをおびた目、何となしに厭な表情があつた。

浴場はちやうど混んでゐたけれど、葉子はうつとりとしたやうな氣持で物哀しい瞑想に浸りながら、隅の方にしやがんで、機械的に何時までも石鹸をつかつてゐた。

するうち四邊が幾らか静かになつた。葉子はふと荒井が起きたか何うかを見たくなつて、やがて上つて、鏡の前に立つた。其處へひよいと荒井の顔が映つた。彼は鏡の葉子と目を見合はして引縮まつた脣に嫣然した。葉子も嫣然したが、軽い反抗を感じて、直に目をそらせた。

「昨夜は眠れましたか。」荒井は接吻するやうな眞似をした。

「え。」葉子はさう言つて、それを逃げるやうに坐つて、髪を直しはじめた。

梳を透したやうな日光が、山一面に差しはじめ、二人が朝飯の箸を取る時分には、先刻程かゝつてゐた濛濛も綺麗に拭はれて行つた。

「昨夜は少し飲みすぎたせゐか、今朝は少し腹具合がわるい。」荒井はさう言つて直にお茶にした。そして煙草を啣へながら、籐椅子に腰かけて、

「この落葉は素敵だね。あの山は菌が採れさうぢやないか。ほんたうに好いお天気だ。今日は一つ外へ出てみよう。かうしてゐると、何だか東京へ歸るのが厭になつてしまふね。」

葉子は「さう。」といつたきり、黙つてゐた。

「歸ればまた仕事だからね。實に殺風景な生活だ。好い機會だから少しゆつくりして行かうや。ねえ、可いだらう。」

「でも皆さんが待つてゐらつしやるわ。」

「介意やしない。どうせ病院だと思つてゐるから。」

「でも悪いわ。」

「實に好い氣持ちだ。こんな處に、こんな環境があらうとは思はなかつたね。山も深くも淺くもないし、水も綺麗だしね。是から時々來るんだね。二人に取つてはさぞ思ひ出の深い場所になるだらう。さう思はない？」

葉子は、何かしら折合はない感じで、素直に返事ができなかつたが、荒井は氣にも止める風もなかつた。

慰 安

(一)

或日大塚が智恵子と同伴で、珍しく葉子を訪ねて來た。葉子はその頃父の大住と一緒に田端の方へ移つてゐた。それはちやうど漣子が湯ヶ原から歸つて間もないことで、勿論荒井の心持から出たことであつた。今迄とちがつて、今度の世帯は表面は父の家に身を寄せてゐるやうに見えたけれど、實は葉子が主であつた。父の大住が荒井の旨を受けて、彼の註文にはまるやうな家を、漸と見つけたのであつた。

葉子は當分誰にも逢ひたくなかつた。あれほど思ひ合つてゐた秋葉にすら逢ひたいとは思はなかつた。大塚や智恵子にも顔を見られなくなかつたが、しかし此の二人には窃と打ち明けたい悩みもあつたので、折を見て澁谷のアパートメントに大塚を訪ねてみようと思つてゐたが、又逢はない方が好いやうな氣もしてゐた。勿論引越の通知だけは、各方面へ出しておいた。

どこから噂が洩れたか、十一月の末に湯ヶ原から歸つて來た漣子は、葉子が病院を出てから、一兩日土地の温泉であそんでゐたことを知つてゐた。しかもその相手が荒井より外にないといふことも臆ろげに見當をつけてゐるらしかつた。が、眞實のことは解らなかつた。勿論荒井のことだから、葉子に秘密を守らせるつもりでゐながら、自分の口から撮影所邊りで宣傳したのかも知れなかつた、が、撮影所の

連中にしても、さういふ事には耳も目も人一倍早いので、現場を見て来たやうに吹聴する男もあつた。漣子だつてそんな事には抜け目のある方ではなかつた。が、口前の巧い荒井がそれを何ういふ風に説明して聴せたのか、移つて行く葉子を氣持よく出してやつた。それに手術後の漣子は肥立つたと言つても、健康が恢復したといふ譯には行かなかつた。寧ろ前よりも感傷性になつてゐたので、葉子に別れるのを心元ないことに思つてゐた。葉子は一層居堪らないやうな氣がした。

移つて行つた家は古かつたけれど、それだけ又四圍が廣々として、間數も離室をいれると、八つばかりあつた。大塚が来たとき、葉子は庭の落葉をはいてゐた。家主が植木屋なので、殊に植込の多いのが葉子の氣に入つた。

母屋の書院へ通された大塚と智恵子は、庭や家の廣いのには驚いてゐた。

「葉子さんもこんな家へ入るやうになつたんだな。」大塚は感心してゐた。

「ほんたうに好い家ね。女優には少し不向だけれど。」

「父の好みですもの。父はお弟子が來ますから。それにお家賃が格安でしたから。」

大住もそこへ來てお茶をいれてくれたが、ひどく機嫌が好かつた。

「いや、不思議なもので、震災後は私の商賣も上つたりぢやらうと思つてをりましたが、なか／＼さうでないの、お蔭で少し手廣いところへ移りました。鶴見へは大廻りをしなければならぬので、葉子に

は氣の毒ちやつたけれど、撮影のあるあひだは大森に泊つても可いからと言ふので……。」大住はつるつるした頭を撫でながら、

「しかし廣いばかりで、御覽のとほり豪い荒れてをります。まだ床に飾る軸物の用意もないといふ始末で。まあ追々。」とそこに立かけてあるヴァイオリンをぢろりと見た。

葉子は暇々に樂器を弄らうと思つた。

「山のロオマンズは大物ださうですね。」

大住が座を立つてから、智恵子はその方へ話しをもつて行つた。

「え、ずるぶん長尺物ですけれど、甘いものなの。」

「あなたがお怪我をなすつたと聞いて、私心配してゐましたわ。でも大したこともなくて？」

「宣傳だらう。」

「え、まあ。」葉子は笑つてゐた。

「ロケーションで大分ごたつきがあつたんだつて？」

「少しばかり。」葉子はやつぱり寂しい顔をしてゐた。そして、

「私何だか氣乗がしませんでしたの。見て戴だきたくないんです。」

「何うしてだ。」

何時もの葉子は口数は利かないけれど、もつとはきくして、氣負つたところがあるのに、今日は不思議に憂鬱であつた。

「そんなに自信のないものなの。」智恵子が重ねて訊くと、葉子は寂しい微笑を浮べて、

「何だか感興が乗らなかつたやうに思へますの。セットで撮つた部分が可けないでせうと思ひます。」

「それは何ういふ譯だ。感興の乗らない理由があるのか。尤も怪我したからね。」

「そんな事は平氣ですけれど……。」葉子は苦笑しながら、

「それとは別問題ですけれど、私皆さんに少し伺ひたいことがございますの。」

「何ういふ事？ 何か問題が起つた？ 才賀の叔父さんのことかい。」

「あれは解決がついたんです。社長さんが金をやつて下さいました、さう云ふことも、言つて見れば私の自由をいくらか束縛した形なんですけれど。」

「荒井君が金で貴女を縛つたといふ譯かね。」

「縛る……といふんぢやないんですけれど、私の氣持から言へばまあさう云ふ事でせうね。」

「しかし、それは女優としてかね。」

「まあ、さうなんでございますけれど……。」葉子は曖昧に答へた。

「けど、金を返せば可んだらう。」

「え。」

「何だか要領を得ないな。」大塚は倍しかつた。

「え。そのうち伺つてお話しします。」

「それでも可い。ところで安住君も東京へ来てゐるんでね。何うしたのか、あの男はふつつり葉子さんの事を口にしなくなつてしまつたんだ。喧嘩でもしたかい。」大塚がきくと葉子は暗い目をして、

「別段喧嘩はしません。けど、安住さんが沈黙を守つてゐるなら、私も沈黙してゐますわ。」

「さうか。ぢや聞かない。何だか變だね。」大塚は胡散げな笑方をしたが、急に思ひついたやうに、

「こんな家へ入つていゝのかい。そんなに収入があるのかね。大した家ぢやないか、大住さんのお弟子が殖えたしたところで、知れたもんだからね。何か出来たんぢやないか。」

「嘘ですわ。」葉子は赤くなつた。

「でもいゝぢやありませんか。この位の家にゐたつて。」

「そらいゝさ。どうせ商賣が商賣だから、まさか裏長屋にもゐられないだらう。こんなに廣いんなら僕おいてもらつてもいゝな。」

葉子の耳にはそれがひどく皮肉に響いた。

「どうして？」葉子は反問した。

「可けないのかい。」

「介意ませんわ。貴方にゐて戴ければ安心です。」葉子は少し意地張に出た。

何となしに三人は氣拙くなつた。葉子はもう何もかも知られてゐるやうな氣がした。大塚にならば何んなことも打明けて相談できると思つたので、今の自分の地位について、彼から意見を徴したいと思つたのであつたが、大塚がもう知つてゐて、今のやうな冷かな態度に出るなら、此方も弱味を見せまいと思つた。

すると大塚が藪から棒に突然言ひ出した。

「戀人でもできたんぢやないかね。今日は何だか妙に挑戦的だね。」

「私が？」葉子は驚いたやうに反問して、「どうして私が挑戦的に見えるでせう。」

「ちつともそんな事はないわ。」智恵子は打消して、「元はと言へば、この家が問題になつたんだわ。詰

らない事なの。それよりも、今日は三人で何處かへ行かうぢやありませんか。」

「それも可からう。」大塚は笑つてゐた。

「いゝでせう葉子さん、お附合ひなさいね。」

「えゝ、お伴しますわ。」葉子は調子を合せて、「暫く出ませんから、何處か賑かなところへ行つて見た

いんですの。」

「浅草へでも行つて見ませうか。」

「鑛山のローマンスでも見るか。」

「あれは今神田よ。」智恵子が言ふと、葉子は氣がなさうに、

「私が厭がるのに、大塚さんも意地が悪いのね。」

(三)

葉子はその映畫が出来ないふよりも、青年労働者に扮してゐる秋葉との戀愛場面を見せつけられるのが、今となつて見ると、單に映畫として見過してゐられないやうな自分の實感がスクリーンのうへに浮上つてゐるので、氣が差した。あの時秋葉に許した熱情的な接吻が、さながらにスクリーンのうへに強い印象を焼きつけてゐるのを、平氣で見えてゐられようとは思へなかつた。大塚や智恵子に見られるのも厭であつたが、其よりも自身に恥かしかつた。秋葉に濟まないと同時に、自身に氣が咎めた。その肩がまだ乾かないうちに、直ぐ第二の男の強要を斥ける勇氣もなくて、おめく貞操を許したことは、秋葉の愛に對する侮辱であると同時に、彼女自身の憎むべき冒瀆であつた。

葉子はそのとき、三日ばかり荒井とあの温泉場の空氣に浸つてゐたが、彼を憎む心と愛する心が、劇しく突き合つた。それは自分にも判断のつかないやうな惱ましい苦しみであつた。其に比べると、秋葉

への愛は、もつと淡々しい幻影的な美しさであつたが、いつとはなし荒井の肉情的な魅力に不思議な愛着の惹かれるのを拒むことができなかった。

東京へ歸つて来た時、葉子は一夜獨りで泣いてゐたが、其の翌日、スタジオで秋葉を見たときには、罪囚のやうな氣持で、目眩しい彼の目を避けたのであつた。そして其からの氣持はすっかり暗くなつて撮影に對する感興も萎縮してしまつた。

「社長がむかひに行つたんだつて？」秋葉はきいた。

「え、来て下さいました。」葉子は白々しく答へたが、自分のづうづしいのに憫れた。

秋葉も無關心ではゐられなかつた。どうかすると戀するものゝ疑惑が彼の目に潜んでゐるのを、葉子は氣味悪く思つた。秋葉はしかし葉子に對して不純な感じをもつまいとしてゐるらしかつた。彼女を信じ切つてゐようとしてゐた。撮影の意氣がしつくりしないのは、病氣のせみだと怒してゐた。

葉子はこの煩悶を大塚にだけは、聞いてもらひたいと思つてゐながら、若い虚榮と羞恥が、氣持ちを硬張らせて、ひどく神経質な態度になつてしまつたのであつた。

とにかく出ることにした。葉子はわざと質素な服装をして、少しばかり餘計な小遣を手提袋に入れて家を出た。

「やつぱり浅草にしませうね。」智恵子は電車へ行く途中で言つた。

十一月とも思はれない閑な空であつた。葉子は智恵子と並んで歩いてゐた。一頃の彼女とちがつて智恵子の氣分は、何となく晴々してゐた。大塚との戀が進行したのぢやないかと、葉子は想像してゐた。大塚はどこか虚無を見詰めてゐるやうで、女の氣持ちなどを冷かに傍觀してゐるのだと思はれたが、でも葉子は今になつてみると、いくらか彼の心が自分の方へ働きかけようとしてゐた事があつたのを、思ひ當るのであつた、それは東京へつれて来て貰つた前後のことであつたが、今は何を考へてゐるか當りがつかかなかつた。恐らく智恵子だらうと思はれたけれど、妙にまた回避してゐるやうにも思へた。その證據には、智恵子と安住金作とを結びつけようとしてゐるのであつた。しかし本心のわからない大塚のことだから、分明したことは判断ができなかった。彼はいつでも何うでもよいやうな顔をしてゐるのであつたが、どこか近代的な臆病さがあつた。

「鎌山のローマンズは何時だ。今からぢや遅いか。」大塚はまた言出した。

「晝間には遅いでせうが、夜には早いでせう。でもお止しなさいよ。葉子さんが厭がつていらつしやるぢやありませんか。」

「浅草も詰らんね。」

「あゝいふ處も偶には好ござんすよ。葉子さんは人を見たいんださうです。」

「とにかく真中へ出ようよ。」

「丸の内？」

「とも限らないが。」

(四)

三人が日比谷へ出て行つたのは、冬の日影が薄れて、寒い風が肌に苛つく時分であつた。葉子は早く話してしまはないと、いつまでも胸の痞が収まらないやうに思つた。懺悔や告白は、醜い罪を拭つてくれないにしても、幾らか心の荷が軽くなる。其の機会を今日捉へないと、明日はいつそ言ひにくくなる。

葉子はそんな事を考へながら、二人について菊なぞ見て歩いたが、誰の發言ともなく、軽い食事を取るつもりで、ホテルのグリルへ入つたのは、街頭に電燈のつく時分であつた。

「到頭鑛山のローマンスを見はぐしてしまつたね。」大塚は揶揄ふやうに言つた。

「まだあんな事を言つてるのね。是からでも可いわ。」智恵子は笑ひながら、フォークとナイフを使つてゐた。

「厭がるほど尙見たくなる。人情は不思議なものさ。」大塚は笑つた。

「でも最初ほど感激がありませんから。」葉子も嫣然しながら、手にしてゐた葡萄酒のコップを口へもつて行つて、少し酔はうと云ふ氣で、ぐつと飲んで、

「私何だか段々墮落して行きさうな氣がするんです。」

大塚は少し驚いたやうに目を擧げた。

「墮落だつて？ 何うして。何かさう云ふ事があるのか。」

「判りますか。」葉子は目眩しさうに目をばちつかせた。

「何がさ。ちつとも判らない。」

「私にも判りませんわ。墮落つて何ういふ意味？」智恵子も葉子を見た。

「また何か大業に考へてるんだらう。それとも何かあるのかね。」

「え、少し……。お恥かしいことなんです。私つくづく自分の弱いことを感じましたの。かういふ事は人に話すべき事か何うかわかりませんわ。寧ろ一人で苦しんでゐた方が……。葉子は遽に聲を落とした。遽に涙が差しぐんで來た。

大塚は黙つてうつむいてフォークを使つてゐた。

「何うなすつたの葉子さん、ほんとに何かあつたの？」

「私があゝ云ふ家を借りた、その理由を御想像なすつたでせうと思ひます。あれはお家賃が割合お安いんですけれど、其にした所で随分身分不相應ですわ。家族だつて、三人か四人ですもの。」

「成程ね。」大塚は首を傾げながら、「それあさう言へば、僕も不思議に思つてゐたんだがね。しかし御

父さんも腕があるから、何かまた好い椋鳥でも引掛けたんだらうと思つたんだ。さう云ふ事を葉子さんは極り悪く思つてゐるんぢやない。それとも葉子さん自身のことかね。」

「え。」葉子は遽に杖から手巾を出して目を押へたが、直に笑顔になつて、

「私莫迦ですね。私自分が信用できなくなりました。」

二人は返事も出来なかつた。ちやうどボーイが料理を運んで來たので、大塚は何か言はうとしたのを、遽に口を噤んだが、暫くしてから、

「問題は荒井ぢやない？ 若しかしたら。」

「え。さうなんで御座いますけれど……。」

「それで何うしたんだ。」

「私が悪いんです。私が卑怯なんです。」葉子は激したやうにさう言つて、それから少し胸を落着けてから、

「私今度ぐらゐ秋葉さんに感激したことはございませんでした。あのロケーションの間、私はほんたうに幸福でした。それは安住といふ人の存在が、まるで無視されてしまつたから、私の氣持が秋葉さんの方へ傾いて行きました。あの人も本當に私を愛してくれました。皆なが歸つてから、一日病床に附添つて下さつたからでした。」

「秋葉ね。さうか。それあしかし好いぢやないか。それと荒井の問題と、何んな交渉があるんだ。」

「御想像にお任せしますわ。」

「さうか。とにかく荒井が可けないんだね。」

「え、でも私が悪いんです。私達は病院を引揚げてから、温泉場に三日もゐました。着いた晩は大暴風雨でした。私は秋葉さんに濟まないことをしてしまひました。」

「ふむ。」大塚は思はず嘆息を發して、「矢張さうかな。僕の見損ひだつたか。」

(五)

智恵子は荒井の噂が出ると、遽に寂しい表情をして黙つてゐたが殊にそんな事實があるとする尚更不愉快であつた。相手が親愛な葉子であるだけに一層厭な感じがした。大塚はそれには介意はず、「僕もさういふことは豫想しないうもなかつたが、寧ろ須永の方が何だか變だつたから、何か事件が起こつて困ると思つたんだ。荒井の方は何しろ初めから商賣上の立場から歓迎したんだし、蓮子といふ喧し屋もついてゐるんだから安心していゝと思つてゐたんだが、僕の觀察は間違つてゐたやうだね。」と言つて更に葉子に向つて、

「葉子さんも少し可笑しいね。秋葉といふものがありながら、何うしてそこまで引摺られてしまつたらう。」

「それあ仕方がありませんわね、葉子さん。一旦男に見込まれたら脱れつてありませんわ。あの野蠻な荒井さんのことでも、社長の權威を振り廻して、高壓手段でやつて來られた日には、いくら葉子さんが堅固だからつて敵ひつてありませんわ。それあ葉子さんを責めるのは酷よ。」智恵子は葉子のために辯じた。

「荒井はそんな無法者かね。」

「何うだか知りませんが、いづれ其は退引ならない瀬戸際まで引摺つて行つたでせうから。」

「そんな風かい。まさか荒井だつて……贓物にしろ何にしろとにかく紳士だ。暴力を揮つたとは思へないね。」

「暴力ならまだしも助かるわ。さうでないだけに……。」智恵子は言淀んだが、少し言過ぎたやうに思つて遽に極悪さうに面を伏せた。

「經驗があると見えるね。」大塚は揶揄半分に言つた。

「笑談ぢやないでせう。貴方のやうな不真面目な人嫌ひ。」智恵子は腹を立て、「さうなると私何處までも荒井に反感をもちますわ。葉子さんの味方をしますわ。」

「いや、僕も葉子さんを責めようと言ふんぢやない。いづれ酸いも甘いも知つてゐる荒井のことだから、脅したり、瞞したり巧妙な手段を弄したに違ひないが、それにしても少し弱かつたね。」

「葉子さんそんな強い女性ぢやありませんわね。」

「しかし今更何と言つても仕方ない。荒井だつて葉子さんを愛すればこそ、そこまで行つたんだ。まさか一時の氣紛れや、卑劣な慾情に駆られて遣つたことぢやあるまい。葉子さんをそこへ唾へ込んで行つた手段は憎いけれど、動機まで不純だとは言へないだらう。」大塚は葉子に訊くやうに言つた。

「あの方世間で思つてゐるほど、悪人ぢやないと思ひました。御自分でもさう仰しやつてよした。それに才賀の方も、自分の手から五千圓もお出しになつたんですから。」葉子は辯解するやうに言つたが、それも何うやら自己辯護になりさうなので、訂正するやうに、

「私がやつぱり弱かつたんです。そんな豫感がありながら、そこまで従いて行つたのが可けなかつたんです。」

「それぢや全然荒井に好感がもてなかつた譯でもないんだね。」

「それにあの方思つたより純なところがあると思ひました。澁子さんなんかの全く氣づかないやうな好いところが、私に解るやうな氣がしましたの。」葉子は憧憬的な目で、空を見るやうに言つた。

「成程ね、それあさうかも知れない。あの男を憎むものもある一方ひどく心服してゐる者もあるところを見ると、確に好いところもあるに違ひないね。葉子さんがそこへ惹着けられたとすれば、そんなに悲觀することも無い譯だね。」

「でも、私には分明したことが判りませんの、秋葉さんの方を何う解決していいか、それも考へてゐませんから。」

二八六

「それで秋葉に對する氣持は？」

「何てんでせうか。あの人には本當に濟まないと思つてゐますけれど……荒井さんは、それは藝術的な共鳴で、若いものに有りがちな單純な空想だから、眞實の愛ぢやないつて仰やるんです。」

「でも、何うですかね。葉子さんの心持一つですけれど、私秋葉さんが可哀さうだと思ひます。」

(六)

葉子はさう言はれると、痛いところへ觸られるやうで、我知らず頭が下がつたが、智恵子に言はれなくとも、何うせ靜としておける瘻ではなかつた。寧ろ深刻にゑぐつて貫つた方が、慰まるやうな氣がした。「けど荒井君は秋葉との關係を知らなかつたのか。葉子さんは話さなかつたんだね。」大塚は詰問した。「どこまで進んでゐるか」と訊かれたんですけれど……でも接吻以上、別に……。「葉子は微聲で答へた。「その事が分明しないうちは何とも言へないけれど、本當に荒井が厭だつたら、そこまで行かない譯だね。僕は葉子さんの氣持がわからない。」

すると智恵子は葉子を庇護ふやうに、

「解つてゐるぢやありませんか。私達年の行かない女が、さう云ふ場合に、自分自身の明快な判斷をも

つといふことは、實際問題としては随分困難なことぢやないでせうか。たとひ判斷があつても、相手が惡魔的だつたとしたら、私荒井を憎みます。そこまで葉子さんの心を盪感した荒井は立派な惡魔です。

それあ多少あまいところもあるでせうし、葉子さんを愛してもゐたでせうけれど、その愛はすゝぶん劣情的なものだと思ひます。」智恵子は憤慨した。

「それあ僕だつて、葉子さんを責ようといふんぢやない。矛盾は誰にもあり勝ちのことだからね。しかし濟んだことはほり返しても無駄だ。葉子さんのいくべき道は一つだ。」

「え、私は秋葉さんに行くのが、眞實だと思ひます、何を犠牲にしても、秋葉さんへ返つて行かなければ可けないと思ひます。秋葉さんが許すか許さないか、それは秋葉さん自身の問題です。葉子さんの取るべき道は明らかぢやありませんか。」智恵子は熱心に言つた。

「それあ純理的に言へばさうだ。けど、實際さうも行かないんぢやないかな。其處に葉子さんの矛盾があるんだ。それで苦しんでゐるんだ。」大塚は宥めるやうに言つて、

「荒井君だつて、智恵子さんの決めてゐる様な人間でもなさうだ。外のことは兎も角、葉子さんを愛してゐることだけは、眞實だらう。世間には若い女の心を惑すやうな美しくしいことばかり口にしてゐて、案外破戒無残な男もある。随分色々なことをして來て、それで満足が出来なくて、反つて純眞な愛に憧がれてゐるものもある。荒井君なんか恐らく後者かも知れない。」

「貴方は荒井に好意をもち過ぎるんですね、それに荒井にだつて、人並に人間らしい氣持もあるでせうから、掘返してみたら、少しは純潔なところも出て来るでせうね。けど其は色々の女に飽きたからです。澁子が荷厄介になつて来たからなんです。あの人は人生を退屈に感じてゐるに違ひないんです。良心も道徳も麻痺してしまつてゐます。そこで新しい刺戟を求めるために、葉子さんに齒を剝出して来たんです。紳士の面を被つてゐる悪魔なんです。私は何うしても荒井に好意はもてません。家のお母さんを不幸にしたのも、あの人です。葉子さんだつて、今にも人氣でも衰へるとか、體でも悪くなりでもしたら、荒井はまた外の若い女を獵るに決つてゐるんです。」智恵子は口を極めて、父を呪つた。

大塚は驚いたやうな目をしてゐたが、葉子は一層居堪らなかつた。

「まあ、さう言つたもんでもないさ。智恵子さん母子は特別に反感をもつ理由があるんだから、それも無理はないと思ふけれど、強ちさうとばかりも思へない點もある。若い女の胸に觸れるところがあるとすれば……。」

「判りませぬわ。」智恵子は受容れようとしなかつた。

「僕だつて一度手をつけたら、あゝ云ふ風になるかも知れない。たゞ臆病なだけさ。あゝ言つたやうなものは矢張體のどこかに潜在してゐる。」

「でもそれは想像ね。人殺しの心理は解つてゐても、誰でも殺人罪は犯さないでせう。」智恵子は押捺

ひながら、

「貴方には又その興味がなさ過ぎるんですもの。」と笑つた。

(七)

何時までグリーンに構へこんで話してゐる譯にもいかないので、大塚はいゝ加減に切りあげようと思つて、たばこに火を點けながら、

「立て込んで来たから出ようか。いくらいつても仕方がない。大勢に順應するとしておかうぢやないか。」といつて笑ふので、昂奮してゐた智恵子も餘り力瘤を入れすぎたのに氣が差して、

「え、さうね。これは私の主観ですからね。でも私は葉子さんがお氣の毒でならないんです。人もあらうに、荒井の犠牲になるなんて、聞いただけでも残念だわ。私は何んことがあつても荒井を誣つてやります。私達共同の敵として。」

「さう怒つても仕方がない。一應荒井君の了簡も聞いてみなけあ。」

「貴方は駄目よ。葉子さんの保護者といふ地位にありながら、荒井を控制することもできなくて、今となつては取返しつかないことだわ。それよりか葉子さんの態度一つよ。もう遅いけれど、今のうちなら何うにか救ふ道もあるでせうから。誰にしても思ひ違ひや過失は有りがちです。葉子さんの場合は殊にさうです。周囲の事情がさう云ふ風になつてゐたんですもの。」智恵子は慰めるやうに言つて、「けど

其は恐しいことすわ。今に漣子さんなんかと同じ運命になるんぢやないかと思ふと、ちよつと寂しい氣もしますの。」

二九〇

葉子は黙つて頷いてゐたが、大塚は少し熱をさますやうな口吻で、

「けど、それは少し葉子さんを侮辱するもんだよ。僕も良いことをしたと、讚める譯には行かないし、飛んだことになつたとは思ふけれど、葉子さんは荒井の良いところを見てゐるんだ。荒井から共鳴を強ひられた形ちもあるが、まあ相當に誠意があつたものと見てやつても可いぢやないか。僕も一度は憤慨もしたけれど、聞いてみると強ちさうとばかりも言へない點もある。大體中年ものゝ戀愛といふと何か不道德なことのやうに思つて、冷笑するのが一般の傾向だけれど、それも少し偏見だと思ふね。葉子さんの場合だつて、秋葉といふ愛人があるから彼是れ議論があるやうなものゝ、それさへなければ、至極單純な問題ぢやないか。若い秋葉より、荒井君の方に寧ろ深刻な愛があつたと言へば、それまでだから。それほどでなくとも、或る程度の共鳴があつたとすれば、それでも可い譯だね。これは理窟ぢやない。葉子さんの心理解剖をすれば、さうも言へるんぢやないかね」と言つて少し茶化すやうに、

「まあさう傍でいきり立つ程のこともないよ。荒井君もそれだけの若さをもつてゐると思へば、寧ろ心強いやうな氣もするぢやないか。智恵子さんの感情的になるのも、無理はないと思ふが、お父さんのことだから、少し大目に見てあげても可いぢやないか。」

智恵子は赤くなつたり蒼くなつたりしてゐたが、仕方なし笑つて、

「それなら其でいゝでせう。葉子さんがさう云ふ風に満足して行けますか何うですか、少し時日がたつてみなければ判らないでせうけれど……。」

「それに何といつても、人間には生活が付きものだからね。戀愛ばかりぢや生きぢやゐられない。その點では荒井君は十分満足を與へるだらうと思ふし、するから……。」大塚はテーブルクロスにおち散つた煙草の屑を拂ひながら、「眞實いふと、僕は餘り興味がない。荒井君が未だ戀に酔へるなんかは、美ましいやうな氣もするが、僕自身は今更酔つてみる氣もしないし、何うでも可いと思つてゐる。」

「本當ね。」智恵子は寂しい顔をした。

「それよりか此處に哀れを止めたのは、安住さ。あの男は今の氣持をどこへ持つて行くか。同情するなら智恵子さんも、あの男に同情してもらふと助かる。」

「あの人もう出てこないでせう。」

「さあ。」

そろ／＼起ちあがつた。そしてグリーンルを出て、入口の方へ出て行かうとすると、食堂の廊下のところで、ばつたり秋葉に出會つてしまつた。

寂しき愛

(一)

葉子は東京へ歸つてからの自分の態度が、秋葉に何んな感じを與へたかど、自分にもよく判つてゐたので、何うせその儘には濟まされないだらうと、絶えずそれが苦になつてゐた。スタジオで一絆になつて、話し合ふ機會もあつたけれど、そんな問題を持出すやうな餘裕はなかつた。一度大森へ來たこともあつたが、漣子もゐたのでつい其の話しには觸れずじまつた。葉子は引越してから一度手紙を出さうと思つたけれど、書けば際限なく書きたいことがありながら、自分の氣持を何う書き現していゝかに迷つた。書きあらはすべき自分の氣持が、本當に擱めてゐないやうにも思へて、我ながら、悟かしく思つた。で、氣にかゝりながら、其のまゝになつてゐた。

葉子は廊下でひよいと秋葉を見出して、はつと思つたが、秋葉も懐かしげな目をして、じつと葉子を見た。

大塚と智恵子は、扮装の秋葉をスクリーンの面で見つてゐたけれど、素顔の秋葉を知らなかつたので、その儘そこにある椅子に腰かけて、煙草を喫してゐた。食堂がちやうど開ける時刻で、硬いヴァキオリンの音などが、その邊の空氣を浮立たせてゐた。

その間に秋葉と葉子は言葉を交してゐた。

「お連があるんですか。」

「え。」

「誰方？」

「大塚さんと須永さんです。」

「あゝ、大塚さんなら僕も目黒のスタジオで見つてゐますよ。紹介してもらつても可いけれど、今晚はここでG—社中の演奏會があるので。」

「さう。」葉子は頷いた。

「聴きませんか。切符は一枚ぐらゐ何うにかなると思ひます。」

「さうですね。でも随分長くゐましたの。それに私音楽が解らないんですもの。」

秋葉はその挨拶に、ちよつと照れた。そしてまじ／＼彼女を見てゐたが、何となく焦燥を感じてゐた。

「この頃やつぱり大森ですか。何だかあそこに居ないやうな話しも聞いたんですが。」

「え、越しました。」

「どこへ。」

「遠いんですの。田端ですの。」

「田端？　いつ越したんです。何うして通知を寄越さなかつたんです。」

「でも、つい越したばかりですもの。」

「遊びに行つても可いんですか。」

「え、どうぞ。」

秋葉はポケットから小さい手帳とエバアシヤアブとを取出して、

「所を言つて下さい。」

葉子は仕方なし所番地を打明けた。秋葉は薄すらした明りの傍へ行つて、それを書留めながら、

「どんな風なんですか。愈々一戸を構へたんですか。」

「いゝえ、父と同棲してをります。父の都合で借りた家ですけれど、間敷がありますから、まあ好いんですけれど、父は舊弊ですから。」

「しかし貴女の本當のお父さんでせう。」

「それあさうなんでしょう。一緒にゐなかつたものですから、親しみは薄うございますの。」
葉子はさう言つて微かな笑聲を立て、「でも私の事は何彼と心配してくれませう。父自身では幸福なでせうと思ひます。私もできるだけは、一緒に居てあげたいと思ふもんですから。」

「僕今度お父さんにもお目にかゝらせて貰ひませう。親子の人情は何と言つたつて純なところがありま

すからね。」

「私今度さう思ひました。」

「それあこんな事を言つちや悪いですけれど、清瀬漣子の處になんか居るより遙に好いですよ。あの人の生活こそ、何だか藝人じみてゐて厭です。貴女がよくあんな處にゐると思つて、感心してゐたんです。社長だつて可けないですからね。」

「可けないの。」

「いや、別に……。」と秋葉は訂正するやうに、「社長はあれだけの人ですけれど、あの家の空氣は随分沈滞したものですからね。」

「さうね。」葉子は、につと苦笑した。

(二)

秋葉はそのまゝでは別れにくかつた。何とかして謎を釋かないうちは氣が濟まないものであつた。葉子の美しさのなかに、何か黒い影のあるのを感じてゐた。それを感ずれば感ずるほど、一層葉子が感はしくも美しく見えるのであつた。今夜の演奏會なんかは、もう何うでも可かつた。

「ちよつとお二人に御紹介していただきますか。」秋葉は氣兼ねるやうに言つた。
「え。」葉子は快く頷づいて、手輕に二人に紹介した。

「さうでせうと思つてゐたんですけど、何うぞ宜しく。」智恵子は明るい目をして、
「今晚演藝場に何かございますの。この頃はダンスもちよつと中止のやうですが。」

「え、さうですね、實はGトリオの演奏會なんですが、貴女は音楽は。」

「聞くことは大好きなんですの、あの團隊もちよつと感じがいと思ひますわ。」

「みな熱心ですから、若しお氣がむいたら場席は何うにかできようと思ひますが……。」

「は、有難うございます。」智恵子はちよつとお辭儀をして、

「今晚の曲目は？」

「こゝにあります。」

秋葉はポケットからプログラムを取出して、智恵子の手に渡した。智恵子はベートベンの三重奏や、
クライスラのライベスフラウドに、シウベルトのモメントミウジカル、それにドボルジャクのユモレ
スクなどヴァキオリソソロなどの間に、ブラムスのリードで森山久子の名のあるのにつけながら、
「あゝ、森山久子さん、此の方二度ばかり聴きましたけれど、ソプラノとして本當に申分のないお聲で
すわねえ。」

「え、何しろもう一流になつてしまひましたから、如何ですお聴きになりませんか。」

「如何です、大塚さん。」智恵子がきくと、大塚はふかり〜煙を吹いてゐたが、

「貴女が聴くなら。」と、氣のない返辭をした。

暫くすると三人は打揃つて秋葉に案内されて行つた。そして後ろの方だつたけれど、とにかく場席に
就くことが出来た。大塚は一人後ろで、葉子と智恵子とが前列の方へ出た。そして其の端の椅子に、
秋葉は葉子と並んだ。

トリオがもう初まつてゐたので彼等は音をさせないやうに、靜かに椅子にかけた。

「何んですか、大層むづかしい曲ぢやないか。」曲がすんで、拍手のうちに演奏者が引込んでしまふと
大塚が後ろから言つた。

すると智恵子がつと微笑んで、

「え、ベートヴェンの室内樂の後期の作品は、莫迦にスケールが大きうございますから、なか〜聴く
のに骨が折れますの。」

「さうですね。」と、秋葉は葉子の胸にしに智恵子の方へ目をやつて、

「作品第一のトリオなんと來たら、まるでモツアルトのやうですからね。今のなんかと比べると、大變
な違ひですね。」

「え〜」と智恵子は頷いて、

「今度は森山さんね。」と目をはつちりさせた。

餘り感じの好くない顔の持主である、森山久子が無雑作なスタイルで、つか／＼と舞臺の最先へと出て来て、ちよつとお辭儀をした。其の後から伴奏者の戸川榮三が樂譜をぶらさげて出て来る。そして久子が目眩しさうな目をして、ちよつと髪をなであげながら伴奏者に合圖をすると、伴奏者はすぐピアノを叩きはじめた。

「これ私、カルプのを蓄音機ので聞いたことがございますの。」智恵子は秋葉に私語いた。

「あゝさうですか。僕も聴きました、森山のはカルプに決して劣つてはるませんでせう。」

「え、よくお誂ひになりますわ。」

「いゝ歌ですことね。」葉子も聴きほれるやうな表情をしてゐた。

「子守歌ですわ。」

「實際いゝですね。」

(三)

葉子は何うも何時かは秋葉に事實を打ち明けなければならぬ事だと思ひながら、今夜だけは許してやらひたいやうな気がして、智恵子や大塚を障壁のやうに思つて、秋葉にふれるのを避けてゐた。秋葉からいへば、大塚と智恵子は、この際邪魔物の感じがしないでもなかつた。音樂を聞くなら葉子と二人だけで聴きたいと思つたが、葉子の身邊のことを、若しかしたら二人が知つてゐるさうにも思へて何となく

親みたい気がした。

舞臺ではクライストラの愛の喜びがもう演奏されてゐた。華やかでデリケートな感じのする音樂の都ウキーン的情熱が美しい旋律につれて聴衆を悉皆酔心地に誘つた。それは都會音樂の上乗なるものだと言へた。で、演奏ふりはといへば若いだけに餘りしつかりしたものだと言へなかつたけれど、弓が絃にふれて音を出す前に、演奏者自身も其の音に酔ひきつてしまつてゐるやうな、あまい、いゝ心持のものであるだけに、一層若い人の胸をわく／＼させた。そして次ぎに演奏された愛の悲みが終つたときには、樂人も聴衆も、靈が一緒になつて感激し合つてゐたやうな境地に逍遙つてゐるのであつた。

「華やかな曲ですことね。」智恵子がいふと、大塚も讚嘆するやうに、

「うむ、これあ宜いね。うつとりとしてしまつた。ヴァキオリンも甘味があつてなかく／＼好いね。」

「都會音樂としては、これなんか全く最上のものです。」秋葉も相槌をうつて、

「併しクライストラ自身で弾くともつ／＼細い味と潤ひのあるもんですが、これちや何だか何うもね。」
「それや何うしてもね。」と智恵子もにつこりして、でも気分は十分出てゐると思ひますわ。素人のせゐですか、あんな弾き方も私好きですわ。演奏者自身が樂器の音に魂を溶かされてゐるやうな、何とも言へない好いところがあるぢやございませんかね。」

「それあさうです。あすこが木下の好いところす。」

「え、私あれ以上巧くなつてもらひたくないと思ひますわ。」

「さうですね、もつとお手に入つてくると、却てがっちりすぎて餘情がなくなるでせうから。」

葉子もうつとり酔つたやうな氣持になつてゐたが、彼女の心は何うかすると音楽から遊離して、それとはまるで別の世界に惹込まれがちであつた。今夜の暗い彼女の心持には、さうした甘い音楽などは、全く不似合のものであつた。

舞臺では間もなく上品なシユベルトの瞬間の音楽がはじまつてゐたが、葉子はそのロケーション以來、健康を害してゐるうへに、精神的にもするぶん異常な事件に遭遇して今迄に経験したことのない惱みを感じてゐたので、かうした音楽などを聴いてゐると妙に氣分が沈んで、泣き出したいやうになるのであつた。

「どこか獨りで廊下の隅へでも行つて、思ふさま泣いてみたい。」葉子はさう思つたが、皆な快よく音楽を享樂してゐるのに、獨り立つて行くのも悪いやうな氣がして、ちつと我慢してゐたが、するうち胸が壓しつけられるやうに苦しくなつて、脈搏が低く弱く沈んで行きさうに感じた、目もくら／＼して、舞臺に立つてゐる樂手の形が、少しぼんやりして來た。脇の下や額に、冷い汗が入染み出して來た。葉子はもう堪へられなくなつてしまつた。

「私少し失禮します。」葉子はこゝで倒れては大變だと思つて、そつと起上らうとした。

その時曲が弾き了へられて、急激のやうな拍手の音が起つた。葉子はそれが遠いところから來るものやうに、耳が變になつてしまつた。

「何うして？」秋葉が彼女の顔を見あげた。

「何だか變よ私……。」葉子はうるみ聲で言つて、秋葉の前を通つて、ふら／＼細い道路へ出て了つた。

(四)

よろ／＼と廊下へ出て來た時分には、葉子は全く目か眩んで氣が遠くなつてゐた。そして軟かい敷物を敷詰めた階段を轉げるやうにありやうとして、壁に突當つて倒れかゝるところを、ポイーが見つけて扶けおこして、下の廣い廊下にあつた長椅子にかけさせた。同時に後から續いて來た秋葉も寄つて來て、ぐたりと横になつてゐる彼女の脈に觸れてみたり、冷い額に手を當て見たりした。

「スチームでお逆上せになつたんでございませう。」ポイーがいつた。

「何だか顔色が悪いと思つたんだ。——葉子さん、しつかりなさいよ。」秋葉は耳元でいつた。

大塚も智恵子も出て來て、周囲を取圍んだ。

「腦貧血だね。大丈夫だ。」大塚がいふと、智恵子も石膏色に蒼白めた彼女の額にさはりながら、

「大丈夫でせうか。こゝにはお醫者さまはゐないんでせうか。」

「風に當れば癒る。」大塚は言つてゐた。

と、秋葉はいつの間にか素捷こく駈出して行つて、ウキスキイを盞に一杯持つて来て、葉子の口へ注込んだ。葉子は朦朧とした意識が最と微かに残つてゐるらしく、いくらか口を動かしてそれを呑込んだ。七八分したところで、葉子は細い目を開いて、皆なの顔を見ると、いきなり起上らうとした。「もつとそつとしていらつしやい。直きに快くなつてよ。」智恵子が言ふと、葉子は微かに頷いた。「私も何時かこんな事がありましたわ。小學校時代に式で長く立たされた時に。」
 「私もやりましたよ。あの撮影所で白熱燈を浴びてゐるとき……。」秋葉もいつた。
 葉子は袂で額なぞ拭きながらもう長椅子に起きあがつてゐたが、顔の色が少し出て来た。
 「もうよくて？」

「え。どうも濟みません。」葉子は恥かしさうに微笑したが、筋肉がまだ硬張つてゐるやうに見えた。「もう少しさうやつていらつしやい。そして御氣分が快くなつたら外へ出ませう。外氣に觸れた方がいいんですから。」

すると、その時じつと腕組して考へてゐた秋葉が、

「皆さん音楽をお聴きになつちや何うです。ユモレスクが一つ残つてゐますが……。」

「もう澤山！」智恵子が答へて、

「餘り音楽に夢中になつちまつたもんだから……。」

「そろ／＼出ようよ。」大分たつて大塚が言ふと、葉子も長椅子を離れて、

「悉皆快くなりました。」と言つて歩き出した。

「葉子さんまさかシウベルトで卒倒したんぢやないわね。」智恵子も歩きながら笑つた。

「ベートベンの第九シムフォニイか何かでしたらね。實際あの音楽には壓倒されますね。」

四人は揃つて外へ出た。

「皆さんお歸り下さい。そこいらでタキシイを見つけて、私が葉子さんを送り届けますから。」秋葉が二人に言つた。

「さう！ それでも可いけれど、若し何でしたら私達でお送りしてもいゝんですよ。」

「大丈夫です。私が送ります。でないと私が社長に小言を食ひますから。」

「さうですか。」智恵子は言つたが、この場合さうして可いか何うかと惑つた。で、大塚の傍へ行つて、
 「ねえ、何うませう。」と低聲で聞いた。

「さうね。けど可いぢやないか。」大塚は樂天的に答へた。

「けど秋葉さん變よ。何か言やしないでせうか。葉子さんはそれで憚んでゐるんですもの。二人きりにしておいても可いこと？」

「場合が場合だから、秋葉だつてまさか今夜は何にも言はないだらう。」

「さうね。私達で送れば秋葉さんが又變に氣を廻すんでせうしね。何だかあの人も可哀さうよ。でも、葉子さんも可哀さうよ。」

三〇四

その間に秋葉は葉子に何か話しかけてゐた。

「いゝのよ、もう大丈夫ですわ。私一人で歸れます。」葉子は言つてゐた。

四人はいつか有樂町の曲角のところまで来てゐた。

(五)

結局四人は二組に分れた。大塚と智恵子は有樂町から省線で歸り、秋葉はタキシイで葉子を送ることになつた。

別れぎはに智恵子は殊に葉子の傍へ寄つて、

「今夜あたり秋葉さんにお話しなすつたら何うでせう。あの方もきつと許して下さるに違ひないと思ひますわ。そして其のうへで本當に貴女の態度をお決めになつたら……睨りしていらつしやいね。」

葉子は口へ出しては何にも言へなかつたけれど、熱い涙がこぼれた。

「ちや左様なら。秋葉さん宜しく。」智恵子はさういつて大塚と一緒に暗いガード下の方へ行つた。

秋葉は自動車をさう言つてゐたが、支度ができたところで、葉子を扶けるやうに乗せてから、自分も乗つた。

「もう少し歩けば可かつたですね。」秋葉はこのまゝ歸るのを飽氣ながつて、「気分は何う。」

「もう悉皆宜しいんです。」

言つてゐるうちに自動車が進出した。

「大塚さん何だか不得要領のやうな人ですね。」秋葉は大分たつてから、話の緒を見つけようとして話しかけた。

「いつでもあの人あゝなんです。」

「あれから安住さんの事を聞かない？」

「え、ちつとも……。」

「しかし葉子さんも少し酷いと思つたよ。」

葉子はびつくりとした。

「何うして？」

「僕は安住さんを唯のベトロンとばかり思つてゐたですもの。多少意味があるにしても、そんなに熱烈な愛をもつてゐるんだとは思はなかつた。」

「熱烈な愛なんて、そんな事ないんですわ。誰かそんな事言つてゐて？」

「漣子さんに聞いたんだけど。」

寂しき愛

三〇五

葉子は黙つてゐた。

BOOK

「今度のロケーションから、社長がひどく僕に愛想が好くなつたんで、何だか薄気味がわるくて仕方がないんだけど……。」秋葉は暫くしてから突然言出して、「それに今月から月給もあげてくれるやうに言つてゐるんだ。不断減多に芳子のことなんか訊いてくれたことがないのに、莫迦に親切に見舞なんか言つて……。」

芳子は秋葉の病妻の名であつた。葉子はひし／＼思ひ當るので何と云つて答へていゝか判らなかつた。「あんなに社長が僕に親切にしてくれるのは、初めてだ。僕はその意味が二様に解釋されると思ふが、好い意味に取れば、社長が僕達のことを知つて好意をもつてくれるんだとも言へるんだが、それだと芳子を見舞なんか言つてくれるのは少し可笑しいやうなんだ。で、悪い意味に取れば、かう云ふ疑ひが起るんだ——。」秋葉はさう言つて、暫く躊躇しながら、

「しかし、まさかね……。僕は葉子さんを信じてゐた方がやつぱり可いと思ふ。それが駄目だとすると、僕は全く絶望だからね。」

葉子は秋葉が略感づいてゐるのに氣着いたが、何と言つていゝか胸が一杯になつて來るだけであつた。「しかし今夜はこの話は止さうね」

「いゝえ、ちつとも介意ひませんわ。」葉子は突然言つた。この上苦痛を忍んで、包み隠してゐるより

も、自分の痕をすつかり浚け出して、思ふ存分突ついてもらつた方がいゝやうな氣がした。

「しかし今何んな風にして暮してゐるの。」

「何んな風つて、やつぱり父と一緒にですの。」

「漣子さん行つたことある？」

「いゝえ、漣子さんは私の父が大嫌ひなんですつて。私少し音楽でも稽古しようかと思つてゐるんですけど、あんなのを聞くと、失望してしまひますわ。それに手が硬くなつてゐますから、ヴァイオリンなんですけれど。」

「けど、それあ可いちやないか。僕誰か先生を紹介してもいゝ。」

「え、事によつたら。」

「今日は何うして氣分が悪かつたやら。尤もあのロケーション以來、體がよくないやうだけれど……。」
僕何だかこの頃の葉子さんの態度が不安でならないんだ。」

(六)

葉子は其の言葉の下から、「私もう駄目なんですの。」と呻吟くやうに言つて、
「私貴方とお附合ひする資格がなくなつてしまひましたの。」と遽に聲を曇らせた。

秋葉は自分の耳を疑ふやうに、何か言はうとしたが、しかしそれで十分であつた。彼れは葉子の顔を

見るに忍びないやうに目を外へそらしてゐた。葉子の微かな聲が、雷のやうに耳に落ちたのであつた。

「駄目つて、それは外に愛人が出来たといふ意味なんですか。」

「いゝえ、私はその人を愛してゐないんです。」

「それぢや貞操を潰されたゞけだと言ふのですか。」

「え。でも駄目なんですの。」

「やつぱりさうだつたんですね。」

秋葉は漸と葉子の方へ顔を向けて、「相手は社長でせう。」

葉子は想像に委すといふ風で、頸垂れてゐた。

「それでその關係は今でもつゞいてゐるんですか。」

「え。」

「これからもつゞくんですか。」

「わかりません。」

「わからない？」

「それは偶然とすると、あのロケーション前からのことぢやない？」

「いゝえ。」

「もつとくはしく話してくれませんか。僕は決して貴女を怒りやしない。相手が社長だとすれば、社長が可けないんです。貴女は誘惑されたに違ひないんだ。」

「私が悪いんです。私が弱すぎたんです。あの時私があの温泉場へ行つたのが可けなかつたんです。」

「けれど、その時に其の機会がないから安心と云ふ譯には行かない。社長が貴女を愛してゐるとすれば、機会を造ることぐらゐ何でもない。それに社長は明らかに僕のあることを知つてゐたんだ。だから僕に百方阿諛を使つてゐるんだ。僕も變だと思つたんだ。けどまさか事後承諾の意味だとは思はなかつた。しかしさうでせう。それは有り得ることだ。貴女は僕のことについて、何にも言はなかつた？」

「それは言ひましたの。社長さんも貴方に濟まないことは、十分知つてゐらつしやるんでせうけれど、お話を伺つて見ますと、あの方もそれは随分寂しい方なんですの、私意外に思ひました。それは眞實のあの方の心の叫びなのです。私お氣の毒だと思ひました。」

「それで……。」秋葉は遺切れなさうに、「それで貴女は社長を愛する氣になつたんですね。」

「でも、私はするぶん腹立しうございますわ。同情とか理解とかいふやうなことが、あの方には直ぐさう云ふ劣情的なものに解釋されてしまつてゐるんですもの。」

「貴女はそれを拒みはしなかつた？」

「拒みました。けど、あの人は死をもつて争ひました。それこそ本當に恐ろしうございました。」

秋葉は息が塞るやうに感じた。彼は口が利けなかつた。

「それにその晩はひどい暴風雨でした。それなぞも随分あの人の心持ちを荒びさしたと思ひます。」

「もう澤山です。僕はそんな事は聞きたくない。」秋葉はさすがに耳を蔽うた。

葉子も怯えたやうに遽に口を噤んだ。

自動車の上野の廣小路へ出てゐるのに氣づいた。葉子は秋葉がひどく怒つてゐるやうな氣がしたので、もう此の邊で降りてもらひたいやうに思つた。すると秋葉は顫へるやうな手つきで、煙草にマッチを摺りつけてゐたが、強ひて落着を見せて、

「僕はもう何にも言ひません。貴女は社長に愛がなかつたと言つてゐるけれど、それは貴女がはつきり意識しなかつたといふだけで、愛に似たものがあつたに違ひないんだ。」

「さう思はれても仕方がないと思つてをります。辯解する資格のある私ちやございませぬから。」葉子は萎れて言つた。

(七)

公園のなかへ入つた時、秋葉は自動車を乗棄て、歩きながら話さうといふので、葉子もそれに同意した。今夜あたり荒井が來てゐるやうな氣がしたので、家まで乗つけければ、いづれ秋葉をあげない譯には行かないので、葉子は先刻からそれが氣にかゝつてゐた。で、二人は廣い往來の傍へ寄つて自動車を降り

ると、博物館前の方へと歩きだした。

「暖かい晩ですね。何だか雨が降つて來さうだ。」秋葉は空を見ながら呟いてゐたが、少し脇道へそれて木立のある所に入つて行くと、ふと立止つて、

「今にして思ひ合せると、東京へ來てから、何うも貴女の演出振に暗い影ができたやうで、山で演つたときのやうに感興が乘らなかつた。貴女も自分でそれが解つた筈です。」と、じつと葉子を見てゐた。

「それに場面が轉倒してゐますから、尙更……。」

「それはしかし、あの映畫に限つたことぢやない。何うせ断れんものですから、それを言ふんぢやないんですが、貴女があれ以來、すっかり緊張味を缺いたといふことは事實です。今迄の演出振には實に美しいほどの矜と自信があつたんですからね。若し貴女が最初の意氣込みどほり、スクリーンのうへに永久の生命を持たうといふなら、荒井さんに屈從してゐるといふことは、何うかと思ふな。まさか貴女は社長に愛されるがために、藝術家としての生命が長續きするとか、目黒スタジオで幅が利くとか、そんな下らない事を考へてゐるんぢやないでせう。それは女優としては寧ろ第二義的のことで、自分の藝術に自信のもてない漣子さんたちの考へることで、しかも其で貴女の藝術境が向上するか、永く地位が保てるとかいふのなら、それも止むを得ないでせう。けど漣子を見ても解るとほり、藝術は寧ろそのために荒めばと言つて、好くなる氣遣はないんだ。」秋葉は諄々と説いた。

葉子は黙つて聞いてゐたが、いきなり面をあげて、

三二

「私そんなにまで貴方に誤解されなければならぬかと思ふと、もう何にも申しあげられなくなつてしまひます。私にそんな卑しい打算があつたとすれば……私自分ではそんな積りぢやないんですけれど、無意識にでもそんな氣持が動いてゐたんだとすれば、私くらの憐れむべき女はないと思ひます。」

「いや、僕のいつたことは、少し酷かも知れない。それは誰でも陥り易い罪です。僕はそれを責めようといふんぢやない。しかし、貴女は後悔してゐますか。」

「その隣間に、私は自分が厭になつてしまひました。」

「社長を愛してはゐないんですね。」

「でもあの方が、人の貞操を弄んでゐるんぢやないと云ふことも解るやうな氣がします。」

「貴女はその愛の犠牲になつてもいいと思ふんですか。」

「若しあの人の心を傷つけないで済むことでしたら、たゞ氣持のうへだけで、あの方の愛を受容れてあげたいんですけれど……それも駄目だらうと思ひます。」葉子は悲げに聲を落とした。

「貴女さへしつかりしてゐれば、駄目なことはない筈です。ほんとに社長がそれを諒解してくれたとしたら……。」秋葉は熱心にいつたが、遽に氣が沮んだやうに、

「それにしても、貴女の氣持の上に、僕の愛はあの時の様に生きては來やうとは思へない。貴女は社長

を愛してゐるんだ。愛してゐればこそ、今迄僕に隠してゐたんだ。葉子さん、何うか正直にいつて下さい。たとひそれが受動的のものであるにしても、愛してゐるなら愛してゐると、なまじつか僕の存在を無視することが出来ないために、貴女が苦しんでゐるのなら、僕は貴女のために諦めてしまひます。僕のことは何うか心配しないで下さい。僕の愛は永久です。このためにあのスタヂオを去るやうな事があつても、貴女のことには忘れません。蔭で貴分の幸福を祈ります。」秋葉は涙聲でいつて、葉子の手を執つた。

袂へくしてゐた葉子は、いきなりその手につかまつて、吸り泣いた。

(八)

葉子はその涙で、いくらか心の矛盾が釋れたといふよりも、今迄秋葉に對して羞恥に似た意地のやうなものが、抱き合ひたいやうな愛の心を固く封じてゐた、その苦しさ、一時に融け合つたやうに感じ、秋葉が彼女の肩へ手をまはして、強く胸へ抱き寄せようとする、葉子はそのまゝ胸に顔を押し當て、暫く離れかねてゐた。

大分たつてから、秋葉は軽く葉子を突放すやうにして、

「さあ、もう遅いから家まで送つてあげよう。」

「宜しいんです。事によると荒井さんが來てゐるかも知れませんが。」

寂しき愛

三三

「さうか。それぢや其の邊まで送りませう。僕はどうせ長くあの會社にゐない積りです。をめぐり居られもしません。機會があつたら社長に言ふだけのことは言つて、退社しようと思ふ。葉子さんの心持は僕にも略わかつてゐる。それは金の問題もあるし、僕と運命を共にして下さいとは言はない。そんな事をしてまで、葉子さんを苦しめようとは思はないし、社長を辱しめるやうなこともしたくはない。もう葉子さんと、カメラの前に立つやうなことも永久にないでせう。それを思ふと、僕は堪らなく寂しい、外のスタヂオへ入る勇氣もないんです。でも其が與へられた運命なら仕方がない。僕は忍びます。社長を咀ひながら、ちつと我慢します。花やかな人氣が、いつも貴女のうへにあることを祈りつゝ、僕は僕でどこかのスタヂオで寂しく生きて行きます。ね、葉子さんお互ひの運命と諦めませう。社長は恐らくいつも貴女を愛してくれるでせう。僕は今貴女が漣子と同じ道を歩くだらうとまで言つたけれど、それは感情です。葉子さんには漣子などには泣いても追着けない良い質があります。僕はそれを信じてゐます。たゞ荒井さんの愛が永久に純真なものであることを祈るだけでも。僕の社長に言はうとするのもそれです。貴女は心配することはありません。僕を信じてゐて下さい。ね、泣かないで……泣いたつて仕方がないでせう。」秋葉は怨むやうに慰めるやうに言つたが、言へば言ふだけ愚痴になるやうに感じて、思ひきつて其處を離れようとして、

「さあ行きませう。」と有めるやうに言ふのであつた。

葉子は何うしていか判らなかつた。秋葉がスタヂオを去ることも悲かつたし、秋葉と再びカメラの前に立つ機會のないことも、限りなく寂しかつたが、それよりも秋葉にそんな苦痛を與へてゐながら、却て優しく慰められてゐる自分が、言ふばかりなく寂しかつた。寧ろ汚れた自分を鞭つか蹂躪りでもしてくれたら、少しはこの胸が安まるだらうと思つた。口先でなぞ許しを乞うたところで仕方のないことのやうに思へた。

「ほんたうにスタヂオをお止めになるお積りですか。」葉子は博物館わきの寂しい道へ出て來たとき追すがるやうにして訊いた。

「何うしてです。」

「貴方がお止めになるなら私も止めます。」

「僕と運命を共にすることはしないでせう。」

「そんなにまで、荒井さんのお世話にならうとは思ひません。」

「本當ですか。貴女にその勇氣がありますか。」

「私眞實は厭なんです。漣子さんに叛くだけでも、私は苦痛なんです。」

「けど今更……。」

「駄目？」

「駄目なことはないが……。」

「私を許して下さらない？」

「許すも許さないもない。其が眞實だとすれば……しかし何しろ相手が社長です。勿論金などのことは、僕と二人で、外のスタヂオへ賣込む日になれば、辨償するのは譯はない。けどそんな金に目をくれる社長でもないだらう。貴女の決心一つだ。その決心ができますか。」

「私駄目でせうか。」

「だから貴女の心持ち一つだ。僕は同情されてまで、運命を共にしてもらひたくはない。」
その時自動車が一臺、爛々たる光りを四邊に漲らせながら、後ろから追迫つて来た。

仔羊の如く

(一)

霜夜の月光のやうに、地に敷くヘッドライトの光に追ひ散らされた二人は、いつか右と左に別れて、道の傍らに避けてゐた。葉子にはつきり意識してゐた譯ではなかつたが、ちよいと振向かうとした途端、ヘッドソン型の自動車に何うやら見覚えがあるやうな氣がして、狼狽てそれを避けようとして、並んで歩いてゐた秋葉と、思はず別々の側へ寄つてしまつた。

自動車の主は果して荒井であつた。彼は眠つてゐるやうに見えたが、高い警笛の響きに目をさましたらしく、前方を照す光のなかに、早くも葉子の姿を見つけて、

「ストップ、ストップ。」とあわただしく運轉士に聲かけた。

自動車は五六間先で、漸と止ることが出来た。そして葉子が何うしようかと惑つてゐるうちに、彼はひらりと自動車をおりて、側へ寄つて来た。

「何うしたんだ、今時分。」荒井は聲をかけた。

「秋葉さんに送つて頂いて、今歸るところなんです。」葉子は悪怯れず答へた。

「秋葉君に。さうか、それあ可かつた。」荒井はさう言つて、後ろを振向かうとすると、そこへ秋葉が

近よつて来た。

三一八

「あゝ、社長さんでしたか。」秋葉は帽子を取つて、極悪さうにお辭儀をした。

「君葉子を送つてくれたんだつて。それあ何うも、ちやうど幸ひだから、差閤なかつたら、一緒に行かう。」

「さうですか。しかしもう何時でせう。」秋葉は運轉士が側へ寄せて来た自動車のヘッドライトに、ちよつと腕時計を透してみながら、

「もう十時半ですな。」

「餘まり早くはないが、歸りは此の自動車で送らせるから。」

「さうですね。」秋葉はさすがに躊躇した。荒井に逢つたら思ふ存分言つてやらうと、先刻からそれを考へてゐたのであつたが、こんな風に途中で不意に行逢はうとは想像もしなかつた。

「社長はかうやつて毎晩葉子のところへ通つてゐるのだ。」秋葉はさう思ふと、胸がもやく／＼して仕方がなかつた。荒井に誘はれなくとも、此方から従いて行つて、一と談判しなくては氣の濟まないところであつたが、荒井の態度が態度なので、彼れは聊か逡巡いだ形ちであつた。彼れは何となし底氣味悪く感じたが、しかし行かない譯に行かなかつた。

「ちや、ちよつと、お邪魔でないやうでしたら。」秋葉は答へた。

「さあ乗りたまへ。」さう言つて荒井は自動車の上がり口のところで、ちよつと傍へ寄つたが、秋葉が

躊躇してゐるので、彼はそのまますがつて行つた。

葉子は秋葉を乗らせてから、乗込んだが、秋葉はわざと補助椅子を引出して、それに腰かけた。

「いやね、自動車が擦違ふところで、僕がはつと氣がついてみると、どうも傍へ避けたのが葉子なんだ。君と一緒にだとは氣がつかかなかつた。」

「さうですか。僕も意外でした。」

「何處へ行つて来たんだ。」荒井は消えた葉巻にマッチを擦つつけながら、微笑を目元に含ませながら訊いた。

葉子は寂しい顔をして黙つてゐた。

「今時分どこを浮氣して歩いてゐたんだえ。」荒井は子供を擲擻ふやうに重ねて訊いた。

「今日大塚さんと智恵子さんが訪ねて来て下さつたんですの。」

「ほう、大塚と智恵子と？ 妙な對だね。まさか大塚のやうな聖人が、智恵子を戀人にもつてゐる譯でもあるまいね。」

「それあ何うしたか知りませんが……。」

「何うしたか知らない。するとさういふ形跡があるのか。——それから……。」

「それから一緒に丸の内を散歩しましたの。そしてホテルで御飯をいたゞいて、歸らうとしてゐるとこ

ろで、ふと秋葉さんに逢つてしまつたんです。」
「成程ね。それで送つて来てもらつたといふ譯か。」

(11)

段々の下で自動車をおりて、門を潜ると、三人は立木の多い門内の石畳を渡つて、老人の介抱人であるお婆さんに迎へられて、荒井は赤の短靴をぬいで上がつて行つた。葉子は荒井に吩咐かつて、秋葉をすつと奥の十畳の座敷に案内した。がらんとした人氣の少ない家であつた。

秋葉はこゝに誘はれて来ただけで、既にいくらか氣遅れがして、荒井の狡猾さには迎も敵はないやうな感じであつたが、葉子を横取されたことは何としても心外であつた。

葉子が火でももつて来るつもりで、起かけるところを、秋葉は遽に呼びとめた。

「僕少し言ひますよ。貴女も覺悟してゐて下さい。貴女にぐらつかれると僕は形なします。」

葉子は先刻からおど／＼してゐたが、秋葉に決めつけられると、一層事情が切迫したやうに感じて、この際どんな態度を取つていいか惑つた。

「でも今夜言出して、喧嘩になるやうな事ないでせうか。」

「荒井さんが諒解してくれなければですがね。僕もあゝ云ふところを見つかつて、今更引込がつかないぢやありませんか。僕は衝突つて見るつもりです。荒井さんも男ですから、何とかきつぱりした解決を

つけてくれるでせう。貴女もその場になつたら、正直なところを言つて下さい。貴女の心持がはつきりしないと、僕に五分も六分も弱味があるんです。先刻言つたことは、まさか嘘ぢやないでせうね。」秋葉は念を押した。

「え、私も一緒に會社を出るつもりでゐます。」葉子は答へた。

「それが眞實の貴女の心持ですね。」

「え。」

「貴女が強くなつてくれなければ……それも貴女自身が眞實に強くなつてくれたんでなければ。」

「私貴方がしつかりして下されば……。」

「よろしい。」

そんな話をしてゐるところへ、廊下に登音がして、荒井が縁の障子を開けて入つて來た。彼は洋服のまゝであつた。

「何うも失敬した。さあ膝を崩して。君だけに話すんだが、僕もこれで家がまた一つ殖えた譯で、かう生活が分裂しちや遣切れないが、事情は葉子からも聞いてくれたでせう。」荒井は氣輕に言つて、もちもちしてゐる葉子を振り返りながら、

「もう話してしまつたか、秋葉君に……。」

「え。」葉子は困惑してゐた。

荒井は相好を崩して、

「何をそんなに極りわるがるんだ。秋葉君に遠慮はいらない。みんな内輪のものだ。」

「ちよつと伺ひたいんですが、ちや社長さんは御存じないんですか。」秋葉は眞赤になつて詰つた。

「何をね。」荒井もちよつと目の色をかへた。

「何をなんて、そんな風に言はれると、何うお答へしていゝか困るんですが。社長さんも我々のことは御存じの筈です。」

荒井は暗い目をした。

「うむ、ちよつとそんな事は聞いた。」荒井はさう言つて葉子に、

「寒い。早く火を。それから何かあつたらう、洋酒が。お婆さんにさういつて……。」

そして更に秋葉に向かつて、

「さあ崩したまへ。」

「有難う。僕はこの方が勝手です。」秋葉は半分怒つたやうに言つた。

「いや、葉子と君の間にラザがあるといふことは、葉子にきく迄もなく、多少感づいてをらんでもなかつた。しかし結局葉子は僕の手に移つたんだ。君にも快く……と云ふ譯にも行かんか知らんが、諒解し

てもらひたい。色々事情もあるが、まあさう云ふ譯なんだ。僕がいかに葉子を受してゐるかは、事實が雄辯にそれを語つてゐる。」

「それちや社長は、僕の存在は無視して介意はないと仰やるんですか。」

「無視してゐやしない。」

「けど僕と葉子のあひだに、愛のあることを御存じでゐながら、平氣でそんな事をなさるところを見ると、僕は貴方の徳義心を疑ひたくありません。」

(三)

そこへお婆さんがウキスキーやチーズのやうなものを、小さい食卓に載せて持つて來たので、荒井はいきなり盞を秋葉の前において、「寒いから一杯やりたまへ。」と言つて酒を注いだ。

秋葉は、ちよつとお辭儀をしたまゝ少し鮭子張つてゐた。荒井は盞に口をつけながら、

「さう問題が難しくなつちや困るが、戀は盲目だといふ諺のあるとほりで、理窟も何もありやしないんだ。君のやうに更まつて詰問されても、説明のしやうもないやうなことで、恐縮するより外ないよ。」

「私も別に詰問しようと思つて伺つた譯ぢやないんです。たゞ、かう言つちや失禮ですが、社長さんともあらうものが、使つてゐる女優に私といふものゝあることを知つてゐながら……それも双方合意的のものなら、私が指を御へて引退るだけのことで、多少強制的なところがあつたとすれば、私は葉子

のために黙つて見てはゐられないんです。「秋葉は昂奮の色を帯びて、わざと酒をぐつと半分ほど飲んで、
「實は今夜葉子さんから、悉皆聞きました。葉子さんが嘔吐きでないかぎりには、信じてても可いだらうと思ひます。」

「僕が強制したつて？」

「強制と言つては語弊があるかも知れませんが、とにかく誘惑されたものと看做していゝんぢやないでせうか。」

「さう、まあさういへばさうかな。それあ、まあ君の判断にまかしてもいゝ。で、結局いけなないといふのか。」

「え、まあ……。さう露骨に扱はれちやこまりますが……。」

「しかし君の方だつて、餘りデリケートでもないぢやないか、僕にさう云ふ事を詰問するなんか。」荒井は酔が出て来たところで、遽に膝を崩して笑ひながら、「僕は君からさう云ふ質問を受けやうとは豫想しなかつた。戀愛の自由でことは、君だつて知つてゐるだらう。それほど大切な君の愛人なら、人の手のとどかない處へ仕舞つておいたら可かつたぢやないか。」

「下らないことを言つちや困ります。」秋葉は腹立たしげに冷笑しながら、「貴方は私を愚弄してゐるんです。貴方の態度は逆も眞面目だと思へませんからね。」

「ぢや一體何うすれば君の氣に入るんだい。」荒井はやゝ傳法な口の利き方をした。

「この問題をもつと眞面目に考へていたゞきたいんです。」

「と言ふと……。」

「つまり葉子の心持です。貴方と同棲することが、本人の意志であつたか何うかといふことを、もつと冷静に考へて戴きたいんです。貴方が少しでも葉子の自由意志を束縛なさらなかつたか何うかといふことが問題なんです。」

荒井はいくらか恍けたやうに首を傾けてゐた。

「それは少し可笑しいね。葉子が若し僕と同棲するのを嫌つてゐるなら、何時でも解放して介意はない。しかし葉子の心配してゐるのは、君といふものがあるからなので、殊にさういふ風に文句をつけられるとなれば、尙更困るだらう。女は弱いんだからね。折角かうやつて僕と同棲生活を初めて悦んでゐるところへ、君などに彼此言はれると、そこは年の若いのだから、何うしていゝか判らなくなつてしまふ。現に僕の場合だつて、あの女自身に分明した判断はつかなかつたかも知れない。ついてゐても君を憚つて躊躇してゐたかも知れない。しかし其處には金の問題もあつたし、君には不幸な細君があるといふ事實も考へたらう。君を裏切るといふ譯ぢやないが、愛があつたといふだけで、まだ其處まで深く入り込んでゐる譯でもないんだから……。」

「いや、さう仰しやるけれども、葉子さんが僕を許してゐたことは、病院を訪問した時の態度でもわかるんです。」

「けど葉子はその事はいつちやない。」

「それは今のお言葉のとほり、葉子が弱いからです。葉子に責任を課するのは可哀さうです。」

(四)

荒井は顔を擧めながら、

「しかしお互にかういふことに権利を主張するのは感じが悪いぢやないか。己のものだ君のものだと争つてみたところで、話しが露骨になるばかりだ、本人の葉子は益々立場が苦しくなる。葉子が現状に不満を感じる、私も強ひて引止めようとは思はない。潔く解放しよう。と言つて葉子の氣持を、今二人の前で言つてみると言つたところが、君の言ふとほりそれは徒らに葉子を困らせるばかりで、私も忍びない。だから葉子の自由を尊重する意味で、熟考の時日と餘裕を與へてやるより外ないだらう。それにもう一つは誰かに間へ入つてもらふことも良い方法だらうと思ふが何うかね。」

「結構です。形式さへ決めていただければ。」秋葉は拔目なく言つた。

「形式とは。」

「さうするには本人を飽迄自由な位置において戴きたいんです。」

「私が近づいちゃ可かんと言ふのか。」

「勿論です。解決のつくまで第三者に預けておいて戴きたいんです。」

「成程ね。それも可いだらう。その人によつては、同意してもいい。しかし一步を譲つて葉子の氣持が假に未知のものとしても、私との同棲は同意のうへでやつたことなんで、強制した譯ぢやない。さう言ふと話がまた露骨になつて不愉快だがそれだけの権利は私にあるといつても差問へはないのだ。間へ人をいれるといふのは、私が餘程寛容な態度に出た譯で、それだけは君も承知してもらはんと困る。」

「それぢや第三者を入れる意味が徹底しないぢやないですか。」

「けど、今もいつたとほり、私が優越権をもつてゐるといふことは、君も認めるだらう。だから、私としては、今更第三者も何にもあつたものぢやない。物質的にも精神的にも、葉子は自分のものだ主張しても、誰からも苦情を言はれる理由は毛頭ない筈なんだ。葉子が君を愛してゐるか否かは、全然別問題だ。葉子が今夜のやうに、暗いところを愛人と一緒に手を引いてゐるところで、それは葉子の自由だ。そこまでは黙認してもいい。事によれば葉子の希望とあれば、君に差上げて可い。しかも其も第三者によつて分明決めらるべきことで、君と私とで決めることではないだらう。」荒井は主張した。彼は大分酔つてゐた。

「それぢや何にもならんぢやないですか。僕には貴方の意味が徹底しないんです。勿論貴方が藝者か何

かを圍つておくやうな積りで、あの女には金がかゝつてゐるから、己のものだと仰やるなら其まで、すが……。」秋葉も興奮して侮辱的に言返した。

「勿論己はあの女を藝者並に扱つてはゐない。しかし己のものだと言ふことに對して、誰が苦情を言へるのだ。」

「言へると思ひます。現に私が苦情を申立てゝゐるんですからね。」

「いや、もうよさう。君の様な自信家に會ては敵はない。君は又猛烈な正義の主張者でもあるんだ。」

「僕が猛烈ですか。」

「今夜あたり俺に捻込んでくるなんかは、随分猛烈ぢやないか。」

「そんなに不愉快に感じてゐらつしやるなら、僕は引退ります。」秋葉は悲痛な口吻で、「僕は社長さんの方が、餘程横暴だと思つてゐるんです。一體貴方は誰を第三者に擇ばうとなさるんですか。」

「大塚なら君も異存はあるまい。」

「大塚さんですか。大塚さんが果して絶対に自由な立場になられるですかね。」

「あの男なら高級な審判を與へてくれるに違ひない。見渡したところ、外にこの話を持ち込む人はいぢやないか。スタヂオの連中ぢや私に遠慮するに決つてゐる。」

(五)

二人とも言へば言ふほど、言葉の空虚を感じた。荒井が回避的に、のらりくらりと尻理窟を並べてゐるのも無意味なら、秋葉が言葉のうへで勝敗を決しようとしてもしてゐるのが、莫迦々々しく思へた。席がだれて來たと同時に沈んで來た。

荒井は二人で暗闇を歩きながら、葉子が何を私語してゐたかを探りたく思つたが、やつぱり共に觸れたくなかつた。秋葉はそれを話したく思つたが、さうすれば荒井にも嫉妬と意地があるだらうから、事を破りはしないかといふ虞があつた。二人は酔ひが體中に沁通つたところで、暫く黙つて向き合つてゐた。

秋葉はこの席へ葉子を引出すのは慘酷だと思つたが、しかし何だか幻滅を感じてゐることに氣がついた。興奮して何か言つてゐるうちは、未だ可かつたが、やゝ言説に疲れた形で、じつと思ひを潜めて見ると、葉子の今夜の態度が遽かに飽き足りなく思へて來た。あの森のなかで、容易く體を男の胸に投げかけて來たことなどを考へると、彼は却つて堪らない寂しさを感じるのであつた。

「僕も、此の話は止めます。」秋葉は遽かに投出したやうに言ひ出した。「こんな事を争つてゐるのは、詰らないことです。誰かまた第三者となつて、この問題を解決することが出來ませう。葉子が僕に愛のあることは解つてゐますが、しかし葉子の愛してゐるのは僕ばかりぢやなかつたといふことが、眞實にわかつて來ました。さう云ふ愛なら僕は強ひて欲しいとは思ひません。」

「成程ね。君のやうな單純な頭腦の人には、さう思へるだらう。さう云ふ君にしたところで、二人を同

時に愛しようとしてゐるぢやないか。」

「さうです。僕の場合は違ひますが、さう云ふことも言へます。」

「だから葉子が君を愛してゐることも事實だらうが、違つた意味で私を愛してゐることも事實だ。そんな事は世間にくらもある。今夜なぞ葉子が君に何を言つたか、それを聞く必要はない。多分君に責められて、何か言つたに相違ない。それで君が捻込んで来たものだらう。葉子の様子も何だか變なんだ。事によると私と別れて、君の處へ行くつもりかも知れない。」

「確かにさうです。」秋葉は蒼白めた顔をしてゐた。

「けど、さう云つたところで、葉子を君に渡して涼しい顔をしてゐられるやうな荒井でないことは、君だつて知つてゐるだらう。己も少し敵役か知らないが、何うも仕方がない。葉子だつて私の氣持は知つてゐてくれるだらうとは思ふが、知らなくても今となつては仕方がない。」

「さうです、貴方にさう出てこれれば、僕はいふところがないんです。」

「いや……それは、もつと後になつて、私自身に空虚を感じる時がくれば、あの女を解放するかも知れない。その時が今夜くるか明日来るか、私を感じなくても、もう來てゐるのかも知れない。その時は君の自由だ。」

「僕はそんなものを求めてゐません。」

「けど葉子の愛が君一人に向いたとすれば……。」

「けど僕の方で醒めてしまへば……。」秋葉は寂しい微笑を浮べた。

「其もさうだ。」荒井も微笑した。

「それぢや此處へ葉子を呼んでもいいだらう。」

「それは止してもらひます。興味だけの問題で苦しめるのは酷です、それに理性がないんですから、その場その場の感情で、何をいひ出すか、僕には恐いやうな氣がします。葉子はやはり普通の女優なんです。少くとも貴方が平凡化してしまつたんです。僕にはそれが腹立たしいんです。スクリーンの上にも恐らくあの純な氣持ちは二度と見られないでせう。」秋葉は悲むやうに咀ふやうに言つた。

荒井も佛然として色をかへた。

「今迄の葉子の藝が、それ程にも讚美すべきものなのかね。」

「どうせ社長さんとは意見が合ひませんからね。まあ長い目で見てゐませう。」

「何、生意氣を言ふか。好い加減に遇つてをれば、附けあがつて……荒井は君なんかを相手にはしちやをらんのだ。」

秋葉は、吃驚したやうに荒井を見た。同時に葉子の泣聲が何處からか洩れて來た。

(六)

荒井の權幕が餘り荒いので、秋葉は葉子の嗚咽く聲を聞き棄て、こそ〜と其處を出てしまった。何となく後髪を引れる思ひであつたが、獸性的な荒井の疥癩玉が破裂したのに怯えて、狼狽て外へ飛び出した。

荒井は後で腹の底を擦られるやうな可笑味を感じたが、餘憤がくす〜胸に熾つてゐた。廣い家の中がしんとしてゐた。彼方へ行つたとみえて、葉子の泣聲ももうしなかつた。荒井はそれも何ぞか癩にさはつた。可哀さうだとは思ひながら、いつて見る氣もしなかつた。

暫くすると彼れは自棄に手をたたいた。「はい、はい。」と言つて、老婆が出て来て、襖を開けてそこへ手を突いた。

「何ぞ御用で。」

荒井は「お前ぢやない。」といふ顔をしてゐたが、ひどく氣持が硬張つてゐたので、口も利けなかつた。

「唯今葉子さんを寄越しますでござりますが……。」老婆はおど〜しながら立去らうとした。

「己の自動車は歸したかね。」

「は、先程。」

「ぢや一臺呼んでもらはう。」

「は、生憎この邊には自動車屋がございませんでね。少々お手間が取れてもお宜しければ、私がつて

まゐりませうが、何でしたら、もうお時間も遅うございますから、あちらで少しお話しなすつてお泊りになりましては。」老婆は機嫌を取つた。

荒井は押問答するのも面倒だといふ風で、黙つてゐた。

「ちよいとお待ちなすつて……とにかく葉子さんを寄越ませうでござります。」

「いや、葉子には用はない。心配しないで寝むやうに……。」

「でも貴方、折角おいで遊ばしたのに、飛んだ人が紛れこんで……何ですか、私共には解りませんけれど、お氣に障つたことも申したやうで、實は彼方ではら〜致してをりました。」

「とにかく自動車を呼んでもらはう。」

「呼んでまゐるのは譯はございませんが、まあさう仰やらすに……。」

「いゝから呼んでもらひませう。」

「さいでございますか。では一寸葉子さんに聞きました。」老婆は引込んでいつた。

暫くすると葉子が濡れた目を拭きながら、そこへ入つて來た。

「どうも済みません。」葉子はおづおづ言つた。

「いや、別に謝罪することはない。あの男だつて相當の理由があつて、己にあれだけの理由を並べてゐるんだ。あの男と今夜何か約束したことがあるだらう。何ういふ約束をしたのか、強ひて聞く必要もない

が、葉子さんに何か考へがあるなら聞いてもいゝよ。」

葉子は何と答へていゝか判らなかつた。無論面と向つて言へるやうな事ではなかつた。

「何うだね、言へないかね。」

葉子はやつぱり黙つてゐた。

「言へなけあ言へないでも可い。己も聞くまい。孰にしても此まゝでは濟まない事だ。」
そして荒井は時計を見ながら、

「ではその話を更めてするといふことにして、今夜はちよつと用事もあるし、自動車を呼んでもらはう。」
葉子は仕方なしに立あがつた。勝手の方へ来てみると、父は行火を抱いて、心配さうな風をして、首を垂れてゐた。老婆も長火鉢の傍で浮かない顔をしてゐた。

「何うしました？」

「やつぱり歸るんですつて。」

「さうですか。何とかして、御機嫌をお直しなすつたら。」

「いゝんです。濟みませんが、呼んで来て下さい。」葉子も少し意地張りに出た。

大住は黙りこくつてゐた。何うにもならない事だと思つてゐるらしかつた。

老婆は仕方なしに支度をして出て行つた。

(七)

荒井は餘り多くを言はなかつた。明白な返答を葉子に強ひようとしなかつた。彼は心から怒りを感じたけれど、それは今の秋葉の態度や言葉が癪に障つたので、葉子に向つては、淡い嫉妬をもつただけで、總てを赦し容れるだけの愛着が強く根を張つてゐた。彼は却つて葉子を怯えさせることを怖れた。

けれど葉子の態度には、單に怯えてゐるとばかりにも思へない執拗さがあつた。荒井はそれを回避するのが、此際一番安全な策だと感じたので、わざと意地づよく自動車を命じたのであつた。

やがて自動車 came。しかしけれど、葉子は荒井の傍へ寄りつかうとはしなかつた。

「それでは益々荒井さんのお氣を悪くするばかりですから、たとひ何處へお出でにならうと、葉子さんも一緒にいていらつしやる方が可ござんすよ。家は却て氣鬱でせうから、何處ぞ氣をかへにいらつしやるのも好いでせうよ。ね、早く顔でも直してさうなさい。」老婆は諭した。

葉子はさういふ風に扱はれるのも、餘り感じが好くなかつた。荒井ならば未だしも、そこに矜を傷けないでも濟むだけの理解はあつたけれど、父や老婆に其を言つても仕方のない事であつた。それに其の荒井ですら、今夜あたりの口吻では、婦人としての自分の人格が、全然無視されてゐるやうにさへ思はれるのが、ひどく彼女の心を暗くした。

夜が更けて來たので、發動機の音が奥まで響いた。そして葉子と老婆がぐづ／＼してゐる間に、荒井

は荒い足音を立て、いきなり玄關口へ出て行つた。氣勢に氣付いた老婆は、一層氣をあせつて、
「さあ葉子さん、こゝが大事の處ですよ、早く往つてお継りなさいね。」

すると大住も棄て、はおけないので、遽に行火を離れて、
「さあお前もおいで。」と葉子を誘つて、玄關口へ出て行つた。
ちようど靴をはいた處であつた。

「まあ此のお寒いのに。」老婆がお愛想を言ふと、大住もそこに跪坐ひながら哀願した。

「何かお氣にさはつた事がございますなら、私が能く言ひ聽せますので、何うかまあ御用の濟み次第……。」
その態度がまた葉子を不快にした。

「其よりも、何うか後を氣をつけて下さい。」荒井は言つたまゝ、ついと出て行つた。

葉子は障子の蔭からそれを見送つてゐたが、やがて父の後について部屋へ歸つた。老婆は門や格子の鍵をかけてゐた。

室の内が遽に空虚になつて來た。

「何が何だか私には薩張判りませんけれど、二人であんな大きな聲を出して、一時は何うなることかと、胸がどき／＼しましたよ。」老婆は長火鉢の火を弄りながら言つた。

「何だか知らんが、私はまあ聽かん方がいゝと思つて、耳をつぶつてをつた。商賣が商賣だから、時に

はこんな事もあるだらう。荒井さんもさう怒つてもゐないやうだ。」大住はわざと落ち着いてゐた。

「一體あの書生つぼみたやうな人は何です。」

「さあ幾歳ばかりの男だ。」

「あれでも二十七八でせうかね。若い顔してゐますけれど。」

「役者か。」

「さう？ 葉子さん。」

葉子はちよつと頷づいて見せた。

「何か因縁をつけられる弱い尻でもあるのか。」大住がきいた。

葉子は澁つてゐた。

「何の因縁もないのにあんなに威張つて痰呵を切る奴もないでせうが、葉子さんも何か胸に來ることがあるなら打明けて、御相談なさる方が可うござんすよ。社長さんの御機嫌を損じちや、孰れにしても損ですからね。」

「えゝ。」仕方なし葉子は答へたが、それ處でなかつた。

淡い寂しき

(一)

葉子は剛情に二三日閉籠つてゐた。荒井に注意されたので、父と老婆は彼女の行動に、それとなく氣をつけてゐた。荒井が警告めいた言葉を遺して行つたのは、秋葉の近寄つて来るのを注意しろといふのか、葉子が自殺でもしては困るといふ意味か、孰とも判らなかつたが、多分後の方だらうと思はれた。けれど葉子の様子には、別に變つたことがなかつた。寧ろ破裂前より強みが出て来たやうに思へた。彼女は荒井に向つては、多少不自然らしく思へるにしても、左に右愛情を感じたが、同時に憎みをも感じた。秋葉には友情に近いやうな、純な愛を献げたく思ふだけであつた。自分の引摺込まれて来た道が、峻しい横道であつたことは、彼女も十分感づいてゐたので、遁れられるものなら、遁れたいと願つたが、荒井の手を引放すには、餘程の覺悟がなければならぬことも解つてゐた。さうした強い力に抱疎められて、愛するよりも多く愛されて暮すのと、双方の感激に結びつけられた愛の生活に生きるのと、その孰が眞實だかは、考へるまでもなかつたけれど、事實はさう單純には行かないのであつた。で、老婆の判斷は至つて明瞭してゐたけれど、父の大任は何とも言ひかねるのであつた。

「お前の氣の向いたやうに。」と父は言つてゐた。

彼は葉子の母のお組が、幾度も今の葉子と同じ立場に立つたことを、能く知つてゐた。外に風流の道樂もあつたけれど、それもお組を中心としたことで、彼はとにかく財産を蕩盡した。そして彼女の若い時代を殆んど自分のものにしてゐた。さうなる運命ではあつたらうが、今になつて考へてみると氣の毒な生涯であつたと思ふのであつた。

「お前の商賣が商賣だから、今日はあつても明日はないやうなものだ。何か大きな力にすがつて、早く一生の計をした方が、惻巧のやうにも思へるが、又さうでもない、若い時は二度とないのだから、爲たいことをしておくのも好いかも知れない。」

その位のことには葉子にも判つてゐたけれど、さう思つてくれる父の氣持は、有難いものに思へた。

とにかく荒井に来てもらふにしても、此方から行くにしても、此儘にしておくのは不得策だと云ふことにも父も老婆も一致してゐた。話がつくまで秋葉に逢つてはならないことも、同様であつた。

「秋葉さんも二度と私に逢ふやうなことはしないでせう。會社も止めたでせうと思ひます。」葉子はさうでないことを希ひながら、わざとさう言つてゐた。

或日葉子は大塚を澁谷のアパートメントに訪ねようと思つて家を出た。すると老婆は氣遣つて、自分がついて行くと言ひだした。葉子は可笑しかつたが、悪い氣持はしなかつた。

「大丈夫よ、そんなに心配して下さらなかつた。私そんな弱蟲ぢやない積りですから。死ぬなら何時

だつて死ねますもの。」葉子は笑つてゐた。

葉子はもう一週間も家に閉籠つてゐたやうな気がした。父や老婆を相手に暮してゐるのは、怠屈でもあつたが氣詰りでもあつた。それにあの晩は、實際頭腦が妙に感傷的になつてゐて、我ながら芝居じみたことを言つたり爲たのだと思ふと、我と氣が差して、本當にしつかりしなければ駄目だと思つた。しかし公園の木蔭で、男の胸に顔を押當て泣いた時は、今にも秋葉と一緒に、どこかへ逃げてしまひたいやうな気がした。あの時荒井の自動車を通らなかつたら或ひはそんな事にならないとも限らないのであつたが、荒井に談判を持ち込んだりした秋葉の仕草にも、どこか芝居じみた所があつたと思はれた。二人が眞剣になつて争つてゐるのを、襖の蔭で偷み聞きしてゐた葉子は、飛んでもない結果になつたと思つて、遽にやる瀬ない涙で胸が一杯になつた。

この二三日、葉子は悔恨と慚愧とに責られて、今までの矜が臺なしになつたやうに感じた。惨めな姿を見られるのが厭で、誰にあふ氣もしなかつたが、大塚だけには割合安心して話せるやうに思へた。

(二)

受附で案内を乞うて、エレベーターで五階へ上つて行くと北側の部屋の入口に、和服姿の大塚がそこへ顔を出してゐた。葉子は大塚に逢ふのが常であつた。確に大塚が自分を愛してゐたと思ふ理由があるからだが、しかし彼はいつも素知らぬ顔で、素通りをしてしまふのであつた。青春期を無駄に過してし

まつた彼は、一生禁斷の實を味はずにしまふだらうと思はれた。

彼はこの前逢つたときも、葉子の荒井に誘惑されたのを、少し怒つてゐるやうに見えたが、智慧子のやうに憤慨もしてゐなかつた。出来ることなら、自分も觸れず、人にも觸れさせず、何時までも葉子を處女にしておきたいやうな氣持ちであつたが、其を葉子に強ひようともしないのであつた。今日も彼は何だか寂しい顔をしてゐた。

「あれから何うしたの。少し問題が起つたやうな話しぢやないか。」

「え。もう御存じなんですか。」葉子は反つて氣易いやうに感じた。

「いや、詳しいことは知らない。」大塚は窓際の椅子に凭れてにや／＼してゐたが、

「秋葉が憤慨して、ツルミのスタチオを出たといふぢやないか。」

葉子は軽い驚きを感じた。しかしそれは必然の徑路だと思はれた。

「どこかへ入つたんでせうか。」

「いや、まだ何處へも入らないやうだ。しかし、ことに依ると、目黒スタチオへ行きはしまいかと思ふ。」

「東キネへ？」

「さうさ。昨日安住が来て、そんな事を言つてゐたがね。」

「安住さん出て来たんですか。」

「だから世のなかは面白いよ。詰り安住と秋葉が握手した譯なんだが、安住も東キネへ資本を注ぎこむことになつたらしいんだ。強ち葉子さんと荒井君に對して、敵愾心をもつた譯でもなからうが、確にそれもあるね。それは何の程度まで成功するかは疑問だが、何しろ素破らしい意氣込みらしいんだ。」

葉子はさすがに胸がどき／＼した。安住のことはそんなには響かなかつたけれど、秋葉の心理には同情ができると同時に、手痛い癢を負はされたやうに感じた。

「それに秦野さんが加はれば、差し詰め日東に對して、三角同盟ができる譯ね。」葉子は苦笑した。

「まあさうだね。」

「皆なで私を苦しめようとしてゐるのね。」

「さうぢやないだらう。荒井に反感をもつたんだらう。しかし秋葉の給銀は相當高いし、須永と荒井の關係が關係だから、須永が秋葉を受容れるか否かは疑問だ。須永は荒井の氣を悪くするやうなことはしたくないと言つてゐるさうだし、葉子さんに對しても、いくらか遠慮してゐるらしい。」

「それあ仕方がございせんわ。どうせ秋葉さんは何處かへ入るんですもの。」

「さうさ。詰らないお義理だと思ふんだがね、しかし其が須永の主義として、俳優の奪ひ合ひなんかはしないといふんだからね。」

「ぢや、其の事はまだ決つた譯でもないんですのね。」

「いや、多分さうなるだらう。安住も秋葉が入社するなら、資本を出すといつてゐるんだし、秋葉も金のことなら妥協するだらうから。」

「それにしても随分變ですわね、二人で握手するなんて。あの人達の心理はちやんと判つてゐます。矢張り私を對象にして働いてゐるんです。」

「それに恚ういふこともあるんだよ。」大塚は急に思ひ出したやうに、

「皆なが計畫してゐるとほり、安住と智恵子の結婚が、何うやら成立しさうなんだ。」

「さうー」

「それが又面白いんだ。智恵子が荒井に對する反感が、東キネを盛返さうと云ふ野望を挑發したんだ。そして資本家として安住を引入れようといふんだ。餘程お父さんが憎いとみえてね。」大塚はをかしさうに笑つた。

(三)

「え、さうのやうですね。其の結果智恵子さんは私にまで反感をもつていらつしやるんですわ。でなければ安住さんと結婚なさる理由がないんですもの。」葉子はそれも氣にかゝつた。

「いや、この前も言つてゐた通り、智恵子は貴女には同情してゐるんだ。で、荒井から貴女を何故引放してやらないのか。看看葉子さんの不幸と知りながら傍觀してゐるのは、不親切だと言つて、あの時も

貴女と別れてから散々僕を責めるんだ。けど僕だって、葉子さんの監視人ぢやあるまいし、一々干渉することは厭だからね。高級批判を下す日になれば、葉子さんが荒井と一緒になるなぞは、僕も感心は出来ない。出来ることなら、秋葉の手へ歸つて行つた方がいゝだらう。——しかしあの晩秋葉と二人で、さう云ふ相談をしたんぢやないのか。」

「さうなんですの。それで秋葉さんが荒井さんにぶつ突かつて行つたんです。」

「で、荒井はそれを蹴返したんだらう。」

「お互ひに随分激昂してゐましたから。」

「それで葉子さんは何う思ふんだ。」

「荒井さんに諒解してもらへるなら、私さうしたいと思ひました。それには相當の時日が必要だらうと思ひましたから、あの時あんな風に正面衝突をしてくれなければ可いと思ひましたけれども、まだ私と秋葉さんと十分相談を決めないうちに、御院殿坂のところで、荒井さんの自動車に出會してしまつたんですから……。」

「ちや葉子さんは、荒井から離れるつもりであつたんだね。」

「私は秋葉さんが氣の毒になりました。私は本當に悪いことをしたと思ひました。荒井さんに動かされたのは、私が弱かつたんです。」

「それを言つたところで仕方がない。で、今は何う思ふんだ。」

「私自分のしてゐることが、何んだか恐ろしくなりました。自分だけでは、何一つ判断することの出来ない、愚な人間だと思ひました。それで何も彼も棄てしまつて、舊の獨りになりたうございますの。男なんて本當につく／＼厭になりました。」葉子はさう言つて手巾を取出して涙を拭いてゐた。

「さう悲観することもないよ。」大塚も心を動かされて、つい目を曇らせた。

「私は自分から求めて、何一つ仕出來してはゐないんです。いくら反省しても、あの人達に對して自分からこんな問題を惹起すやうなことは考へてゐなかつたのです。安住さんにしたところで、荒井さんにしたところで……もつと極端にいへば秋葉さんにだつて、私から何も求めた覚えはございませんの。それなのに私一人を取捨て、皆さんで自分勝手に怒つたり、喧嘩したりして、終ひには皆さんで私を憎むやうな事になつてしまつたんです。私が弱かつたんでせうけれど、その弱いものを、皆さんで苛めていらつしやるとしたか、私は思へないんですの。」葉子は手巾で顔を蔽ひながら、

「かう言ふのは私の我儘でせうか。私が可けないんでせうか。私にはそれが解らないんです。」

大塚は「うゝん。」と唸り出した。彼は本當に葉子がいぢらしくなつた。出来ることなら涙を吸ひ取つてやりたいやうに感じた。

「いや、さうなつて來ると僕も責任を感じなければならん譯だね。」

「いゝえ……さうぢやございませんの。貴方にこんな我儘をいふのは、矢張私がいけないんだらうと思ひます。」

「いや、介意はんよ、僕は感じがいからね。葉子さんの愚痴なら、いくらでもきくよ。誰にもいへない愚痴なら、僕が残らず引受けてあげたつて平氣だよ。人間はどこかに愚痴の捌け口がなければ逆も生きちやゐられない。僕は何一つ葉子さんに求めようと思つてやしない。しかし愚痴を聞くくらのことは、さう厭ではないんだからね。——葉子さんの言ふのは尤もだ。だがそんな事を言つた日には、髪でも切つて、山の奥へでも入つてゐるより外ないぢやないか。山の奥へ入つたつて、生きてゐる間は、そこに又事件が起るんだ。皆なは葉子さんの心を占有しようと思つてゐるんだ。それも、葉子さんが美しいからだ。ねえ、さうぢやないか。」

(四)

葉子はさう言つて慰められると、凍つてゐた胸が少し融け和いで来る様な感じであつたが、また大塚の燃えざる愛といつたやうな感傷的な或るものに觸れたやうに思へて、弛い壓迫を感じた。

それと同時に、今まで臆病に首垂れてゐた彼女の心が、遽に一轉機を捉へて、撥返して来るのを感じた。闇を彷徨うてゐた弱い靈に息が掛つて来たかと思はれた。

「智恵子さんは眞實に安住さんと結婚なさる積りでせうか。」葉子は智慧子の結婚の動機に、ある共鳴

を感じながら、尋ねた。

「さうと見えるね。あの女も戀愛には失敗する、生活は崩れて来る、最近焦燥つてゐる形ぢだつたからね。御母さんや泰一君もそれを熱望してゐるし、まあ好い加減のところ諦めたんぢやないかね。」

「さう。」と葉子は詰らなさうに頷いて、

「ぢや智恵子さんも矢つ張り負けたんですわね。」

「いや、安住と二三度逢つてゐるうちに、氣に入つたらしいんだ。それが眞實だらうね。荒井に對する反抗心だなんていふのは、矢張あの女の見えでね、謂はゞ彼女自身への言譯さ。」大塚は寂しく笑つた。葉子は益々厭氣がさした。

「それぢや詰らないわ。」

「あの女は度々僕を揺りに来たんだ。」大塚は少し微聲になつて、「怠けものゝ僕を鞭撻して働かせるために、結婚しようといふんでね。僕のはポコンデリーを征服して、新しい生氣を賦與してくれるんださうだ。けれど其も徒勞さ。」

「近いうち結婚なさるものと思つてゐました。」葉子は微笑した。

「しても可いんだが、何だかお互に餘り知りすぎてゐるんでね。あの女のやうな理窟ぢや戀愛は燃えやしない。」大塚は苦笑しながら、

「あの女だつて、僕のやうな張合のない人間と結婚したつて、生活が退屈になるばかりだ。まだしも安住の方が、世のなかに興味ももつてゐるし、金もある。第一温順しいから、自分の色彩を出さない。」

「ちやまあ智慧子さんは幸福といふ譯ですわね。」

「葉子さんだつて、安住は嫌ひぢやなかつた。」

「それあさうなんですけれど……。」葉子は寂しく微笑んだ。

「今葉子さんは獨りになると言つたが、それは双方とも厭になつたといふ意味かね。」

葉子は黙つてゐた。さう單純にも言へないやうな氣持であつた。

「何うしたら可いんでせうか。」

「何うしたらと言つたところで、葉子さんの思つてゐるとほりを、偽らずに遣るより外ないことぢやないか。心にもない妥協がいけないんだ。荒井が好きなら、それで好いぢやないか。」

「みんなに反感を抱かれてゐるなら、いつそ日東に立籠つて闘はうかと思ふんですけど。それは秋葉さんに敵意があるといふ譯ぢやないんです。あの人には今でも感激をもつてゐますけれど、でも慫うなつては仕方がないでせう。どうせ呪はれた運命の子なんですもの。」葉子はさう言つて俛いた。

「意地だね。」

「意地つて譯でもないんですけど。」

「けど、するぶん悲痛ぢやないか。そんな事をしていゝのかね。」

「よくても悪くても……。」

「大詰が荒井に對する復讐といふ譯かね。」

「何ですか。」

「しかしそんなやうな運命の豫期はあつたやうだね。それが葉子さんの性格かも知れない。」

「どうせ私の運命は悲惨だと思つてゐます。でも、自分の幸福を失ふやうなことはないと思ひます。肉體はたとひ何うなつても、心まで墮落はしない積りです。」葉子は目を輝かした。

(五)

其の時戸を叩く音がするので、大塚が振り返つてみると、ボオイが顔を出して、電話のかゝつて來たことを知れた。大塚は急いで廊下へ出て受話器を取つた。

電話をかけたのは荒井で、若しかしたら葉子が行つてゐないかと言ふのであつた。

「葉子さんなら來てゐますが……。」大塚は答へた。

「それなら可いんだがね。實は今葉子を訪ねたところ、二三時間前に出ていつたといふのでね。」

「いや心配はありません。確かにここにゐます。」

「話しは君も聞いただらうが、いや何うもお恥しいことをお耳に入れて、恐縮です。」

「大體聞きましたよ。大分芝居じみた筋のやうで、興味といつちや濟まないが、局外から見ると、なか／＼面白いですよ。しかし葉子はするぶん苦んでゐるやうです。」大塚は笑ひながらいつた。しかし荒井は眞面目で、

「危険はありますまいな。」

「危険です。今のところ別に……しかし保証もできません。」

「實は僕も葉子の態度にちよつと腹が立つた。で、綺麗に秋葉に渡してしまはうかとも思つた。あの晩の態度なんかは、全く言語道斷だからね。しかし又た可哀な點もある。僕がこゝで投げ出してしまへば、あの女は立場に迷ふだらう。それに秋葉の方も、一旦あゝなると素直に葉子を受け入れることもできまい。ツルミのスタヂオの方も罷めてしまつて、今日聞けばメグロのスタヂオへ入るといふやうなことも噂されてゐる。僕もそれなら其でいゝと思ふんだ。かうなれば何うせ綺麗事にはいかないんだから、僕が悪者になつて、どこどこまでも葉子の面倒を見てやらうと思ふが、葉子は何う言つてゐるかね。」荒井は不安さうに訊いた。

「それが實に變な心理状態なんだ。電話ぢや説明もできないが、とにかく劇的な葛藤が今の葉子の氣持に渦をまいてゐるんで、あの女に取つては實に痛々しい經驗ですよ。」

「そんなに苦んでゐるかね。何もさう……。」荒井は極りわるさうに言つて、「それぢや僕是从行かう。」

「さうですね。」

「君には誠にすまないが、かう何もかも暴露されては仕方がない。僕は男らしく君の前にお叩頭をするより外ない。」

大塚は「はゝゝ。」と笑つた。

「ぢや待つてゐます。」

大塚は電話を切つて、部屋へ戻つて來た。

「さすがの荒井君もしどろもどろだ。だが、葉子さんに大分まるつてゐるやうだね。で、今こゝへ來るさうだ。葉子さんの身のうへが遽に心配になつたものらしい。」

「私逢つてもいゝでせうか。」葉子は臆病さうに言つた。

「厭でさへなかつたら……。」

「えゝ。」

「三日も行かなかつたんだつて。」

「え、あの時ずるぶん怒つてお歸りになつて……。」

「それとも荒井と手を切るなら、今のうちだよ。」大塚は部屋をあちこちしながら、少し焦れ氣味でいつた。

「何うしても厭だといつてしまへば、それ限だからね。荒井には氣の毒だけれど、その代りツルミスタチオにはゐられなくなる。須永の方ならいつでも話しはつくだらうけれど、安住が出資者で、秋葉が立物ではね。」

「秋葉さんは駄目です。今度は私が侮辱されるばかりです。安住さんに對しても、今更私を容れることは出来ないでせうと思ひます。」

「勿論だね。矢張毒喰は血までかね。それに荒井の態度は思つたより正直で無邪氣だ。葉子さんの氣に入るのも無理はないかも知れん。あすこへ入つた時から、荒井の印象は悪くなかつたやうぢやないか。自分では意識しないでもだ。」

葉子もそれを拒む理由がないやうに思へた。

(六)

荒井が來たのは、其から三十分程してからであつた。彼は葉子の顔を見ると、漸と安心したといふ風で、しかし一寸羞かんだやうに、外套をぬいでスチームの傍へ寄つて來た。彼は葉子が大塚と何う云ふ話をしてゐたかを不安に感じてゐたので、急いで遣つて來たのであつた。

「唯今は失禮。」荒井は大塚に挨拶してから、葉子に向つて打釋けた態度で、
「あれからずつと家にゐたんだつて？ うむ、さうか。御父さんも心配してゐた。大塚君の處へ行くと

いつて出たから、まさか秋葉のところではあるまいとは言つてゐたけれど。」

「いゝえ。」

「秋葉はあれから何とも言つてこないねえ。」

「今ちよつと大塚君に電話できいたんだが、そんなに苦しんでゐるのかね。」

葉子はいつともより甘い口を利かれるので、何だか感じが悪かつた。

「え。でももう可いんです。」

そこで荒井も遽に口を噤んだ。大塚は恍けたやうな顔を外向けて煙草を喫してゐた。
「己はまたこの事について、大分敵を作つた形ちになつたよ。秋葉が出るについて、俳優にも多少の動搖は免れないやうだ。それでこの機に乗じて、葉さんまでも引こ抜かれるやうな事があつては大變だと思つてね。まさか大塚君がその手引をするやうなことはあるまいとは信じてゐたが、折りが折だからね。」

「成程ね。」大塚は感心したやうにいつて、笑つたが、
「いや東キネの方では、また其處まで手は伸びてゐない。それに秋葉がさう云ふ態度に出れば、葉子さんだつて今更秋葉の後を追つて行く譯にも行かないぢやないか。」

「意地としてもね。」荒井も調子に乗つて、「さうしてさうなれば、秋葉の一味を向うへまはして、葉子さんは飽まで闘はなければならぬ。」

「まあさう云つた立場だね。」

「しかし葉子にその覺悟があるか何うかな、この人も案外腰が弱いので、いつ心が動くか不安だ。少くとも今まではさうだつた。今後戀愛仕掛で、秋葉に誘き寄せられるやうなら、今のうち言つてもらひたい。何うだね。さういふ事はないだらうね。」

葉子はまた新しい悩みを感じた。そんな誓約に縛られるのも厭だと思つた。

「しかし今其を言ふのは、少し酷かも知れんね。運命の錯誤といつたやうなものだ、葉子さんの氣持を、悲劇的に高調させればさせるんだが……それは映畫のうへにも現れないではゐない事だが、それにしては性格が少し弱過ぎはしないかと思ふね。」大塚は危ぶむやうにいつた。

「性格がね。」荒井も失望的に呟いたが「とにかく今が一轉機だ。眞實の仕事はこれからだ、しつかりしなくちやいけない。」荒井はさういつて、腕時計を見ながら、

「是からちよつとスタヂオへいかうと思ふが、葉子さんも久し振りで顔を出しちや何うだ。」

「さうですね。何か撮影がごさいますの。」

「何かやつてゐるやうだ、それに一つかゝらうと思ふシナリオもあるんだ。當分少し休んでもらはうと思つたけれど、葉さんにやつてもらつても好い役もあるからね。」荒井はさう言つて促した。彼は早く葉子を運出して、一晩どこかの温泉へでも行かうと思つてゐた。葉子はしかし大塚の手前、二人き

りで出るのを躊躇してゐた。

すると其時受附から電話がかゝつて、大塚が出て聞くと、安住と秋葉がお揃で遣つて來たのであつた。

葉子と荒井はちよつと狼狽した。そして急いで大塚に別れを告げた。

廣い階段を大急ぎでありかゝつた時、二人の姿が階下に見えだした。四人は階段の途中で擦ちがつたが、孰も狼狽してゐたので、目を伏せたまま、口一つ利かなかつた。

春の宵

(一)

葉子が智恵子と安住の結婚披露の招待を受けたのは、その翌年の三月であつた。

あれ程葉子と親しくしてゐた智恵子が、金作と結婚することになつた心理的経路については、大塚の説明を信じてもし、と思はれる理由はあつたが、しかし葉子としては氣分に昵みかねるところもあつて、披露の宴に臨むのが何となく厭であつた。で、何うしようかと思つて躊躇してゐたけれど、二人の爲に祝福したい心持は十分あつた。それに智恵子から殊に釋明的な手紙もよこしてゐた事とて、葉子は荒井と相談して式場へ心を籠めた花環など贈つたのであつた。

葉子自身は暮から春へかけて、餘り健康が勝れなかつた。感冒に罹つて三週間ばかり床について以來、何か知ら體に變調が來たやうに思へてならなかつた。多分感冒のために體が衰弱したのだらうと、獨り決めに極めてゐたが、それにしても嗜好物の變つたことなどが、ちよつと不思議であつた。特別に好きでもなかつた蜜柑などを嗜むやうになつた。食慾がなくなつて體に倦怠を感ずることも、今迄には覺えないことであつた。葉子も微かに氣着いてはゐたが、老婆のおえいなどに知られるのが恥かしかつたので、獨りで胸を痛めてゐた。荒井にだけは一寸話した。

荒井は格別、驚きもしなかつた。

「言はずと知れた妊娠だよ。」彼はさう言つて笑つてゐた。

葉子は何となく其を皮肉に感じた。さうと知つた荒井が、一層葉子に愛著の増して來たことは、葉子にも領づけたが、彼女はむしろ腹立たしく思つた。

「だから女はつまらない。」葉子は苦笑した。

「けどそれは仕方がない。造物主がさう云ふ風に女を造つたんだからね。東洋流にいへば女は罪が深いんだ。産れたときから、それだけの苦みを受けるやうに運命づけられてゐるんだ。さう思ふと腹が立つが、しかし其はまた女にのみ與へられた悦びでもあるんだ。」荒井はそんな事をいつて、葉子の機嫌を取つてゐた。

荒井は漣子の手前、餘り公然に田端通ひをする譯には行かなかつたので、ちよつと一つの暫據のやうなものを拵へておくことを忘れなかつた。それは何處かの方面に關係してゐる藝者があるやうに見せかけてゐることで、遊びの方だと未だしも漣子の前で體裁が作れるのであつた。しかし荒井の花柳界へ入ることが、果して漣子への豫防線だけの意味であるか、それとも其が自然に葉子への口實になつてゐるのか、それは葉子にも明瞭でなかつた。左に右彼れが一方清い葉子の愛に酔つてゐる傍らさう云つた享樂の巷へも出入してゐることが、この頃葉子にも漸く判つて來たので、ひどく自尊心を傷つけられたや

うに感じた。勿論營業上、絶對にお茶屋の闕を跨がないといふ譯には行かなかつた。現に最近アメリカから映畫のブローカーが、澤山のフィルムを持つてやつて來たときなど、荒井の手で、大分捌いてやつたが、そんな取引上の話しは、大抵藝者なんかを傍へ侍らせておく時に、工合よく行くらしかつた。多勢の藝者をつれて箱根で豪遊したのもその時で、葉子も誘はれたけれど、ちやうど體の悪いときだつたので行かなかつた。漣子は行つたのであつた。

とにかく葉子は荒井の生活が、初め考へてゐたやうな美しいものでない事が、段々解つて來た。待合や料理屋などに、顔の知れてゐることも驚くべきほどで、日本橋の或る料理屋へ一緒に飯を食べに行つた時の、荒井の持て方から想像してみても、彼がそんな社會に、何のくらの羽振が好いかといふことも、大抵見當がつくのであつた。

葉子も初めは、腹立しく思つたけれど、少しづつ馴れてくるとさう云つた生活氣分がさう鼻につかなくなつて來るのであつた。

「おれが教育してやる。」荒井は言つてゐたが、葉子もこれを憤慨することは出来なかつた。

(二)

葉子はその日仕立卸しの高等な總模様の紋服で、自動車でホテルへ乗りつけた。装身具もわざと其の日のために調へた高貴のものなどを着けてゐたので、金に見積ると、彼は四五千圓のものが彼女の體を

飾つてゐる譯であつた。髪や顔もわざ／＼新橋まで出向いて行つて作つたもので、着つけも其處から出張して貰つたのであつた。父の大住も老婆のおえいも目を睜つて驚いたほどで、すつかりお扮粧が出来あがつた時には、葉子自身が妾見の前に立つて、うつとり見惚れるほど美しかつたが、それが人の結婚披露の席に列なるためのお扮粧だと思ふと何となく寂しかつた。智恵子の結婚を決して羨ましく思ふ理由はなかつた。動機にいくらか外面的な政略に似たやうなものゝあることも、餘り感じが好くなかつた。智恵子からいへば安住に同情した點もあるであらう、安住から言へば多少の當つけもあるであらう。結局二人の地位がさういふ風に相牽引して行つたには違ひないが、それは三つか四つか轉がつてゐた赤と白との玉が、偶然に二つかち合ふやうな運命に出逢つたまで、二人を結びつけねばならぬ必然性が大してあつた譯ではなかつた。

さうは思つても、葉子はやつぱり寂しかつた。自分にあれほど傾倒してゐた安住を智恵子に褫はれたやうな氣もしたし、あれほど親しかつた智恵子に背かれたやうな感じもするのであつた。で、葉子自身はといふと、思ひがけない荒井に身を任せるやうな運命に何時とはなしに盲従して、餘り晴がましい顔をして、人中へは出られないのであつた。葉子は透通るやうなグラスの底に映つた自分の暗い目を、長く凝視してゐるに堪へなかつた。涙がひとりで入染出して來た。

途中葉子は着つけをしてくれた女を送つた序でに、その邊で寫眞を撮つた。そして涙ぐましいやうな

氣持ちでホテルの北側の入り口で、自動車をおりて、中へ案内されて行つた。ちやうど四時頃であつた。葉子はフェルト草履の吸ひつきさうな敷物のうへを、今日の自分を殊に哀れにいちらしく思ひながら、談話室の方へ導かれて、歩いて行つた。

安住、須永御兩家……と云ふ立札がそこに出てゐて、四邊に禮服姿の人達が立話しをしてゐたり、あちこち歩いたりしてゐた。葉子はその人達の傍を通つて、入口へ近づいて行くと、受附で招待状を出して、部屋へ入つた。そこに屏風を背景にして、盛装した智恵子と安住が並んで椅子にかけて、きちんと膝のうへに両手を重ねてゐるのが、目についた。その側に見覚えのある須永英三と、多分母であらう、骨張つた嚴つい顔をした、背の高い女と、わざ／＼出て來たらしい、安住の父母が紋服姿で、生真面目な顔をして立つてゐたが、今一組の實業家風の夫婦は、多分媒介人であらうと思はれた。

葉子は一々それらの人達の顔を見たわけではなかつた。少し業々しいので、ちよいと氣後れがした上に、英三の顔を見たときには、思はず胸がどき／＼してしまつた。

「おめでたう御座います。」葉子は微かな聲でさう言つて、二度ばかり腰を屈めて頭をさげると、そのまま其の關門を通りすぎてしまつた。そして壁際の方にある椅子に腰をおろして、俛いてゐた。

秋葉は何處にゐるだらう、葉子はさう思ふと、一層頭があらなかつた。つい目の前に彼れが誰かと話してゐるやうに感ぜられた。人が次ぎ／＼に入つて來た。もう百四五十人の人達が、部屋をあちこち

に椅子を取つて、お茶を飲んだり、煙草をふかしたり、笑つたり饒舌つたりしてゐた。電燈のほのかな光りがそれらの人々の上に漂うてゐた。

「ようー」不意に誰かど聲をかけて、彼女の前へ來て立つた。

(III)

葉子が喫驚して、ひよいと目をあげると、そこに大塚靖夫がモオニング姿で立つてゐたので、遽に助舟を得たやうな氣持ちで、思はず顔を見合せて、につこりしながら、起ちあがつて挨拶した。

「今日はよく來ましたね。」

「え、何うしようかと思ひましたけれど、矢張出た方がいゝと思ひましたから。それに智恵子さんから特別にお手紙もいたゞいてをりますの。」

「それは來た方がいゝね。」

「でも何だか極りが悪いんですもの。智恵子さんも安住さんも餘り澄してゐらつしやるので……。」

「そんなに澄してゐた？ 何に向ふが極りが悪いんだ。」大塚はさう言つて、そこに腰かけながら、

「何しろ盛會で結構だよ。今日は東キネ關係の重立つた人は勿論、映畫界に關係のある各方面の人が來てゐるからね。荒井君にも招待状を出すよかつたね。葉子さんの旦那さまとしても、それが當然の禮儀かも知れないんだ。」

葉子はまさかと思つて苦笑してゐたが、しかし大塚の言ふことが、強ち不眞面目な揶揄だとばかりは思へなかつた。現に葉子は妊娠してゐた。今までは何の思慮もなかつたけれど、葉子といふ子をもつた母の運命が、自分にも廻り合せて来たのだと思ふと、その子供にも同じやうな運命が廻りあはせるであらう。其ばかりでなく、荒井と同棲するなら、いつそ恚うした晴の場所へも携へて出られるやうに、自分の人格が世間的にも認められなければならないことなのに、まるで日蔭者の様を見すばらしさで、晴がましいこの會場^{くわいじやう}に交つてゐなければならぬのであつた。

「僕も今まで人の結婚式には屢々出るけれど、僕の結婚式は生涯来ないやうだ。葉子さんも、今日は何ういふことを考へてゐるかと思つたんだが、何だか少し顔色が悪いやうぢやないか。」

「さうー」葉子は急に神経性を目をして、「この頃少し變なんですよ。でも何でもありません。多分神經衰弱だらうと思ひますけれど。——でも貴方だつて明日のことは判りませんわ。智恵子さんと安住さんの結婚だつて、本當に突發的でしたから。」

「さうさ。あれ程葉子さんでなければならぬやうにいつてゐた安住ですら、こんなに容易く妥協してしまつたんだからね。」

「え、本當に不思議ですわね。でも、あの方の目がそれだけ肥えたのかも知れませんわ。智恵子さんなら、本當に申し分なしですわ。」

「まあね。」婿夫もうなづいて「智恵子の方が、荒井に對する反感だけでも、世間的にいつて、意地にも健全な道^{みち}を辿つて行くだらうが、一時はカメラの前に立ちさうな形勢も見えたこともあつた。樂屋のことを知つてゐて、何もかも解りすぎてゐるだけに、盲進^{まうしん}することが出来なかつただけだが、今でもさういふ氣分がないとはいへない。」

「え、さうでせう。遺る日になれば譯はないといふ自信をもつてゐらつしやるやうね。おやりになるといふと思ひますけれど……。」

「でももう駄目だね。資本家の奥さまになつてしまつたから。僕の結婚と同じやうに、もう臺が立つてしまつた。」

人が刻々に殖えて来て、靜肅であつた室内の空氣が何となく陽氣になつて来た。ちよいと知つた男女俳優の顔や、監督や技師の顔も目について、中には葉子の傍へ来て、お辭儀するものもあつた。葉子も澄してばかりはゐられなかつたので、椅子を離れて、そちこち挨拶してゐた。

ふと泰一を見つけたので、葉子は厭だつたけれど、目が行違つたのを汐に、少し遠い所でお辭儀しようとする、彼れもにっこり笑つて、傍へよつて來ながら、

「暫くでしたね、相變らず御盛んで……よく來てくれましたね。」

「有難うございます。今日はお目出度うございます。」

「いや、有難う。」泰一は軽くお叩頭をして、「お蔭でまあ何うにか恙うにかね。私の方は御存じのとほり、親父が死んでから、何もかも滅茶々です。これからがなかなか骨がをれますよ。一時は日東と合併しようかと思つたくらいでしたけれど……。」彼れはこんな話しをしながら、以前のことは忘れたやうであつた。

(四)

氣が付てみると、餘興が始まつたと見えて、人がぞろ／＼と室を流れ出て行くので、泰一も話し半ばで、「さあ何うぞ彼方へ。」と、慇懃に言ふのであつた。

弱點があるので、今日は莫迦に腰が低いと、葉子はをかしく思つたが、この頃東キネの仕事に働いてゐるので、思ひどほり安住と云ふ田舎大盡を資本主に引入れたことを、ひどく得意に感じてゐるらしいかつた。

大塚はもう傍にはゐなかつた。葉子は泰一と一緒に室を出て、餘興場の方へと歩いて行つたが、途中端なく秋葉と出逢つてしまつた。彼も一人の辯士と話に夢中になつてゐたが、こつちも泰一と話しながら歩いてゐたので、つひ避ける機會を失つてしまつたのであつた。

秋葉は瀟洒なタキシードか何かを着込んで、頭髮を綺麗に後ろへ撫で上げてゐたが、澄切つたやうな蒼味をもつた目が、今日は殊にも美しく見えた。彼も葉子の今日の美しさに、目を睜つた。

「やあ、よく來ましたね。」秋葉は少し冷淡に言つた。

葉子は何といつて挨拶していか解らなかつた。今日の場所へのこのこ出てこられる體ではない筈なのに、よくも厚かましくめかし込んで遣つて來たものと、秋葉は思つてゐるだらうと思つた。

「ほんたうに暫くでございました。」葉子はさう言ひながら自分が澄してゐるやうに見えるはしないだらうかと、氣にかゝりながら、結局やつぱり澄してゐるより外なかつた。

「さうですね。あれは去年の十一月でしたから……。」秋葉はあの時のことを思ひ出したやうに、急に沈んだ顔をして、

「あれから逢ひませんね。勿論僕はあの時からツルミスタヂオはお暇にしちやつたんですからね。結局その方がよかつたです。僕も莫迦だと思ひましたね。とかく感激し易い方だもんですから。」

それは確かに當つけの脈味だと思はれた。葉子は顔が曇らなかつた。

「今日はお獨りですか。」秋葉はきいた。

「は。」

「荒井さんは來ないんですか。」秋葉は冷すつもりでもなかつたが、つい言つてしまつた。

葉子は聞くのが辛かつた。しかし何うせ怨みを言はれるなら、もつとメスで刺すやうな、辛辣な言葉が聞きたいと思つた。

「荒井さんを御招待しなかつたんですね。」秋葉は子供っぽい調子で、わざと泰一にきいた。

「荒井？ 君はまた何うしてそんな事を言ふんだ。皮肉ぢやないか。」泰一は窘めるやうに言った。

「うむ、さうか。考へてみれば、荒井さんは今夜の花嫁さんのお父さんなんでしたね。」秋葉はわざとらしく言った。

餘興場へ入つて来た。葉子は何だか秋葉に絡みついて行きたいやうな気がした。何んなに皮肉や厭味を言はれても、彼が自分に執着をもつてゐることを知るだけでも、気が安まるやうに思った。彼はほんたうに自分を憎んでゐるだらうか。それとももう問題にしてゐないのだらうか。葉子はそれが知りたかつた。

泰一は比較的前側の座席がすいてゐるのに氣付いて「もつと前へ出ませう。」と言つて、ぶん／＼先きの方へ出て行つた。葉子もそれに従つて行つた。そして席についてから、秋葉が何うしたらうかと、そつと四邊を振り返つてみなが、秋葉は中途どこかに引かゝつたと見えて、傍にはゐなかつた。

葉子は何だか寂しかつた。

人々が漸く場席におちついた自分に、陽氣な鳴り物につれて丸一の神樂が初まつた。

(五)

暫くすると、その演藝中媒介者につれられて、智恵子と金作が葉子のつい前列の、しかも智恵子はち

やうど斜向の椅子に案内されたので、腰をかけようとして、ふと葉子と顔を見合せた。二人は嬉然してちよつとお辭儀をした。それと同時に、狭い通路を隔てた隣りの空席へ、夫婦らしい男女が来て椅子を取つたが、見るとそれが須永英三であつたので、葉子ははつとした。

勿論東キネ關係の色々の人に逢ふだらうとは覺悟してゐたけれど、須永に隣りへ來られたことは、葉子に取つては餘り自由な氣持ではなかつた。

須永は何心なく椅子にかけたがひよいと葉子を一瞥したまゝで、舞臺へ視線を送らうとして、急に氣がついたやうに、今度はちつと彼女の顔を見た。葉子も倏きがちに彼を見た。そして「須永先生でいらつしやいましたか。私山野でございます。」

「あゝさうでしたか。何だか様子がかはつてゐるので、悉皆お見それしてしまひました。いや、よろこそ……。」彼は少し狼狽氣味で、さも親しげに言ふのであつた。

「まだお悦びも申しあげませんで……本當にお目出度うございました。今晚は又御招き下さいまして……」
「は、有難う。これこそ不思議の縁でしてね。」英三はモオニングの隠しから、手巾を引張出して、鼻をふきながら、落着のない調子で、

「しかし不思議なところで逢ひましたね。うむ、さうですか。よく來てくれました、いや、貴女の人氣は實にすばらしいもので、私も蔭ながら成功を悦んでゐますよ。」

「何ですか……。」葉子は極りわるさうに口籠つた。

「いや、なか／＼何うして、私も二つばかり拜見しましたよ。」

「さうですか。」

その時須永は初めて気がついたやうに、隣席の峰子夫人の方を向いて、何か私語いたと思ふと、今度は葉子を拆返つて、

「貴女は私の家内を御存じなかつたですね。これが家内です。」

峰子も葉子も、身を反してゐる英三の左と右から、挨拶を取交した。そして、其がすむと、三人は一樣に舞臺の方へ目をやつた。

その變當が拍手と笑聲のうちに終りを告げたのは、間もなくであつた。

「どうです、近頃何か撮つてゐますか。」須永は葉子に話しかけた。

「暫らく、づるけてをりますの。」

「いや、智恵子や大塚からは時々消息は聞いてゐましたがね、何うして私のところへ遊びにこないだらうつて、始終さういつて噂をしてゐたんだ。」

「本當に御無沙汰ばかりして、済みませんでした。あの時あんなに御厄にかけておきながら、つい我儘が生まれて……お詫びにあがらうあがらうと思ひながら、無精してをりますうちに、上がりにくくなつ

てしまひまして。」

「お詫なんかに來る必要は少しもないのだ。あの時は私も大事を取つて、あゝは言つたやうなもの、今となつてみれば、貴女の方が勝なんだ。大塚から其の事を聞いてゐました。私も貴女が、田舎から出て來たばかりで、一躍してツルミのスタアにならうとは思はなかつた。私が見損つたのだ。」

「いゝえ、ほんの僥倖だと思つてをりますの。」

と看ると、智恵子は伏目がちに、ぢつと硬くなつてゐたが、その時ひそ／＼と何か金作と話してゐた。

金作は智恵子に言はれて、初めて後ろに葉子のゐるのに氣づいたらしく、ひよいと振向いて見た。

葉子はわざと俛いてしまつた。

舞臺では落語家が一人出て來て、ちよこんと坐つて前置の愛嬌を振蒔いて、満座を微笑させてゐた。

(六)

その後手品が二つ三つあつてから、直ぐ食堂へ移つた。葉子はちやうど新夫婦と須永夫婦との間に挟まれたやうな形ちで、そこを出た。で、自然金作とも顔を合すことになつたので、お互に口を利いた。智恵子にもまだしみ／＼悦びを言はなかつたので、その時初めて挨拶した。

「お見事な花環なんか戴いて、有難うございました。」

「いゝえ、どうか、あの是からも……。」葉子が言ふと、智恵子も、

「それは私からもお願ひしなければならぬ事ですわ。安住もさう申してゐました。悪い感情なんか少しも残らないから、過去のことは單に友情の現れとして、お互に悪い意味に取らないやうに。秋葉さんと提携したからと言つて、箇人として貴女に敵意を挟むの何のつて、そんな偏狭な考へは少しもないんだからつて……。秋葉さんは何うだか知りませんが、あの方だつて貴女のお心持はよく解つてゐらつしやる筈ですもの。たゞあんな關係で日東には留まつてゐる譯には行かなかつたんですけれど。」

「その代りツルミスタヂオは随分寂しくなつてしまひましたの。何しろ秋葉さんについて、腕のある人が三四人ぬけてしまひましたから。」

「一時はちよつとね。でも、直き埋合せができますわ。何しろ各方面にかけて、妻腕の荒井さんですから」智恵子は少し燥いだやうな調子で言つて、

「でも私一番困ることは、今までのやうに貴女のところへ遊びに伺へなくなつてしまひましたわ。」

「でも私大抵一人ですよ。」葉子は答へたが、何だか一人取残されたやうな氣がした。そして智恵子と親しい口を利き合つてゐる間にも地位が地位だけに、いくらさう思つても、もう今迄のやうな明つ放しの態度では交際へないやうな氣がした。安住や秋葉ともお互に背き合つてしまつて、その間に大きな溝が掘られてしまつたのであつた。同時に荒井が唯一の支持者として、遽に彼女の生活に深く浸潤して來るのを感じた。

食堂では葉子は智恵子の友人として、メインテーブルと垂直におかれた二つの長い座席の一つの中段に案内されたが、見たところ知つた顔は周圍に一人もゐなかつた。葉子は結局それが氣樂であつた。そして初めて自分に還ることが出來た。名實共にツルミスタヂオの明星としての、今後の自分の矜りが如實に自覺されたやうな氣もしたので、座についた時、あつち此方から自分に集まつた人々の視線や私語が俛いてゐる彼女の目や耳に、自然に反射してくるのを氣強く感じないではゐられなかつた。

皿と料理が時を切つては幾回となく運ばれた。そして又幾回となく多勢の給仕人によつて、敏速に撤回された。そして、葉子が機械的にフォークやナイフを使ひながら、少しづつ食べちらしてゐるあひだ、夜宴はいつかデザートコースに入つて、體つきのづんぐりした媒介人がばち／＼響く拍手に迎へられて起あがると、結婚披露の挨拶として一場の卓上演説をやりはじめた。それは實際下手な演説口調で葉子の知る範圍では辯士あがりか何かの東キネの、重役だらうと思はれた。

「それから一寸と満場の皆さまに一言申しあげておきたいのは、安住家と須永家の御縁組について、多少世間的の誤解があるやうに考へますので……或ひは私一箇の邪推かも知れませんが、邪推ならば甚だ結構で……。」

笑聲が隅の方から起つた。

この結婚は何等營業上の政略から來たものではございませんので、實は新郎新婦御兩人の深い相互の

理解と愛に基づいて成されたもので、文字どほりの自由意志から来てゐるといふことを、ちよいと申しあげておきます。」

また笑聲がおこつた。

葉子も思はずくすと笑つた。

(七)

葉子は何のために、形式的な挨拶のお終ひへもつて行つて、あんな蛇足を喰着けたのかと、不思議に思つたが、殊にこの席に連つてゐるほどの人は、大半安住が葉子に戀してゐたことを知つてゐると見えて、その挨拶がすむと、忽ち人々の視線が葉子に集つたくらゐるだから、尙更それは蛇足であつた。この結婚が愛に出發しないことを吹聴でもしたやうなものであつた。

葉子は幼稚な矜を感じたが、智恵子夫婦に對しては氣の毒に思つた。

その次ぎには須永が起立した。葉子は英三が何を言ふかと思つてじつと耳を澄してゐたが、それは寧ろ平凡な一通りの挨拶にすぎなかつた。たゞ最後に多少彼の至情らしいものを吐露したので、それが人々の胸から胸へと響いて行つたやうに見えた。

「最後に私は衷心から、殊に智恵子のために今後の結婚生活の幸福を祈つて止まないのをごさいます。今夜此の席に列なつておいでの方は、多少御存じだらうと思ひますが、智恵子と私との親子關係から申

しましても、今日まで愛撫し愛撫されて來た子供と別れることは、私に取つては自分の子供があつたとしても、これ以上にも寂しい事ではありませんが、是からは今後の良人たる安住さんにそつくりお任せしてしまふ譯なので、何うか何分にも私以上の愛をもつて、末長く面倒を見てやつて戴くやうに、殊にお願ひ申しあげる次第であります。私も哀愁はありながら、これで先づいくらか重荷がおりたやうな譯で、いくらか氣が弛んだやうな安心もあるのでございます。」

英三はさう言つて、胸が迫つたやうに、手巾を引出して鼻をふきながら、遽に坐つてしまつた。

勿論それも別に異つたことではなかつたけれど、英三が義理の親であるだけに、葉子も何となく涙ぐましい氣持ちになつたと同時に、身につまされるやうな遺瀾なさを感じた。そしてこんな義理の父に愛されて來た智恵子が、荒井に反感をもつのは無理のないことだと、そゞろに同情された。

しかし葉子はさうした感傷的な氣分が、胸を壓しつけるやうに感じて、そんな義理合の親子關係など、實際堪らないと思つた、荒井に反して、須永がめそめそし過ぎるのだとも考へた。

その次ぎに、拍手に送られて、秋葉が立つたのは、ちよいと意外であつたが、その演説が全然主觀的のものであつたことが、更に葉子を驚かした。

彼れは演説の中期に、脱線的にかう云ふことをすらすら辯つた。

「……このお芽出度い席で、私は智恵子さんのお父さんを非すやうなことは口にしたくありませんが、

智恵子さんのやうに聰明で、純真で、色々の意味でこの御結婚が、殉情的な美はしい人間味から出發してゐる……少くとも私自身はさう言ふ讃辭を捧げてもいゝと信じますので……その智恵子さんとは漸く、昨今御交際を願つたにすぎないのですが、生みの親御の荒井さんとは、長いあひだの資本主と被傭者の關係で、その人格も大抵知つてゐるつもりです。同じ血が通つてゐても、かうも質がちがふものかと、寧ろ不思議に思ふくらゐ、すつかり智恵子さんに感服してしまつたのでございます。今夜お集りの方のなかには、無論節操の何たる事かくらゐるは御存じのない方は、一人もあるまいと思ひますが、世間にはさう云ふ人も多いことですから、それらの人には、どうか智恵子さんのやうな方の爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいんです。先程もお媒介の方が仰つたやうに、この結婚の動機には、何等の打算も妥協もないので、新郎新婦ともに、全く今まで理想に描いてゐたやうな愛人を偶まお互に發見し得た悦びと感激とから出發されたので、その他のことはほんの附帯條件にすぎないことを、御兩人の友人として、私はこゝに皆さんに御諒解をお願いいたしておきたいのでございます。——まあ此のくらゐで……少し酔つてゐますし、感激しやすい青年の言草として、どうかお聽流しを願ひます。」

笑ひ聲や拍手がばらばらに斷續した。席が遽にさわめき渡つた。

(八)

さすがに葉子は腹が立つた。この晴の席で、まるで直接射撃を敢てしたやうな秋葉の言草は、何とい

ふ無遠慮な侮辱であらう。勿論秋葉らしい私憤を洩したに過ぎないのだと高を括つてしまへば、其までだが、葉子にはさうは超越してゐられなかつた。まさか皆なで自分を侮辱するために、今夜の披露の席へ引張出した譯でもあるまいが、結果はさうも取れるのであつた。

戸惑ひしたやうな拍手に迎へられて、安住の友人が一人起ちあがつて、學生臭のぬけない幼々しいしかし随分理窟ばつた口調で、要もない自分と安住との交遊關係なんかを、長々と述べてゐたが、席ももうひどく弛れ氣味になつてゐたので、何うかすると外の話し聲なぞに消されて——さうでなくとも少し目が眩んだやうになつてゐた葉子には、その顔もはつきり見えなかつたし、言ふことも薩張耳へ入らなかつた。

で、先刻から口をつけなかつた、葡萄酒の盞を取りあげて、何時かのやうな事のないための用心に、二口三口飲んで、じつと我慢してゐた。

するうち其の怠屈なお饒舌も、漸く終りを告げたと思ふと、今度は須永の側にすわつてゐた、頭のペラ〜に禿げた上品な老紳士が起つて、兩家のために萬歳を唱へて乾杯をしようと、紋切形の註文を出した。それは貴族院の誰かだとか云ふ話であつた。

で、萬歳が唱和された。それが済むと間もなく夜宴が終りを告げた。新郎新婦はいつか退席してゐた。葉子は人々と一緒に食堂を出ると、急いで出口へ行かうとしたが、後から大塚が急ぎ足に追ひつい

て来た。

「すぐ歸る？」

「え。」

「自動車は？」

「多分來てゐると思ひますけれど……。」

「さう。ぢや僕送つてあげよう。」

「いゝえ、宜しいんです。」

「でもまあ……。」

さう言ひながら二人は外へ出た。外はさすがに夜風が寒かつた。そこには十臺餘の自動車が、づらりと砲のやうな鼻面をそろへて並んでゐた。運轉士の鐵公が直ぐ彼女を見つけた。

「旦那が待つてゐるから、濟んだら直ぐ歸るやうに仰やつて下さい。」

「さう。ぢや今田端から來たの。」

「一時間ほど前に、旦那をお送りしたばかりです。」

「さう。」葉子はさう言つて、傍まで來た大塚を振返つて、

「ぢや此處で失禮致します。」

「何うして。陪乗しても僕は狼ぢやないから、安心しておいで、でないと氣にかゝるから。」

「何うしてとせう。」

「何うしてども。さあ早く乗つた。人の言ふことは聞いておくものだ。」

葉子は仕方なし其を容れた。勿論大塚の親切はよく解つてゐるので、嬉しくもあつた。

「あゝ」と大塚は欠をしながら、硝子ごしに四邊を眺めてゐた。

そこには人が渦を捲いてゐた。三百人からの來會者の大部分が、そこから吐出された。新郎新婦の姿も見えた。彼等は三つばかりの花環と共に、今出て來たところであつた。

「おや、新婚旅行ぢやないのかな。」大塚は呟いてゐたが、「ではトランクは新橋へ行つてゐますからね。」と言ふ聲が微かに耳へ入つた。安住は二重廻しを着てゐたし、智恵子はコートを着てゐたが、無論旅装に着替てゐるのであつた。

さすがに一生涯の最も花やかな今夜であるだけに、何となく肅やかで陽氣な、そして嚴かで甘い情緒が、そこに醸されてゐた。葉子も淡い嫉妬を感じないではゐられなかつた。

鐵公は自動車を動かしはじめた。

(九)

大塚はやつと「やれ〜。」といふ氣持ちになつて、

「少し疲れた。」といつて、がっかり後へもたれて足を伸して目をつぶつてゐた。

三七八

風は寒かつたが、町の電燈が何となく春めいた潤ひをもつてゐた。葉子もそんな宴會に臨んだことがないのに、殊に異常な刺激を受けたので、頭腦が滅茶々々になつてゐたけれど、今夜の人々の感情が、殆ど總て自分一人を對象にして、勝手に蕩揺してゐたのだと思ふと、ちよつと滑稽にも感ぜられた。「變な披露式だつたね。」大塚も思ひ出し笑ひをしながら、「一體何のためにあんな事を言はなければならなかつたのかね。」

「變でしたね。誰方も興奮なすつて……。」

「安住と智恵子の結婚に、何も第三者の感情に當てつけるやうな事を言はなくても可かりさうぢやないか。あの媒介者も媒介者なら、秋葉も秋葉だよ。」

「總てがまるで樂屋落ばかりだから。新郎新婦は其方のけと云ふ形だつたわ。」

「本當だ。」大塚はうふと笑つて「あれぢや葉子さん一人が今夜の宴會の中心問題になつてゐたやうなものだ。僕は智恵子や安住に氣の毒なやうな氣がした。實際變だよ。秋葉の言草と來たら、成つちや居ないんだからね。」

「私憤を洩したのね。」

「さうさ。」

「私に復讐しようといふのなら、何にも言はない方がね。私秋葉さんて、あんな方ぢやないと思つてゐました。未だしも安住さんの態度の方が紳士的ですよ。」

「あれは今夜の花婿だもの。」

「でも智恵子さんと如何にも睦まじくしていらしたのが、好いと思ひましたわ。」

「悪怯れないでね。まあ、あれで納るんだらうが、何だか寂しさうだつた。しかし葉子さんも氣色が悪かつたらう。お察しするよ。僕にも何かしやべれと云ふ命令だつたけれど、何も言ふこともなし、智恵子が探つたいやうな感じがするだらうと思つて、平に引退つたのを。葉子さんのために辯解を試みようとも思つたんだが、それぢや却つて油に火を注ぐやうなもので、折角のお目出度い席が悪化して來るからね。まあ我慢するさ。」

「私もするぶん腹が立ちましたけれど、あの人も堪へられない氣持なんでせうから、あゝやつて當つても耳こすりでも言つてをれば、いくらか溜飲が下がるんだらうと思ひました。あの人だつて少し言過ぎたと思つてゐたに違ひないですわ。」

「何うせ餘り氣持の好いことぢやないんだからね。」

「言へば言ふだけ、不愉快になつたでせうと思ひます。何しろ爪の垢でも煎じて飲めと言ふんですからね。」葉子は笑つてはゐたが思ひ出しても口惜しかつた。で、自然に熱い涙が頬を傳はつた。

「秋葉は感情家だね。」

三八〇

「それあ智恵子さんは賢くて純でいらつしやるでせうけれど、いくら何でも随分侮辱してゐると思ひますわ。あれが男の女に對する態度でせうか。」

「狂氣じみてゐるね。人の弱味を突つくと云ふことは、何にしても感心できない。僕のやうな冷い頭でも、あの時だけは、ちよつと嚇としたからね。」

「西洋に決闘のあるのも、無理はないと思ひましたわ。自分に悪いところがあると思ひますから、ちつと我慢してゐましたけれど……。」葉子は潰瀾なげに言ふのであつた。

「どうも飛んだところへ來たと思つたよ。」大塚は嘆息した。

「だつて行かない譯には行かないでせう。行つた以上は、智恵子さん達に對する私の好意ぐらゐは、驟然しないでおいてくれても可かりさうなものなのに、餘りだと思ひます。」葉子は泣出してしまつた。大塚は慰める術を知らなかつた。

「いゝよ、可いよ。荒井がついてゐるんだから。」大塚は子供をすかさやうに言つた。

(十)

だら／＼した坂になつてゐる横町の入口で、自動車をおりるとそこで、大塚は葉子に別れて、その自動車で引返さうと思つたが、葉子がちよつとでも寄つて行つてくれないかと云ふので、大塚も仕方なし

木蔭の深いところを附いて行つた。

荒井は大住を相手に、奥座敷で碁を打つてゐた。酒が出てゐた。

「唯今。」葉子は襖のところで、手をついてお辭儀をした。

「お歸り。何うだつたね。盛んだつたかね。」荒井は機械的にいつた。

「え、ずるぶん。何しろ三百人からの人ですもの。」

「さうか。それぢやなか／＼大變だつたらう。」

「私、大塚さんに送つて來て戴きましたの。」

大塚は少しおくれて、その時のそりと入つて來た。

「やあ、柄にないことを遣つてゐるね。」

「何うも失敬。もう直きだ。何しろ基石なんでもは近年手にしたことがないんだからね。」荒井はさう言つて葉子を振り返りながら、

「素敵だね。その扮装ぢや今夜の花嫁も顔色がなかつたらう。」

「こつちが顔色がなかつた方よ。」葉子は苦笑しながら、「私あの人達から、散々油を絞られちやつたの。」

「何だつて？ 何を油を絞られることがある。」

「私今夜くらゐ口惜しいことなかつたわ。私わざ／＼恥をかきに今夜の宴會に出て行つたやうなもので

すわ。」

「へえー」と荒井は盤面を賸めながら、「それあ又何うした譯だ。」

「碁どころぢやないが、まあ」と勝負つけたまへ。後でゆつくり話すから。」大塚も脅かすやうに言った。

「へえ。何かそんな事があつたのか。」荒井は漸と此方向きながら、

「秋葉が何か面當をやつたらう。」

「まあ可いよ。これは寧ろ葉子さんの主観問題だからね。煎じつめれば孰が侮辱されてゐるか、疑問だからね。」

「詰り何うなんだ。」荒井は寧ろさういふ風に、葉子が秋葉から憎悪の目を以て見られてゐるのを悦びながらも、小癩に觸つた。

「秋葉が起つて少しばかり饒舌つたところ、鬱憤を洩さうとして、つい脱線してしまつたのが間接に葉子さんを侮辱したことになるんだ。」

「それに今夜の空気が、擧つて反葉子気分で持切つてゐたんですもの。皆なして顔を見てやれ、と言つた風だつたんです。」葉子は言ひたいことが胸に悶へたやうで、遽に口惜さうに涙ぐんだ。

「反葉子だつて？へえー。そいつは怪しからんな。人の好意に侮辱を以て酬いるなんか下劣ぢやないか。第一結婚披露の趣意でもあるまい。そんな尻の穴の小さいことで活動會社を經營しようなんて、

片腹痛いぢやないか。」

「しかし其奴は少し……。須永君や新夫婦の關したことぢやないんだから。」

「しかし彼等が僕に對して、敵意をもつてゐることは、明かな事實だ。それならば何故男らしく荒井に打突かつて來ないんだ。不用意に出て行つたのに附込んで、弱いもの苛めをするなんか怪しからんぢやないか。」荒井はぶん／＼怒り出した。彼は酔つてもゐた。

「いや、そこまで考へてやつた事ぢやないんだ。山野葉子がそれだけ世間の問題になつてゐるといふだけの話さ。」

荒井も遽に挫けた形ちで、口をもが／＼させながら、眼をばちばちさせてゐた。

「で、君は葉子を擁護してくれたんか。」

「いや擁護はしない。葉子さんの立つてゐる立場が立場だからね。僕が横槍をいれる所でもないぢやないか。」

「何だ相變らず張合のない男だな。」荒井は吐き出すやうに言つて遽にさら／＼と盤面を洩ひはじめた。

凋落

(一)

漣子はツルミスタチオの決裂が、何を意味してゐるかを、大抵知つてゐた。誰の口からもそれとは洩れなかつたけれど、しかし矢張隙間をくゞる水のやうに、何時とはなし彼女の耳へ入つた。てつきり荒井が葉子を田端へ喰へ出したのだと解つた。勿論荒井の足が、めつきり遠くなつたことが、それを證明してゐた。しかし漣子は、手術後の體に何の故障もなかつた割には、思つたほどの効果がなかつた。引續いて鼻の療治に通つたり、齒の修繕に手がかゝつたりした。

温泉から歸つてから、めき／＼肉がついて來たには來たが、手術の結果何處か感じが違つて來たやうに思へた。そんな事から、多少失望してゐた。いくら手を盡して病氣を癒しても、縛の入つた體は矢張それだけのものだと思ふ氣がした。さうは思つても、手術を轉機として、急にお婆さんじみて來たことが、ひどく心細かつた。もう荒井の心を惹着ける魅力もないのかと思ふと、此の頃一層幻滅を感じて來たらしい荒井の態度が腹立しかつた。

「さう方々繕ひ普請に憂き身をやつすやうになつては、女優の末路も惨めだね。」荒井はさう言つて冷かした。

荒井は思ひ出したやうに、其時暫くぶりで遣つて來た。漣子が餘り長く休んでゐたので、次ぎの仕事に出演しては何うかといふ相談もあつたので。

漣子はちやうど芝の齒醫者へ行かうとして餘所行きに着かへながら、何うしたのか手提金庫なんか持出して、何か調べてゐた。

「どうせそれ然うですとも。私でさへ自分に愛想が盡きるのですもの。」漣子は言つてゐた。

荒井はよく貯金帳なんか引出してゐる彼女を見た。もう一廉の財産家で、精確なことは荒井にも判らなかつたけれど、いつ何時スタチオを罷めても、約ましくしてゐれば、生涯食べるに困るやうなことはないだらうと思はれた。荒井も金に困りはしなかつたけれど融通が利くだけで、別に財産といふ程のものもなかつた。彼は何ういふ場合にも、貯蓄を忘れない彼女の心根を憎く思ふこともあつたけれど、結局その方が安易であつた。

「一體お前の財産は何のくらゐあるんだ。借りようといやしないから、いつてごらん。」荒井は揶揄ふやうにいつた。

「財産ですつて。まさか十萬も二十萬もある氣遣ひはないでせう。」

「三萬になつたとかいつたのが、あれが地震前の恐慌時代だつたからあれから、少くとも一萬圓……まあ五萬圓は大丈夫だな。」

「そんなに有りやしませんよ。安い月給で、そんなに出来て堪るもんですが。それに私は莫迦ですから、ちよい／＼人に瞞されるんですよ。」

「實際そんな事も、今迄にはあつたのである。知合の待合の女將に高い利息で貸したのが、滅茶々になつたり、權種株を押しつけられてふいたりして、荒井に笑はれたので荒井に秘密で利殖を圖ることは、懲々したが、それでも時には目の先の慾で引かゝるのであつた。」

「とにかく己よりも金持なんだから、今度のやうな手術でもして、うまく行つたから可いやうなもの間違ひでもあつた場合には困るぢやないか。」

「貴方は私の死ぬのを待つてゐるんですか。死んだら皆な捲きあげようと思つて……。」

「横濱に甥があるぢやないか。」

「あれですか。さうね。でも私まだ容易に死にませんから。」

「一といふ事があつたら、何うする。」

「そんな縁起でもないと言つちや厭ですよ。今日はまた何うしたのか、偶に來れば死ぬときの心配なんかして、随分だわ。」

「か。お前は用意がいゝから、己も安心だよ。」

「いつ何時棄てもいゝと言ふんでせう。厭よ貴方は遠まはしに來るのね。」

(二)

荒井は其の意味が大抵判つたけれど、わざと黙つてゐた。柔軟な葉子の感情や、初々しい手觸りを思ふと、漣子は少し廢類しすぎてゐた。荒井に頼りながら、頼れなくなつた時、用意に怠りないのも、感じが好くなかつた。しかし葉子ではまた他哩のない思ひのすることもあつた。

「貴方は勝手の悪い時は、黙つてゐるのね。」漣子は甘えるやうに憎々しさに言つて、荒井を尻目にかけた。

「何が。」荒井は薄笑ひを浮かべながら呆けてゐた。

「ツルミスタチオが、何うしてあんな風になつたかと云ふことは、私よく知つてゐますよ。」

「秋葉の一捲が脱退した事かい。」

「しかもぞろ／＼目黒へ行つたといふぢやありませんか。」

「それが何うしたんだ。どうせ萍のやうな藝人の事だもの、彼方へ行つたり此方へ來たりするのは、當然のことだらうぢやないか。そんな事をお前が心配せんでも、己のスタチオには役者が澤山あつて困るんだから。」

「貴方は葉子さへゐれば澤山でせうけれど、女優だけぢや芝居はできませんわ。それに葉子の人氣だつて、何時まで續くか判りやしません。今が絶頂です。相手の秋葉がなくなつちや、寂しくなるのは當

然です。貴方は秋葉から葉子を撈取つたといふぢやありませんか。」漣子はさう出ては拙いと思ひながら、つい我慢がしきれなかつた。

三八八

葉子への愛は、今までの浮気とちよつと違つてゐるやうに思へた。彼は何んな場合にも漣子を中心として動いてゐた。二三の女優や藝者に關係をつけたことはあつたが、漣子を全くすつぽかしてしまふやうな事はなかつた。その點では漣子は自信をもつてゐた。しかし今は何うやら其が崩れて行きさうであつた。漣子は荒井が前衛にしてゐる築地の待合へ、彼が本當にそこにあるか何うかを突留めるために、いきなり自動車を買つて行つたこともあつたが、荒井が來てゐるやうな氣振は少しもなかつたし、萬更知、ない顔でもないの、上りこんで女將と話してゐるうちに、辻褄の合はない事が二三あつた。女將は孰が何うとも言へないと云ふ、曖昧な態度で、むしろ漣子に好意的な忠告をさへ與へるのであつた。「言つていゝ事と悪いことゝござんすけれど、是なんぞお教へ申して怨まれるか知りませんけれど、私共でいくら跋を合さうとしても、何うせ知れずにはゐない事ですからね。」

「さうですとも。其ならそれと言つてくれれば、何でもない事なんですよ。」漣子も誘ひ出すやうに言ふのであつた。

「だから私もさう申すんです。極りを悪がるお年でもなし、かう申しては失禮ですが、貴女もお素人といふ譯ぢやないんだから、さつくばらんにお話しなすつたら、却てお互にせい／＼して可いぢやござい

ませんかつて。」女將は言ふのであつた。

「本當ですね。私にしたつて、そんな事はもう何うでも可いくらゐるものなんです。却て助かるんです。」しかし漣子は口とは反對に、可成狼狽してゐた。葉子を田端へ唾へこんだことは、想像の通りだと思はれたし、スタチオに決裂を惹起してまで、葉子を秋葉から撈取つたことは、今迄の行方とまるで違ふやうに思へた。しかし其を言ひたてれば、荒井がどんな態度に出るかも知れなかつた。

漣子はわざと冷淡な態度を取らうと用心してゐたが、荒井が餘り澄してゐるので、つい平氣ではなれなかつた。

「己が葉子を取つたつて？」荒井は神経質な笑ひ方をしてゐた。さすがに彼も漣子が恐かつた。

「取つたんでなくて何でせう。」

「それが何うしたと言ふんだい。」

漣子は腹が立つたけれど、突つかゝるのは損だと思つた。

「秋葉なんかと競争するほど、あの女が氣に入つてゐるんですか。」

「それも時はすみなら仕方ないさ。」荒井は少し弱い音を吹いた。

(三)

漣子はいつか長火鉢の前へ來て立膝で煙草を喫してゐたが、あれ程手なづけようとしてゐた葉子に結

局荒井を取られてしまつたのだと思ふと、峰子と同じ運命が、今自分に巡つて来たやうに思へて、それだけでも自分の時代がもう過ぎ去つたといふことが、観面に感ぜられた。で、荒井を全部取返すことは出来ないにしても、葉子にだけは獨占させておけないやうな気がしたが、荒井にぶつ突かつて行つた處で、自分がへたばるより外なささうであつた。

「だから其ならそれで可いんです、そんなに好きな葉子なら、何うとも貴方の自由になさるのも可いんですけれど、私といふものに對して葉子がそれで済むと思つてゐるんでせうか。お父さんと一緒に家をもちますからつて私を購しておいて、出て行つたきり一度も顔出ししないなんて、随分ひどいと思ひますよ。」

「いや、それあ葉子の責任ぢやないよ。またいくらあの女が田舎ものでも、こんな事になつてみれば、づう／＼しくお前の所へ顔出しができる氣遣ひはないからね。」

「貴方がいくら、辯解なすつたつて、私の蟲は收りませんよ。」

「辯解ぢやないんだ。葉子だつてお前を裏切るつもりで仕出來したこともないんだからね。」

「何だか判るもんですか。あの人はあんな顔をしてゐて、お肚のなかは随分づうづしいんです。それが現代なのかも知れませんが、私を知らないのなら又其處もありますよ。あんなに世話を焼いておきながら、恩を仇で返すなんてなか／＼好い度胸だね。」漣子は冷笑した。

荒井は仕方がないから、外方を向いてゐた。辯護するだけ始末が悪くなると思つた。

「貴方はそれあ葉子が可愛いでせうが、けれど、あの女も唯の女ぢやありませんよ。」

「たゞの女ぢやないつて！ それあお前は葉子を買破りすぎてゐるんだ。葉子は決してそんな女ぢやありませんよ。」

漣子はじれ／＼して来て、無闇に煙草を詰めては吸ひ、吸つてははたいてゐた。

「貴方は色眼鏡をかけてみてゐるんだから、それあ然うでせうよ。」

「さうさ。己は誰でも女をよく見る方だ。商賣が商賣だからね。お前だつて好く見てゐる方だ。」

「さうでせうよ。ふまいことばつかり言つて、それで葉子を購したんでせう。」漣子はさう言つて、ヒステリカルな口を歪めながら、長煙管で荒井の手をばつしつと打つた。

「痛え！」荒井はあわてゝ手を引込めて、「ひどい事をするなよ。己の手は灰吹ぢやないんだから。」

「葉子のあの優しい口で舐めておもらひなさいよ。」

「詰らない事言つてゐる。」荒井はさう言つて時計を見ながら、

「さあ、齒醫者へ行くなら一緒に出よう。」

「餘計なお世話ですよ。今日は行きませんよ。」

「さうか。それなら己は一人で歸らう。さうぶん／＼されちや、迎も居堪らない。」

「葉子のところへ早く行つておやんなさいよ。私も一緒に行つてやるから。そしてうんと油を絞つてや

らなげあ蟲が收らない。」

「笑談ぢやない。好い年をして……。お前さんが何時別れても好いやうに、不斷心掛のいゝ人ぢやないか。何もさう苛々するに當らない譯だ。葉子なんかまだ子供ぢやないか。あんなものを對象にして、喧嘩してみたところで、清瀬漣子の名譽になりやしまいよ。」

「おだてちや可けませんよ。子供に飽をしやぶらせるやうな事を言つて、お互に年をお考へなさい。好い年をして、あんな子供みたいなものに迷つて、貴方こそ日東會社の名折でせう。」

「迎も敵ひません。何とでもお言ひなさい。今日は喧嘩をしに來たんぢやないんだからね、齒醫者へ行かないのなら、飯でも食ひに行かないか。世間はめつきり陽氣になつたよ。偶には出てみるのもいゝだらう。」荒井はすかさずやうに言ふのであつた。

(四)

漣子は一度田端へ踏込んでやらうと思ひながら、荒立てるのは却て不利とも考へて、むしろくしやする胸を抑へてゐたところなので、今日あたり荒井と一緒に待つてみるのも面白いと思つた。

「さ、ね、葉子と一緒に何處へでも行きますよ。私あの子の顔を見てやりたいから、是から田端へつれておいでなさい。何處かへ行くなら誘つて行きませう。でなければ、行先から葉子を呼寄せるか執てもいゝんです。」

荒井は透さず答へた。

「葉子は今病氣で寝てゐるよ。あの鑛山のロケーション以來、何うも健康が勝れないんでね。」

「病氣だつて可いちやありませんか。まさか面會謝絶でもないでせう。」

「お前に行かれてがみく言はれたら快けてしまふよ。さう敵意をもつてゐられたんぢや敵はない。」

「自分が私に叛いておいて、好意をもたれようなんて、そんな勝手な話はないでせう。」

荒井は顔を擧げた。

「煩いよ。何とでも勝手にするが可い。」さう言つて、彼はまた時計を見ながら腰を浮しかけたが、

「兎に角葉子は商賣の上から言つて、大切な體なんだからね。お前だつて日東の株主である以上、利害にも關することぢやないか。騒ぎ立つのは損だよ。」

「いくら私が算盤高いからつて、それと是とは別問題ですよ。貴方はまた何だつて、會社の賣物なんかに手を出すんです。」漣子は極つめた。

「葉子の話は止さう。いくら言つたつて同じことだ。己が悪いんだから、勘辨してもらはう。出來てしまつた事を、いくら言つたつて際限のない話だからね。こゝでお前に旋を曲げられると、葉子も會社に居たくまらなくなる。それはお互に損だから、こゝは温順しく妥協した方が好ささうに思ふがね。お前の方で其の氣になれば、葉子の方は別に何でもないのだ。」荒井は有めるやうに言ふのであつた。